
魔法先生ネギま！～麻帆良に現れし赤龍帝～

IC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜麻帆良に現れし赤龍帝〜

【Nコード】

N8056K

【作者名】

IC

【あらすじ】

神の間違えで人生を終えた少年に神は新しい人生、アニメや漫画の世界に主人公を送ろうとした。しかし、またもやミスで当初の予定作品とは違う作品「ネギま！」へと飛んでしまう。その世界で主人公はあるキャラの兄として転生をする。さらには、貰ったはずの能力が使えない。諦めて一般人として生きることを決めるが、運命はそれを許してはくれなかった。彼の未来はどこへ向かうのだろうか。

原作知識有の転生モノです。できるだけ原作沿いに進めようと思

っています。オリ主、オリキャラ有のの小説です。

P r o l o g u e (前書き)

始まります。

Prologue

「ここは、どこだ？」

気が付くと俺はここにいた。

上を見れば青空だが足元は真っ白だ。

「これは、まるで雲だなんてことは、ここはあの世か？・・・なんてな」

なんて、一人ノリ突っ込みをしていると

「ふむ、半分は合っておるな」

「え？」

声のした方を振り向くとそこには

「ちゃおっす！」

笑顔で片手を上げた白髪で髭面の爺さんがいた。

「いやゝ、理解が早くて助かるわい。ということで、お主、マフィアのボスあるいはその幹部に興味無い？」

「待てこら！なにが、『ということだ！あの世ってことが』半分合ってる』ってどういうことだ！マジで、俺は死んだのか？」

爺さんの言葉をさえぎり気になったことを聞いてみる。

「そんなに、一遍に言わんでもちゃんと答えてやるわい……
めんどくさいがの」

「おい！今、めんどくさいとか言わなかったか」

「ちゃんと説明するからキチンと聞いておけよ」

「無視すんなよコラ！」

「まず、ここは現世と天界の狭間の世界じゃ。そして、お主は死んだ。以上！」

「一言、二言で済む話をめんどくさがんなよ！！てか、マジで死んだのかよ！！」

「まあ、死んだのはこっちのミスなのじゃがの」

「は？今なんつったこの爺イ

「………どういう事だ」

「実はの、今回寿命で死ぬのはお主では無く、お主の隣の部屋に住んでいる男の筈だったんじゃないよ。それを……」

爺さんが視線を後ろに向けると爺さんの後ろから美女が出てきた。
その子を見て

「あ……そ、そのう……ごめんな」一目見て惚れました。

結婚してください」ふえ／＼／＼?!」

気づいたら告つてましてました。

「え、え〜っと、私達、会ったのは初めてですよね」

「時間なんて関係ない。一目見てあなたに惚れました。」

「で、でも・・・ほ、ほら、君死んじゃってるし」

「そんなの関係無い」

俺は彼女の手を取り目をじっと見つめる

「貴女の心が知りたいんだ」

「へ、へう／＼／／」

やばい、すんごい萌えるんですけど

「おっほん!話を進めたいのだが」

ちい、まだいたのか爺イ

「ちなみにその子はワシの娘じゃ」

「お義父さん、娘さんを僕にください」

挨拶は大切だよな!うん!

「まだ早いですつてば／＼／」

「まだって事は将来的にはアリと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

真つ赤になっちゃって・・・・・・・・かわいいなあゝもう

「いい加減に話を進めるぞ。それと、娘はやらん」

まあ、いきなりは無理かだが、俺は諦め無い！必ず彼女と・・・・・・・・
あ、そう言えば

「お嬢さん、お名前を伺ってもよろしいでしょうか」

「あ、はい。私の名前はアテナと申します」

「ちなみにワシはゼウスじゃ」

アテナさんか・・・・・・・・なんか女神のような名前だ・・・・・・・・ついでに爺
さんはゼウスか・・・・・・・・あれ？アテナとゼウス？・・・・・・・・ゼウスの爺
さんはアテナさんの父親？・・・・・・・・どっかで似たような事聞いた事あ
るような・・・・・・・・M A S A K A

「まあ、お主が考えている通りワシらは神じゃ」

やっぱりゝ

「ワシらは何百年とお主の世界の生死の管理をおこなってきた。そ
して今回は娘のアテナのミスで間違えてお主の人生を立ててしまっ

たという……」

「やっぱり、年上じゃ駄目ですよね」

アテナさんが少し悲しそうに言うが

「年の差なんて些細な事さ」

「でも、貴方の十倍近く離れているんですよ」

やっぱり、神様だから長生き何だね

「それでも僕の気持は変わりません。愛してます。こんな気持ちは初めてだ」

もう一度アテナさんの手を取り瞳を見つめる

「私事です……こんな気持ち初めてです／＼／」

頬を赤く染め瞳を潤ませたアテナさん見つめ合う。そして、二人の距離がゼロに……

「いい加減にせんか—————!!!!」

「うわ!」

「きゃ!」

ならなかった。

俺の名前は白河 佑太。地方の大学二年で大学の近場でアパートで一人暮らしをしていた。両親は既に他界しており親戚の家に世話になっていたが大学の入学を機に一人暮らしを始めた。もちろん彼女なんかいる筈もなく彼女無し〃年齢である。顔はいたって平凡でモテたためしがない。アニメや漫画が大好きないわゆるオタクだ。

「と、覚えてるのはこんな感じかな」

「ふむ、記憶に関しての障害は無い様じゃな。それでは行こうか」

「は？どこに？」

「どこって、もちろん別の世界に。そこで君にはマフィアのボスに・・・」

「ちょっと待て、話が見えいんだけど」

何言つてだ・・・ああ、ボケか

「ボケとらんわ」

な、心を読まれた、だと

「その顔を見れば普通にわかるわい。今回はこっちのミスじゃからの代わりに新しい人生をやらうと思ってな。つまりは転生じゃ」

「いや、いいし。俺はアテナさんと二人でここで幸せに暮らすから惚れた女と一緒にいたい。そう思うのは普通だろ？」

「私と佑太さんの二人で………いやん／＼／」

少し間をおいてから顔を真っ赤にしくねし始めたアテナさん……何を想像していたのだろうその想像を現実に見せろぜ！

「ちなみに、行先はお主の大好きなアニメや漫画の世界じゃぞ」

なん、だと。……くそう、彼女を幸せにしたい気持ちもあるが新しい世界への好奇心もある

……俺はどっちを選べば。

「行つてきてください、佑太さん」

「アテナさん？」

「世界を見て来てもつと、もつと素敵になつてきてください。その世界で人生を終えた後、まだ貴方の心が私に向いていた時、その時こそ共に歩みましょう。私達、神に寿命はありません。永遠に続く生の中でほんの少しの時間です。その間も私は貴方を見守っています。」

「………わかった。爺さん頼む」

アテナさんの言葉に俺も決意した。

「ようやく話がまとまったか」

「ああ。ところでさっきからマフィアだの何だの言っているが俺の新しい転生先って」

「もちろん、『家庭教師ヒットマンREBORN』じゃ。ここでボンゴレのボスあるいは守護者に転生して貰おうかと思っておる」

「やっぱり、俺が知ってるマフィアが出てくるのってリボーンくらいしかないしな」

「おまけで、ハーレム属性も付けてやるぞ。良かったなモテモテじゃぞ」

「マジで！これで初めて彼女とかできる！・・・あ！いや待て、俺はさっきアテナさんに告ったばかりだぞ」

アテナさんの事が気になりアテナさんえを見ると

ニコニコ

普通に笑顔なんですけど

「あの・・・アテナさん？」

「私が惚れたのですから女性の二人や三人は恋人がいて当たり前ですよ」

あれ？これって浮気公認ってこと？そう言えば神様って普通に何人も奥さんいたな。

でも、確かりボンって女性キャラそんなに多くはないよな・・・
・まさか

「よし、ではそれでいいな。ではさっそく・・・」

「ちょっと待て」

「なんじゃ？」

「一応聞いておかなければな」

「仮にだ、仮にモテるとしてだ・・・誰にだ・・・」

「そ、それは・・・」

「やっぱり、この爺イ」

「他の守護者やボスとか言わないよな」

「あ~~~~と」

「目逸らしやがった！この野郎！一部の女性が大喜びする展開を作ろうとしてやがった」

「・・・変える」

「・・・はい」

「自分の企みがバレたのでおとなしく返事しやがったな。」

「無理に転生先を強制した詫びじゃ身体能力と魔力などは上げたいてやる。それと転生先は『リリカルなのは』でどうじゃ？転生だから0歳からのスタートじゃが」

リリなのか。いいかも！魔王のO H A N A S Iが見れるかも

「それと、転生特典じゃこのサイコロを振るがよい」

爺さんの投げよこしたサイコロを見る。普通の六面サイコロだが書いてある数字が1〜4で2と3が二つの1、4が一つの変わったサイコロだ

「はよ振らんか」

「あいよ」

サイコロを投げると少し転がり1の面を上にして動きが止まる。1はどんな特典だろう

「はっはっはっあゝ運がないの転生特典は一つじゃ」

って、これって数を決めるだけかよ

「さて、どんなチート能力がほしい？なんでも一つだけやるぞ」

一つか

「一応、身体強化とかは別で上げてくれたんだよな」

「うむ、それとは別に一つやるという事じゃ」

どうすっかな〜やっぱりあれかな

「『Fate』のエミヤの『無限の剣製』がいいな」

あの背中には憧れる！あれもあんな男になりたい。

「駄目じゃ」

「なんで？」

一個なんでもくれるって言ったじゃん

「人気のある能力は複数個分貰う事にしておるのじゃ。『無限の剣製』は四つ分じゃ。ちなみに同じ作品の『王の財宝は』二つ、ナルト『写輪眼』と『白眼』は三つ分じゃな」

マジでかー・・・どうしよう・・・お！あれならどうだ

「それじゃ、『ハイスクールD×D』の『赤龍帝の籠手』は？」

『ハイスクールD×D』は最近ハマった本だ。あの本の主人公は笑えるけどやる時はやる男だ

「ふむ・・・いいじゃろう。おまけで条件を満たせば白の方の能力を使えるようにしてやろう
右だけじゃがの」

「OK！それで頼む」

「あいわかった。ホレ」

爺さんが片手を俺に向けると俺の体が光に包まれる。

「よし、これでお主には『赤龍帝』が宿った。それでは飛ばすぞ」

「あ、待ってくれ」

「なんじゃ、まだ何かあるのか？」

「ああ、大事な事」

爺さんから離れたところにいたアテナさんの元に向かう

「アテナさん、行ってくるね」

「はい、行つてらっしゃい」

アテナさんと挨拶を交わし再びゼウスの爺さんの元に向かう

「……もう良いか」

あゝ、やっぱり少し怒つてらっしゃる

「は、はい」

「フン！」

再びゼウスの爺さんの声で俺の体が光に包まれる。そして、足元か

らゆつくりと俺の体が消えていく

「あ！・・・・・・・・まずい」

「へ？」

爺さんの顔が少し焦った感じになる

「・・・・・・・・すまん、ミスったわい」

「はああああ！」

「大丈夫じゃ、転生先を間違えたじゃやけだから。まあ、頑張れ！」

「ふざけんなあ~~~~」

俺の絶叫と共に俺の体はこの世界から消えた

「佑太さん・・・・・・・・ご武運を」

P r o l o g u e (後書き)

P r o l o g u e の投稿です。いきなり、一人落としかけていますが、彼女は今後出てくる見込みは今のところありません。ゴメンナサイ。

更新速度は遅いかもかもしれませんが。最後までお付き合い頂けると幸いです。

一時間目「俺の決意は何処へいった？」（前書き）

一つ書けたので投稿します。

一時間目「俺の決意は何処へいった？」

こんにちは！白河改め佐倉 佑太です。

ゼウスの爺さんによって転生させて貰ったが、あの爺さん最後にミスリやがって予定とは違う世界『ネギま！』の世界に飛ばされちまった。

そこで俺は原作キャラ佐倉 愛衣の兄として転生した。

これは確実に原作に絡めと言っているようなものだろう。

よっしゃ！バリバリ絡んでやるぜ・・・・・・・・なんて思っていた時期もありました。

しかし、俺はゼウスの爺さんから貰ったはず力が使えないだけでなく両親が魔法使いなのに魔法が使えないという落ちこぼれだった。

しょうがないので一般人として生きる事に決めました。

この先どうなるんだろう俺・・・・・・・・

一時間目「俺の決意は何処へいった？」

「じゃあゝな」

「おう！また明日な！」

別れ道で友達と別れ帰路につく。

魔法が使えないとわかってから数年、俺は今普通の小学五年生をやっています。

魔法が使えないのだから魔法使いにならずに一般人として生きると両親に告げると、当初は両親たちも自分たちの子なんだから諦めずに勉強すれば”立派な魔法使い”になれると言っではいたが、俺の中に魔力がほぼ感じられないとわかってからは何も言わなくなつた。

こうして俺は、極普通の一般人として生きている。

だが、妹の愛衣ちゃんは普通に魔法使いの才能があつた。

しかも、普通にいい子です。

魔法が使えない俺に普通に接してくれるし、逆に兄妹の仲はいい方だ。

そんな彼女だが、現在はアメリカのジョンソン魔法学校に留学している。

この辺は原作でも説明があつたな、結構優秀らしいと嬉しそうに両

親が話していた。

俺が魔法使いになれなかった分、妹に期待しているのだろう。

妹から何度か手紙が届き魔法を覚えるのが楽しくってしょうがないらしい。

そんな手紙を読むと羨ましいと思う事もある。

などと考え事をしていたら、何時もと違う道にきてしまった。

「あれ？道を一本間違えたかな。まあ、たまには違う道で帰るのもいいかな」

と、さらにその道を進んでいく。

それが間違いだったのかもしれない。

その道を少し進むと道端に爺さんが倒れていた

「うつ・・・・・・・・・・」

うめき声が聞こえるので生きてはいるようだが・・・・・・・・このままほっとくわけにもいかんしな

「おじいさん、おじいさん」

「う・・・・・・・・・・」

「大丈夫ですか？おじいさん」

「うつ……は……」

「は？」

何か言葉が聞こえたので耳を近付ける

「……………は……らが……………へ……………った……」

「……………」

空腹で倒れてただけか……………とりあえず近くのコンビニで弁当でも買ってきてやるか。

手持ちの金額を確認すると弁当2つ分くらいのお金は持っていたので近くのコンビニで弁当を買ってき爺さんへと差し出す

「お……………おお!!」

差し出された弁当を抱え込みすごい勢いで食べ始める。

「……………ぷっはー！助かったわい。小僧！感謝するぞ」

全て食べ終えた爺さんは満足そうな顔で俺の方を見ている。

「で、もう大丈夫なんですか？」

「ああ、おかげでな。いや、知り合いの元を訪ねようかと思っただけ、その途中で路銀が尽きる空腹で倒れるとは思わなかったわい」

「そうなんですか。その知り合いのかたはどの辺に住んでいるんですか？近いなら案内くらいはしますよ」

一応、親切で聞いたが、次に出てきた言葉で

「いや、まだ少し距離があるの。知つとるかどうかは知らんが、麻帆良学園」というところじゃ」

「・・・・・・・・え」

俺の思考は急激に働き始めた。

まさかこの人、魔法世界の人か？いや、そうとは限らない。むしろ魔法関係者かどうかもわからないのに決めつけるのはどうかとは思うが、あまり関わらない方が賢明か？よし、すぐに帰ろう。そうしよう！

「そうですか、それでは僕はこれで」

すぐさまその場を去ろうとするが

「まあまで坊主。何か礼でもせんとワシの気がすまん」

「いいえ、大丈夫です。お構いなく」

「まあそついうな」

引き止められてなかなか帰れない。

「ふむ・・・・・・・・・・」

そんなやり取りの途中、爺さんが急に黙り込む。

「坊主……お前……いや、お前の家族に魔法使いがおるじやろう」

「!!」

「驚いたか。お主から、ほんのわずかだが魔力を感じてのぞな」

この爺さん……

「警戒せんでもよい、ワシも関係者じゃからな」

爺さんは大笑いをしているが俺は笑えなかった。

まずい、このままじゃ関わっちまう。関わらないと決めたはずなのに

「それと坊主、お前は魔法が魔法が使えるのだろう」

「……」

この爺さんなんでそんなことまで……

「ワシはその理由も知っているぞ」

「そうですか」

「ふむ……飛びついて聞いてくるかと思ったのじゃが……
知りたいとは思わんのか？」

正直、気にはなった。だが、才能が無いだけだと自分を納得させてしまっているの、変な期待は持ちたくなかった。だから

「いいです。僕は魔法と関わらずに一般人として生きてくことに決めましたから。両親も承諾済みです」

「そうか……じゃが世界がそれを許してくれはせんだらう（ボソッ）」

なんとなく納得はしていたようだが、爺さんの後半の言葉は俺にはとどいてなかった。

「よし、飯のお礼じゃ！ワシのとおきの一つをお前に教えてやるう」

「取っておき？」

「そうじゃ、とある古武術じゃ。今の世にはワシしか使い手があらんがの」

「遠慮しておきます」

「古武術じゃから魔力なんぞ必要ないし気を多少使うくらいじゃし」

「だから、いいですって。俺、暴力は嫌いなんで」

「なあに、二、三年あれば普通に達人クラスぐらいにはなれるわい」

「人の話を聞け！！」

「じゃ行くかの」

爺さんは立ち上がり俺を脇にかかえる。俺の言葉には耳を貸す気は無い様だ

「ちょっとそういう事は両親とよく話してから……て、あんた麻帆良に行くんじゃ」

「両親にはワシからキチンと話してやる……麻帆良は……
・後でいいじゃろう」

「ちよっ」

そして、俺は爺さんに抱えられその場から姿を消した。

愛衣 side

はじめまして佐倉 愛衣です。

私は今、アメリカのジョンソン魔法学校で魔法を勉強しています。

お友達もたくさんできまし、毎日がとっても楽しいです。

ここで私は”立派な魔法使い”目指して頑張っています。夢を諦めざる得なかったお兄ちゃんのためにも

私には一つ上のお兄ちゃんがいます。

お兄ちゃんは家族の中でただ一人魔法が使えません。魔力はあるみたいですが魔力自体が極端に少ないと両親は言っていました。

魔法が使えないと分かった時もお兄ちゃんはただ一言

「そっか」

と、言っただけでした。その表情は少し悲しげでした。

子供のころからお伽話のように何度も聞いた”立派な魔法使い”のお話。

大きくなったら二人で世界の人たちを助けて回ろうと。”サウザンドマスター”のような魔法使いになるという夢をお兄ちゃんはかなえる事が出来ないのです。

それなのに、お兄ちゃんは私に変わらず優しくしてくれました。

本当は辛いはずなのに、悲しいはずなのに

だから、私はお兄ちゃんの変わりにそして私自身の夢である”立派な魔法使い”なろうと決めました。

お兄ちゃんとは留学した後も手紙で互いの生活の事を書き合っています。

友達是我的事をブラコンと言いますが別に気にしてません。だって私はお兄ちゃんが大好きなんだもん

優しいお兄ちゃん。

泣いている私の頭を撫でてくれるお兄ちゃん。

困った時は何時も助けてくれるお兄ちゃん。

そして、私の夢を応援してくれたお兄ちゃん。

魔法は使えないけど私にとってはお兄ちゃんは、私だけの立派な魔法使いです。

しかし先週、両親から送られた手紙を読み私は愕然としました。

何時もは手紙を送ってきてくれるのはお兄ちゃんのハズなのに、両親からだったので不思議に思っていました。

私は不安になりました。お兄ちゃんが病気にでもかかったのか、怪我でもしてしまったのか。

そして、私の不安はあたってしまいました。……最悪な方向で

手紙を簡潔にまとめるところ書いてありました。

お兄ちゃんが行方不明になったと。

一時間目「俺の決意は何処へいった？」（後書き）

急すぎる展開になってしまいました。いきなり行方不明とかまずいかな？

ちなみに、愛衣ちゃんはブラコンという設定です。

次の話はまた少し時間が飛びます。できれば今週か遅くても来週までには投稿したいと思っています。

「二時間目、麻帆良に行こう!」(前書き)

短いですが、書きあがったので投稿します。

「二時間目「麻帆良に行こう!」」

あの日から三年が経った。

あの日爺さんに連れ去られ様々な地で修行という名の地獄の日々を送っていた。

ときには山に放置されその中で生き抜き

ときには野生の熊や虎を相手にさせられ

ときには海で、雪山で、砂漠でe t c .

とてもじゃないがよく生きていたと思うよ。

そんなある日、突然こんなことを言いだした

「佑太、ちよつと麻帆良まで言って来い」

「は?」

「二時間目「麻帆良に行こう!」」

「じゃから、麻帆良に行けと言ってるんじゃ」

「だから、なんでいきなり麻帆良に行かなきゃならないんだ？」

「ほら、お主に初めて会った時に麻帆良に行くと言ってたじゃろ」

「その途中で空腹で倒れてたんだよな」

今でも思い出す。あの時いつもの道で帰っていれば俺は今ここにはいなかったんだよな

「実はあの時、近右衛門に警備の人手が不足しているから少々手伝ってくれと話が出てたんじゃよ。じゃから、ワシの変わりに手伝て来い」

「それって三年前の話じゃ」

もう、無効になってんじゃね？

「ええい、いいから行ってこんか！これも修行じゃー！」

いやいや、あんた何でもかんでも修行修行って。この間だって金欠だからって年齢詐称薬で年を誤魔化してバイトさせられた時だって修行とか言って無かったか？しかもあんたはその店で俺のつけでさんざん飯食いやがって。

しかも、麻帆良の警備って悪魔とか普通に出てくるし、死亡フラグ

満載じゃん！

「いや、そもそも師匠が受けた話じゃ・・・」

「ええ、いいからとつと行かんか！お前は既に修行をおさめたわ！」
いきなり拳で俺を突いてくる

「修行を完全におさめる事は無いとあんたが言ったんだろう」

それを捌き蹴りで反撃するが師匠はそれを捌きさらに拳を連続を繰り出してくる最初は捌き反撃ができたが次第に捌くだけで精一杯になり最終的に捌ききれなくなり拳を腹部に受け吹き飛ばされ意識が闇に沈んだ。

「では、主・・・り・・・の子・警備・・・伝い・・・れる・・・いう事じゃ・・・」

「そう・・・、ワ・・・弟・・・・・・丈夫・・・や」

話声が聞こえる・・・一人は師匠だけ・・・もう一人は・・・

徐々に意識が覚醒してくる。

「では、確かにあずかった」

「おおっ、好きにしてよいぞ」

そして意識がハッキリしたころ

「起きたか佑太！喜べ新しい仕事が決まったぞ。しかも、学校にも通えるらしいぞ。よかったの」

俺の新しい修行場が決まっていた。

「どういう事だ・・・このクソジジイ！」

「じゃから、お主はこれからここ麻帆良で学生と警備ついでに寮の管理人の仕事をやると決まったのじゃよ。バカ弟子」

「勝手に決めるな！！」

「めんどくさいのゝいい加減諦めんか。ホレ」

師匠は俺を投げ捨てる。受け身を取りぶん殴ろうと飛びかかるが

「じゃあの、しかれやれ」

と言に残し転移の札を使いその場から消えてしまい。俺の拳は師匠の後ろにあった大きな机を破壊するだけに終わった。

「くそっ！逃げられた！」

俺が師匠を逃がした事でイラついていると

「元気な子じゃの」

「なんだてめ・・・え・・・は・・・宇宙人？」

「誰が宇宙人じゃ。誰が」

あれ、この頭の骨格がおかしい人って・・・

「ワシはお前の師匠の友でこの学園の学園長の近衛 近右衛門じゃ」

あゝやっぱり学園長さんでいらっしやいましたか。

「あゝと佐倉 佑太です」

「ふむ、では佑太君、君は今いくつじゃ？」

？なんで年齢なんか聞くんだ？ええっと、確か・・・

「今年14になりました」

「そうか、木乃香と同一年か、という事は今中学二年じゃな」

「まあ、普通はそうですけど、俺小五の途中で師匠に連れ去られたんで小五で止まってるんですが・・・」

学校に行かず修行の毎日だったからな

「ま、その辺は今後の努力で何とかなるじゃろう」

いいのか、それって？まあ一応前の世界では大学に通ってたから大丈夫だと思うけど……

コンコン

ん？誰か来たのか？

「ほ！来たようじゃな。入りなさいタカミチ君」

え！！

「失礼します、学園長それで要件とは」

おー！タカミチだー！マジで渋いな

「彼はタカミチ君と言ってこの学園の教師で同時に広域指導員じゃ」

「佐倉 佑太です。よろしくお願いします」

「はじめまして高畑・T・タカミチだ。よろしくね」

「彼は君のクラスに転入することになったからのう」

「え！！ウチのクラスですか？しかしウチのクラスは……それに明日からは……」

つつか、既に俺の意思に関係なくここに残る事が決定されてるし

「あと、寮の管理人と警備も兼任じゃ。じゃがまだ管理人室のかたずけが住んでないのじゃ。だから、こんばんは君の部屋に止めては貰えんかの？」

「それは構いませんが・・・本気ですか？」

「何がじゃ？」

「あのクラスに編入という事は・・・」

「ホントじゃ」

なんか揉めてるな

「・・・そうですか」

あ、タカミチが諦めた・・・・・・・・・・・???タカミチが担任のクラス?・・・・・・・・あれ?それって・・・

「あの・・・学園長？」

「なんじゃ？」

「俺の編入するクラスって女子中だったりしません・・・・・・・・・・よね」

「・・・・・・・・・・そそんな事があるはず無いじゃろうが」

なんだ、今の間は。しかもかんだし

「まあ明日になればわかる事じゃ。今日はもう遅いからゆっくりと休むとよい。タカミチ君頼んだぞい」

「そそうだね。では佐倉君案内するよ付いてきてくれ」

そう言うとタカミチはささつと学園長室を後にしてしまった。見失うわけにはいかないのですぐに後に続く。

なんか・・・マジであのクラスに編入させられそうなのが・・・
・・・まさかな

二時間目「麻帆良に行こう!」(後書き)

まさか、昨日の今日で書きあがるとは思いませんでした。展開が急すぎるかな？

次のもだいぶ書きあがっているので遅くとも今週中には投稿できそうです。

三時間目「二人の子供先生？」（前書き）

三話目、投稿します。

三時間目「二人の子供先生？」

翌日、タカミチは朝少し用事があるという事なので一人で学園長室に向かった。

コンコン

「佐倉です」

「あいとるよ」

「失礼します」

学園長室にいたのは学園長一人だけだった。今日も不思議な骨格してるぜ

「昨晚はゆつくり休めたかな？」

「はい」

「ところで、君の転入するクラスじゃが、女子中等部の二・Aになったから」

「はい？」

マジでか？

三時間目「二人の子供先生？」

「ふむ、すんなり了承の返事を出すとは見上げたものじゃ。それでは後はタカミチ君に・・・」

「いやいや」

了承の返事じゃないって

「男子」中等部の間違いですよね？」

「いや、女子」中等部じゃ」

「・・・ええつと救急車は119つと？」

学園長室の電話を使い119番を押すが11で手を掴まれた

「いやいや、ワシまだボケとかないから」

「どう考えても、ボケでしょう。男を女子中等部に入れようとする時点で」

「表向きは、共学化に向けての試験という事になっておる」

「そういう事じゃねえ！そんな俺じゃなくてもいいだろう！」

あのクラス危険盛りたくさんじゃん！ネギとか木乃香とか明日菜とかネギとかネギとかネギとか

「まあ落ち着くのじゃ、ちゃんと訳もある。そろそろ来ると思うんじゃないが」

「あ？」

来るって何が？

コンコン

学園長に抗議をしていると扉をノックする音が聞こえる

「高畑です」

「入りました」

扉が開くとタカミチの姿

そしてその後ろに一人の少年と三人の少女の姿がある

「学園長、ネギ君とエリカ君を連れてきました」

は？ネギ？・・・ちよつと待て

改めて入室してきた少年の姿をよく見る

赤毛にメガネそしてリュックから飛び出ている布で巻かれた長い棒、
おそらく杖だろう

俺の転入と同じ日にネギも来るのか・・・てことは、その後ろに
いるオッドアイの少女が明日菜でロングの黒髪の少女が木乃香で・
・あと一人はさっきの学園長とタカミチが話していたエリカとい
う少女だろう・・・あれ？エリカなんてキャラいたっけ？容
姿はネギにそっくりというか・・・

女装したネギ？

「ふむ、ごくろうじやったな。麻帆良学園にようこそ。ネギ君、エ
リカ君」

「は、はい。はじめましてネギ・スプリングフィールドです」

「ネギの双子の妹のエリカ・スプリングフィールドです。はじめま
して学園長先生」

ああ、双子か道理で似てるわけ・・・・・・・・・・って

「はっああああ！双子おおおおお！」

俺の大声で室内にいる全員の視線が集まる。

「ど、どうしたんだい佐倉君？」

「あ、い、いえな、なんでもありません」

やっべゝあまりの事に大声上げちまったよゝ．．．ああ、皆の視線が痛い

「学園長一体どーゆーことなんですか？」

この後はほぼ原作道理に進んでいった。ネギが二・Aの担任で英語担当、妹さんのエリカちゃんが副担任で数学担当。

そして、ネギは明日菜と木乃香と同室にエリカはまだ決まって無いそう。その間、エリカという少女がずっと俺の方を睨んでいた。一通り話が済んだところで

「ところであんた何なの？ここは女子中等部よ、なんで男のあんたがいるの？」

明日菜が俺の存在が気になり

「そつえば、そやね」

木乃香も俺の事を不思議そうに見ている

「彼は佐倉 佑太君、転校生じゃ。女子中等部の共学化へのテスト生としてこのたび君たちのクラス二・Aに転入することになった」

「共学になるんですか！！？」

「いや、そういう話が出ておるだけで、まだ決まったわけではないが一応テストとしてやってみようという話になっただけじゃ、ついでに彼には女子寮の管理人もやってもらふ。のう？」

「ん、そうみたいだな」

「でも……」

やはり明日菜はいまいち納得ができないようだ。

「そろそろHRの時間じゃ、早く教室に向かいなさい」

学園長の言葉にうなずき教室に向かう。

その途中、ネギと話していた明日菜が何か叫んで先に教室に行ってしまった

「どうかしたのか？」

「は、ははは」

「はあ」

ネギは苦笑いしエリカはため息をついていた

「じゃあ、佐倉さんは僕たちが呼んだら入ってきてください。……
よし！行くよエリカ」

「ええ」

二人はタカミチと一緒に先に教室に入っていく

そして、エリカとすれ違った時

「授業が終わったら、話したい事がある」

「え？」

俺だけに聞こえるように言葉を残し先にいつてしまった

なんとも断りきれない雰囲気。この感じは、前の世界であの人が俺をパシらされた時と同じだ。それに学園長室でのあの視線何とも言えない恐怖を感じた。

・・・なんでだ？

その後、教室に入ったネギはそこで原作通り全てのトラップにかかっていた。

教室の中でひと騒ぎあった後

「それでは佐倉さん、入ってきてください」

ネギの声が聞こえたので、教室に入るがかなり居心地が悪い。そりゃ、転入生が男だったらそうなるわな

「佐倉 佑太です。よろしく」

「『『『男ーーーーー!!』』』」

教室内大絶叫。うるせえし

「あ、あの!」

「お、落ち着いてください」

スプリングフィールド兄妹がなんとか落ち着かせようとするが効果は無い。そりゃ、女子中に男が転入してくれば騒ぎ出すのには十分だしな

「しずかに！」

タカミチの一声でクラスが静まる

「しつもん、えっと佐倉君？はなんで女子中に転校できたの」

「彼は女子中等部の共学化へのテスト生として選ばれこのクラスに転入することになったんだ」

「えー、共学になるんですか？」

「いや、一応テストしてみるだけで、すぐにどうにかなるという事ではないよ」

「ネギ君とエリカちゃんていくつなの？」

「二人とも10歳です」

「どこに住んでるのー」

「女子寮の管理人室に今日から住む」

「えー！それって佐倉君も女子寮に住むってこと？」

「そうなるな」

「「「キヤー」」」

「趣味はなんですかー？」

「恋人とかはいるんですかー？」

一人の生徒が質問を始めるとクラス全体にそれが広がっていく

このクラスってホントに騒がしいんだな……てか、女子のレベル高！普通に皆かわいいんですけど

そのまま、質問タイムに途中入しネギは授業ができなかった。

そして、授業が終わった後当然のごとく教員は教室からいなくなるが生徒の俺はそこに残るわけで、結局一日中質問攻めにあった。

「やっと、終わった」

一日の授業が終わり、俺もようやく解放された。

「さっさと帰ろ」

荷物を持ち教室を後にする。そう言えばなんか忘れてるような・・・まあ覚えてないんだからたいしたことじゃなかったんだろう

そのまま、昨日タカミチに教わった女子寮へと帰っていった。

しばらく歩くと女子寮に着く、今日から生活する俺の部屋、管理入室のドアを開けると家具などは据え置きとして普通にあっただし俺のカバンも部屋に運び込まれていたのでで今度の休みに衣類を買ってこなければ着るものが無いな、など考えて荷物をかたずけていると

こんこん

「？誰だろ？はい、開いてますよー」

そして扉が開くとそこには女装したネギ・・・ではなくて、エリカ・スプリングフィールド先生が部屋に入ってきた。

あ、そう言えばこの子に放課後、話があるって言われてたんだ。すっかり忘れてた

「少しお時間よろしいでしょうか？」

「あ、はい・・・どうぞ」

なんだ、顔は笑顔なのにすんごくやな予感がする

「それでは・・・」

すると彼女は懐から短い棒、いや、あれは杖だ、を振ると部屋に光

の粉のようなもの周囲に散らばた。

「一応、他人に聞かれると困りますので外部に声が漏れないよう結界をはらせてもらいました」

やっぱり、ネギの妹なのだから魔法使いなのは普通か……
悔しくなんかないやい。

「さて、これで大丈夫ですね。それでは本題に入りますね」

そして彼女は

「佐倉 佑太さん……いえ」

とんでもない事を

「” 白河 佑太” さん」

俺の過去の名前を口にした

三時間目「二人の子供先生？」（後書き）

なんとか投稿ができました。

正直、ネギがオリ主の部屋に来てエリカが明日菜達の部屋にいけばよくね？男が女子寮の管理人つてのも無理があるような・・・などあるかもしれませんがそこはご都合主義という事で。

次も遅くても来週中には上げようと思っています。

四時間目「二人目の転生者　そして・・・」(前書き)

四話目です。投稿します

四時間目「二人目の転生者　そして・・・」

エリカ・スプリングフィールド

本来、原作には登場していないはずの俺と同じくイレギュラーな存在存在しないハズの俺がいる事によって世界が改変させただけの修正だけなのだと思っていた

しかし、彼女はこの世界では俺しか知らない事・・・俺の前世の名前を言った

なぜ、彼女が俺の前世の名前を知っているんだ？

いや、ただの人違いかもしれない

でも、彼女の言った”白河　佑太”が本当に過去の俺自身の事を指すのだとしたら？

その事を知る彼女は何者なのだ？

「君は・・・いつたい・・・」

「そんなに警戒なさらなくても・・・私と貴方は・・・同じなんですから」

「おな・・・じ？」

「ええ。同じ・・・転生者ですよ」

四時間目「二人目の転生者　そして・・・」

彼女は・・・今なんと言った？

「転生者・・・だと」

「はい、そうですよ」

「仮にだ、仮に俺が君の言う転生者だとして、それを証明できるのかい？」

「証明も何も、転生者なら分かるはずです。本来、原作には存在しない私達が何故存在するのか。考えられる理由としては二つ。一つは自分というイレギュラーな存在に対する世界が及ぼした修正力による存在。・・・そして、もう一つが転生者という可能性です」

たしかに、俺や彼女の存在が”おかしい”と感じる方が”おかしい”のだ

「私の知る原作では女子中等部に転校生の男の子は存在しません。それに、貴方は今朝、私と兄さんを見て『双子！』と叫びましたね。

普通なら私達が双子と解つてもあそこまで驚きませんよ」

そういと、彼女はかすかに笑う

そりゃそうだ。別に双子だからってあんなに大げさに叫ぶのは不自然だ。『ネギま!』という作品の原作の知識が無い限り

「……わかった。俺が、そして君が転生者という事は認めよう」

確かに、ここまで言いくるめられれば認めるしかないだろう、俺と彼女が同類だと

「ありがとうございます。では・「だが」・なんですか?」

重要な事が一つ残っている

「なぜ、君は俺の過去の名を知っているんだ?」

そこが、どうしても気になったのだ

「……そうですね、その事に関してもお話を……いえ、先に私の過去の名を名乗りましょう」

?どうして彼女の過去の名前を聞けばわかるんだ?

「私の名は”赤羽 江利香”よ。覚えてるでしょ佑太」

「赤羽 江利香って……えええ!!」

その名前を俺は知っていた・・・いや、忘れられるハズがなかった

「え、江利香さん~~~~!!」

「はい」

俺が彼女の事を知って、彼女は嬉しそうにしているが、俺はそれどころではなかった

”赤羽 江利香”別に、彼女とは恋人だったとかそういうわけではない

普通に言えば”年上の幼なじみ”

悪く言えば”ガキ大将とパシリ”

そう、俺は過去この幼なじみにさんざん振り回されていたんだ

彼女は表向きは美人で文武両道、性格良し、絵に書いたような優等生
表向きの顔が良かったため周りからも人気があったそのせいで、俺は周囲から嫉妬や欲望の眼差しをさんざん浴びせられた

だが、裏では頑固で気が強く、自分の思い道理にいかないとすぐ手が出る腹黒女。まあ、これは俺に対してだけらしいが

そんなこんなで、俺は彼女が苦手なのだ

「ちなみに、あなたの事はゼウスという人？から聞きましたよ」

あの爺イゝ余計な事しやがって!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・アテナという女性を口説いたそうですね」

「!」

にこやかに話してはいるが、彼女の目はまったく笑ってはいなかったこの表情は・・・・・・・・やべえ

「ナ、ナニヲソナニオコッテラッシャルンデスカ？」

「あらゝ別に怒ってなんかいませんよ」

いや、怒ってないってその目で言われても説得力無いんですけど

「でも、少しイラッとはしてますね」

「すいやせんでしたorz」

謝り方の最上級の土下座を繰り出す。傍から見て10歳の少女に土下座する俺って・・・・

「でも、あれはマジで惚れたから口説いたわけで・・」

ギンッ!!

彼女の殺意の籠った視線が俺をとらえる

「イ、イエ、ナンデモアリマセン」

こつ怖えゝつて

「まあ、その事に関しては後で御仕置きをするとして……」

お、御仕置きは確定ですか……

「あなたがこれまで何をしてきたのかを話してください」

「なんで、そんなことを」

「話してください」

「だから、な」話してください」……はい」

なんでこうなるんだろう

それから、彼女にこれまでの事を話した

原作キャラの兄として転生した事

ゼウスの爺さんから貰った能力が使えなかった事

魔法が使えず一般人として生きていた事

その中で師匠にあつて強制的に弟子にされ修行の旅をしていた事

そして、師匠の変わりに麻帆良の警備の仕事をするためここに来た事

「そうですか……つまり、貴方は今のところ原作に関してはここに来た以外はほとんど関与をしてないのですね」

それが江利香さんの感想だった……ってあれ？

「なんで、江利香さん「エリカでいいわよ。ここでは私の方が年齢は下なんだし」わかったじゃ、エリカ」

「なにかしら」

「エリカってなんで『ネギま！』の内容知ってんの？」

「え？」

「え？って、エリカって漫画とかアニメって興味無いって言うて無かったわけ？」

「そ、それは……」

エリカは視線を逸らす

「まさか、俺から取り上げた『ネギま！』を読んだのk「そ、そんなことより」「」

「つ、次は私のこれまでを話すわね」

話し変えやがった

「とはいえ、特には何にもしてはいないわね。ほぼ原作通りにネギと一緒に魔法学校に通って、ネギと一緒に飛び級して卒業、そして麻帆良に来ました。ああ、ちゃんと村も悪魔達に襲われましたよ」

とんでもないことをさらりと言わなかったか？

「原作と変わった所は私がいる事と……ネギのシスコンが少し強くなっただけかしら」

その辺は大して問題にはならんだろう。元からネギはシスコンだし

「それで、どうします？」

「どうするって？」

「原作に介入するかどうかです」

ああ、その事

「まだわからん。とりあえずは巻き込まれたら巻き込まれたでなんとかするってくらいかな」

「そうですか……では、現状確認はこれくらいにして、例の事についてですが」

「？例の事？」

「御仕置きの事です」

「ですよね」

そんな嬉しそうにすんなや

「という事で、私と仮契約してください」

「おかしくねソレ!!」

なにがという事でだよ

「もゝ相変わらず頭の回転が悪いですね」

「うるせえよ!」

ほつとけ!てか急にキヤラ変わんなや

「つまり、御仕置きとして私の従者となって馬車馬のように働けてことですよ」

じゃねえよ!完璧に奴隷扱いじゃねえかよ

「奴隷なんて人聞きの悪い・・・単なる楯変わりですよ」

「もっと酷えし!つつか人の心読むなよ!!」

「さゝてと、仮契約の魔法陣はゝっと」

「人の話を聞けよ!」

「でゝきた!」

「無視かよ!しかも書きあがるの早ッ!」

「さつきから、うるさいですよ。こんな美少女と合法的にちゅーで
きるんだからいいじゃないですか」

「俺はロリコンじゃない！」

確かに美少女と言えば美少女だが、あんた今は10歳だろう

「あ、ちなみに数えて10ですから今はまだ9歳ですよ」

「なおいわ！」

徐々に魔法陣の上へと追い込まれていく

「それじゃあ逝きますよ」

「字が違〜う!!」

俺とエリカの顔が徐々に近付いてくる

エリカは言葉とは裏腹に顔は真っ赤だ

俺も自分の顔が赤くなっているのがわかる

そしてついには互いの距離はゼロになり唇が重なった

仮契約！

そして部屋が光に包まれた

その時、俺の中で何か鍵のような物が外れる音が聞こえた

四時間目「二人目の転生者　そして・・・」(後書き)

四話目を投稿しました。幼なじみの転生者が登場！なんか、主人公が彼女に対してはヘタレだなこりや

これからの更新についてですが、基本的に毎週の火、水、木のいずれかに更新できるように頑張ります。

五時間目「月夜の出会い」（前書き）

予定とは変わりますが書けましたので投稿します

五時間目「月夜の出会い」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

く、空気が重い

今俺達はせつちゃんこと桜咲 刹那ちゃんに連れられ2 - Aの教室
へと向かっている

し、視線が・・・・・・・・痛いです

せつちゃん・・・・・・・・警戒してるのはわかるけど、視線に殺気籠めす
ぎだつて・・・・・・・・

「あ、あの・・・・・・・・さ、桜咲さん」

「なんでしょう」

「俺の顔に何か付いてますか？」

「いえ、別に」

「そうですか」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

会話が無いです。エリカさんも黙ったまんまですし

五時間目「月夜の出会い」

「「「「ようこそ！ネギ先生！エリカ先生！佐倉君！」」」」

教室の中は歓迎会ムード一色でした

「ささ、主役たちは真ん中に」

「え、ちょ」

「わぁー嬉しいな」

「少し照れますね」

それぞれ背中を押され席の真ん中の方へと押し進められる

ワイワイ、ガヤガヤ

それぞれが中心となり四つにわかれていた

ネギが中心にいるグループ

エリカが中心にいるグループ

俺が中心にいるグループ

そして、その様子を外側から眺めている人達
となっている

その途中途中で色々あった

本屋ちゃんがネギにお礼を言いに行ったり

委員長がネギに銅像を送ったり

明日菜と委員長がケンカという名のじゃれ合いを始めた

ネギがタカミチに読心術を使っていたり

ネギと明日菜の二人が抜け出し二人でなんかやってたのを委員長が
みて暴走したりと

とりあえずは原作通りに進んでいた

俺も何だかんだで色々と質問攻めにあっていた

つつか、あんたら日中にさんざん質問してなかったか？

しかも、始終テンション高いし……俺、このクラスでやっていけるかな？

そして、歓迎会も終わり俺は一人帰り道を歩いている

「ふあゝあ、さっさと帰って寝よ。なんか色々あって今日は疲れた」

えっと、朝学園長室で女子中への編入を言い渡された事に始まり

ネギが魔法使いの修行のために麻帆良に教師としてやってきたり

そのネギに双子の妹がいたり

しかもその妹が俺と同じ転生者だったり

その人が俺の前世の知り合いだったり

脅されて仮契約させられたり

せつちゃんに始終殺気の込められた視線を向けられたりと

「原作に介入するつもりなんて無かったハズなのになあ……」

どうして、こうなったのだろう

「……はあゝしかも、また厄介事が……」

それに都合悪く満月だし

「転入初日で目を着けられるような事した覚えは無いんですがね」

俺の後ろに浮かぶ気配に視線を向ける

「エヴァンジェリンさん」

そこには夜闇に浮かび黒いマントを纏った金髪の少女エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがかった

「ほう、なかなかいい感をしているな」

「とりあえず、いきなり後ろに立たれると怖いのですが」

「ククククツ……私が貴様の背後に現れる前に気づいていたくせによく言っわ」

「臆病者なもんでね」

そりゃ一応は気づいてはいたけど……師匠なんか完璧気配絶って現れやがるからな

「そうかそうか……では、その臆病者とやらの实力を見せて貰うとするかな」

するとエヴァは懷から魔法薬の入った試験管を取り出しこちらに向かい投げつけてくる

「氷爆!!」

投げつけると同時に呪文を詠唱する

「くっ!」

迫りくる凍気と爆風をぎりぎりで躲す

「マジかよ」

ボヤキながらその場から逃げだす

「付き合ってられっか」

「はっはっはっ……逃がすかバカ者が!」

なんでありつそんなに楽しそうに追ってくんだよ!

「魔法の射手 連弾・氷の3矢!」

再び試験管を投げ詠唱してくる

「今度は魔法の射手かよ!っ」と

鋭い3つの氷柱が飛んでくるがそれを体勢を崩しながらも躲すが

「ほら、まだまだ行くぞ魔法の射手 連弾・闇の3矢！」

「ちい！」

次に飛んできたのは黒い弾丸。このままでは避けきれない！

「くそ！」

左手を黒い弾丸に向かい突きだし気を飛ばし撃ち落とす

「ほう、遠当てか。多少は鍛えているようだな」

「そりゃどうも」

どうすっかなあゝ、俺の使えるのってほとんどが近距離ばっかだし
遠距離系ってさっきの遠当てぐらいだしな

「ならばこれならどうする！魔法の射手 連弾・氷の9矢！！」

こんどは9つの氷柱が飛んでくる

こりゃ無理かも……しかたない

「いきなりだが使っしかないか」

ポケットから一枚のカードを取り出す

「行くぜ、来い（アデアット）！！」

カードが光り形が変わっていく

光が両腕を包み込み、光が止んだとき、俺の両腕には赤色の籠手のらしきものが装着されていた

その籠手を着けた腕で氷柱を全て殴りつける

これこそが、俺が一度は望み一度は諦めた力

「ったく……まさかアーティファクトとして出てくるとわな」

全ての氷柱を殴り消した後、手の甲にはめ込まれた丸い宝玉が一瞬きらめく

「……それが貴様のアーティファクトか」

「ああ、名を赤龍帝の籠手だ！」
ブーステッド・ギア

「ククククッ……もう少しは楽しめそうだな」

エヴァは再び試験管を取り出し構える

俺も構えを取る

「行くぜ。ブーステッド・ギア!!」

『Dragon booster!!』

手の甲の宝玉が輝きだす

籠手に赤い龍の紋章と『?』という文字が浮かび上がり俺の体に力が駆け巡る

「氷爆!!」

エヴァの放つ凍気と爆風が俺を襲おうとするがそれを俺は余裕を持って躲しエヴァに向かい駆け出す

「ちい!魔法の射手 連弾・闇の9矢!!」

迫りくる9つの黒い弾丸さつきまでは躲す事ができなかったが

『Boost!!』

宝玉からの音声で浮かんでいた文字が『?』から『?』へと変わり、さらに体を駆け巡る力が増す

「遅え!」

9つの弾丸を交わしエヴァに向かい飛び上がる

目の前に迫る俺の姿にエヴァの表情が変化する

「な、なんなんだ・・・貴様は」

「行つくぜえええ!!」

『Explosion!!』

宝玉から音声が響きその輝きが眩しいくらいに輝く

力が左腕に集まる感じがわかる

「レ、氷楯！！」

エヴァは魔法薬を使い氷の魔法障壁を出現させるが

「吹っ飛びやがれえええ！」

俺の拳は止まらずそのまま氷楯の上からぶん殴る

「きゃああー！」

俺の拳の勢いは止まらず氷楯を破壊しエヴァを吹き飛ばす

「げーやべ」

あまりの威力に俺自身も予想外だった

吹き飛びながらもエヴァは何とか体勢を整える

俺も何とか地面に着地する

あ、強化が切れて体力が一気に無くなったわ

「くっ！貴様は一体……」

エヴァが俺に何か問おうとするが

「「！！」」

轟音により言葉が止まる

「くっ！戦いに没頭しすぎて感知が遅れたか」

「どういう事だエヴァンジェリン」

「そのままの意味だ。貴様も来い」

「は？」

「さっそく警備の仕事だという事だ」

そのままエヴァは俺の首根っこを掴むとそのまま音のした方へと飛び立つ

「ちょ、猫じゃねえんだから」

「うるさい！！猫の方がよっぽどかわいいげがあるわ！」

「わああああ！」

結局、俺はそのまま運ばれて行った

五時間目「月夜の出会い」（後書き）

ようやくブーステッド・ギアを出す事ができました。そして短いですが初のバトルシーン！書くのが初めてなんで上手く表現できているかはわかりませんが・・・

次回は予定通り来週になります。

今後ともよろしく願います

六時間目「月夜の出会い2」(前書き)

何とか書きあがったので投稿します。

それとあとがきにてお知らせがあります。

六時間目「月夜の出会い2」

夜天の空を一つの影が走る

「いい加減、その持ち方やめてくれないか？ 苦しいのだが」

「我慢しろ」

影は一つだが聞こえる声の種類は男女2種類の声が聞こえる

「見えてきたぞ」

「は？ なに……が……なんだありや？」

六時間目「月夜の出会い2」

現在も音の響く方に目を向けるとそこには大きな黒い影

近づいて行くにつれその影の形が次第にわかっていく

「あれって……クモ？」

「クモだな」

「大きいな」

「ああ、自然界ではありえない大きさだな。おそらく式神かなにかだろう」

黒い大きなクモが森の木々をなぎ倒しながら学園に向かって進んでいた

「止めなくていいのか？」

「そうだな」

などと普通に会話しているが俺は内心ビビっていた

あんなでかいクモなんて初めて見たな

師匠と様々な場所を回り多くの物と対峙したがあのような物と対峙した事は無かった

「おそらく関西のまわし者だろう」

「関西……」

つまり狙いは木乃香という事か？

「ん？」

ふと、クモの前に動くものが目に入る

「なあ、エヴァンジェリン、クモの前で何か動いてないか？」

「ん？……確かに……二つほど影のようなものが動いているな」

すると、森の中の少し開けた場所に二つの影が飛び出し月明かりでその姿がハッキリ見える

「！！おい、あれってクラスの！」

「ああ、不味いな……よし！お前が行け！」

「へ？」

そう言うとエヴァは俺を

「そら！！！」

投げた！

「ええええええええええ！！！」

「術者の方は私に任せろ」

とんでもなくいい笑顔で言葉を残し飛んでいく

ちよ、俺、飛べないんですけど

女の子に、しかも封印されたにしてはおかしいと思うくらいのスピードで投げられ次第にクモと追われていた女生徒との間に近づいていく

「ああ！もう！ブーステッド・ギア！！」

『Boost！！』

ブーステッド・ギアを発動させ力を倍にする。力が体を駆け巡るこれで少しは着地の衝撃を和らげるかもしれない

「どっけええええ！！」

ズン！！という音と共にその場に着地する

「いててて・・・アンにやろ、後でぶん殴ってやる」

特に大きな痛みは無く、足が少し痺れた程度だ。その場に立ちあがりクモの姿を見つめる

クモの顔にある上に4つその下に3つある赤い目が俺の姿をとらえその動きを止める

「大丈夫か？」

背後に庇った少女達に声をかける

アキラ side

「今日の歓迎会楽しかったねえ」

「そうだね」

私は同室の明石 裕奈と部屋で今日の歓迎会の話で盛り上がっていた

「ネギ君もエリカちゃんもかわいかったよね」

「そうだね。それに十歳の子達が先生って言うのも驚いたよね」

ネギ先生とエリカ先生、十歳で教師なんてすごいと思う

「驚いたと言えば、佐倉君にも驚いたよね。まさか女子中に男の子が転校してくるなんてねえ」

「うん」

そして、彼らと同じくこの学園に来た佐倉 佑太君。共学のための試験入学って話だけど・・・

「本当に共学化しちゃうのかな？」

「うん・・・すぐって事じゃないみたいけど・・・どうなんだろう？」

いきなり「共学になった」って言われるよりかはいいけど

「女子中に男の子一人ってなんかかわいそうだね」

「そう？もしかしたら、ハーレムバンザイ！とか、言ってるかもよ」

裕奈は冗談で言っているとわかっているが少し考えてしまう

歓迎会の時にも少し話しては見たが、変に話しづらいという訳は無く少し私達相手に照れているという感じだった

「あつ！」

いつの間にか裕奈がカバンを漁っていたが、急に声を上げる。どうしたんだろう？

「現国の教科書忘れた」

現国？・・・ああ、そう言えば宿題が出てたはずだ

「どうしよう、宿題忘れたら新田に怒られる」

生活指導員の新田先生、厳しいけど言い先生だとは思って、裕奈や他の子達は苦手なようだ

「裕奈、私の一緒に見てやろう」

「アキラ〜ありがとう〜」

「はいはい」

抱きついてくる裕奈を慰めてから立ち上がり自分のカバンの中から教科書を探す

「あれ？」

もう一度よく探すが

「……………ごめん裕奈、私も教室に忘れてきちゃったみたい……」

「ええ!!」

まいったなあ、私も宿題忘れて怒られるのもヤダし……

「しょうがない……………アキラ、教室に取りに行こう」

「さすがにこの時間に学園に行くのは不味いと思うけど……………」

「でもこのままじゃ、鬼の新田に怒られちゃうよ」

「それもそうだけど」

でもさすがに……………

「じゃ、早く行こ!アキラ!」

そのまま、裕奈につられ私は学園へと向かった

学園に向かう途中

「アキラ、ここの森抜けると近道なんだよ」

という裕奈の言葉に暗くて危ないかもという事も頭にはあったが今日は雲がほとんどなく満月なので大丈夫かなと思いそのまま森の中へと入って行く

その事が大きな間違いだと気付いたのはその少し後だった

だいたい半分を過ぎたぐらいだろう。

「にゃ！」

「え！」

突如私達の前の地面が光だした。その地面で光る光の形はよくマンガなどで出てくる魔法陣によく似ていた。私と裕奈の足が止りその光景を眺めていると、その中心に黒い霧のような物が現れ、次第にそれは大きくなっていく。そして、霧の中心当たりの7つの赤い目が光った。何故、それが目だとわかったのかはわからない。でも、私の中は一つの感情に埋め尽くされていく

”怖い”

それは、私だけではなく

「ちょ、ちょっとヤバくない？」

裕奈も同じく”怖い”と感じたんだろう

「裕奈！こっち！」

裕奈の手を引き来た道を駆け戻る

早く逃げなきゃ！

私の頭の中はそれでいっぱいだった。

「なんであんなに大きなクモがいるの？」

「わかんないよ」

とにかく私達は走った

しばらく走ると少し空けた場所に出る

「わっ！」

後ろの裕奈の声に振り向く

「つと、大丈夫」

転びそうになったのを何とかこらえたようで倒れはしなかったが少し足が止まってしまった

その少しが致命的だった

裕奈の後ろに迫って来ていた巨大なクモが裕奈のすぐ後ろに来ていた

「裕奈!!」

「え？」

私の声に裕奈も自然に後ろを向きその巨大なクモの姿が目に移る

私の眼とそのクモの目が合う

「い、いや……」

「あ、ああ……」

体が震えているのがわかる。裕奈も同じく震えている

私達は今、恐怖に支配され体が震え動かないのだ

ゆっくりと私達とそのクモとの距離が縮まる

「た、助けて……」

私の声は震えていた。誰に助けを求めたかはわからないが自然とその言葉が出てきた

「お願い……誰か……」

裕奈からも震える声で助けを求める声が聞こえる

そして、その声は

「・・・えええええ！」

遠くから近づいてくる声と共に・・・

ズンっという目の前に何かが落ちてくる・・・

「いててて・・・アンにやろ、後でぶん殴ってやる」

落ちてきた何かは声と共に私達を背に庇うように立ち上がる・・・

「大丈夫か？」

そして、耳に聞こえた声は聞き覚えのある

女子中等部に転校生してきた男の子

「さ、佐倉・・・君」

佐倉 佑太君の声だった

六時間目「月夜の出会い2」（後書き）

六時間目をおとしました。ここで一つ訂正があります。実際のハイスクールD×Dでは赤龍帝の籠手は左手のみでしたが私の小説では両手という事にさせていただきました。これは主人公の戦闘スタイルが無手のため片手だけでは防御が難しいからです。よって、本作品では片手ではなく両手という事にしました。

そしてもう一つお知らせが。現在、次の話を執筆中ですが、来週はGWという事でバイト先に「特に予定はありません」と言ったところGWフルでいれられてしまいました。よって、来週中は今書いているのとは別で最低で一本投稿できるかどうかなので、もしも私の小説を楽しみにしている方がいらっしゃったら申し訳ないと思っております。

七時間目「月夜の逃亡劇」(前書き)

なんとか書きかけが書き終わりましたので投稿します

七時間目「月夜の逃亡劇」

「さ、佐倉……君」

背後から聞こえるのは大河内 アキラさんの声

「おう！佐倉君だ」

「な……んで……」

続いて明石 裕奈さんの声も聞こえる

「なんでも何も助けに来たんだよ」

異形のクモから視線をそらさずに問いに答える

まあ、来たというより飛ばされたと言った方が正しいが

「先手必勝！」

片手の掌をクモに突き出し遠当てを顔周辺にぶつける

「まだまだいくぜ」

さらに連続で遠当てをくらわす……そして

「よし、逃げるぞ」

「「は？」」

二人を脇に抱えその場から走り出した

七時間目「月夜の逃亡劇」

「え？え？」

「ちょ、ちよつと！」

俺の行動に驚いたのか二人とも戸惑ったような声を上げる

「な、なんで逃げてるの」

「ふ、普通あそこまでカッコよく登場したんならそのまま倒したりとか……」

「明石……だっけ？」

「うん」

「普通に考えてあんなに勝てると思う？」

「・・・・・・・・にやははは・・・・・・・・無理だね」

「だろ」

話しながらも走り続ける。ブーステッド・ギアの力のおかげで通常の倍の速度で移動できるが現在は全力より少し抑えた状態で背後に神経を集中しながら走っている。俺が全力で走ったらさすがに二人にはGがキツイだろうし誤って舌を嚙んだりしてしまうかもしれないしな

「それで、佐倉君何処に向かっているの？」

「あ・・・・・・・・とりあえず適当に走り回ってまこうかと・・・・・・・・」

アキラの問いに少し間を空けながら答える

今は森の中を縦横無尽に駆け回っている

エヴァが術者を何とかするって言ってたからとりあえず時間を稼いでいればおそらくあのクモは消えるはずだろう

「それともう一ついい？」

「どうぞ」

「さっき、手から出てあの大きなクモの顔に当たったのってなに？」

「あ〜〜」

これは・・・言ってもいいのかな？・・・魔法じゃないし大丈夫だよな

「さっきのは遠当てって言って武術の一種。気を打ち出す技だよ」

「武術？」

いまいち理解しきれないみたいだが

「まあ、そういうのもあるってだけ・・・ちよ、さ、佐倉君！」なんだ明石？」

裕奈が焦った声で会話を遮る

「なんかさっきのクモがすごい勢いでこっちに向かってきてるんですけど」

「え？」

裕奈の言葉にチラリと後ろを振り向くとあのクモがすごい勢いで8つの足を動かしながら走ってきている

なんか、ものけ姫で似たような場面を見たことあるような・・・ありゃタタリ神か

先ほど見た時と雰囲気が違う。先ほどまではこちらを探っているという感じだったが、今はこちらの事を完璧に獲物と認識しとらえようと迫ってくる

「……………さっきで怒らせちゃったか？」

「どおすんの！あきらか私達が追われてた時より早いんですけど！」

「ん~~~~~どうすつか」

裕奈 side

「ん~~~~~どうすつか」

彼の言葉を聞いて私は少し呆れてしまっていた

彼はこの状況をわかっているのだろうか

実際にはあり得ない大きさのクモのようなもの追われて逃げているのに彼からはそんな感じは感じられなかった

何とかできるという余裕、もしくは何も考えていないか……おそらく後者だと思う

「どうすつか〜じゃないよ！」

はあ、最初私達の前に助けに現れた時は不覚にもドキツとしてしまった

だって、あの時の彼はまるで物語に出てくるヒロインを助けに来た主人公みただったのに……今は情けなく逃げ回っているだけ

「とりあえずは、逃げながら考えるさ」

「なんてマイペースな・・・」

アキラも彼の態度に若干呆れているようだ

正直、私はこの時なんでこんなことを考えていられる余裕があるのかわかっていなかった。さっきまで恐怖で体がおもう様に動けなかったハズなのに

「よっと」

彼はそんな声と共にジャンプをするが

「へ？」

「きゃ！」

おもわず彼に抱きついてしまうその高さが異常だった

「わっ！ちょ！」

「た、高いって！」

目の前には囲まれていたハズの木は無く一面の星空だった

さらに下には先ほどまで私達を襲ってきたクモの姿が・・・やっぱりありえない大きさだって

「つと」

クモを飛び越えて着地

「と、飛ぶなら飛ぶって言ってよね」

「悪い悪いそんな余裕なかった」

ニコツと笑った彼の顔に再びドキツとしてしまった

だ、駄目よ私にはお父さんが……でも……

再びすごい速さで走りだす

「……高跳び……いや、走り幅跳びで世界取れるかも」

……なんか調子狂うな……

s i d e o u t

いやゝ危なかったのんびり話したらいつの間にか足の一本が迫ってきてたし

おもわず飛んだら思った以上に高さが出たな……もしかして

「……高跳び……いや、走り幅跳びで世界取れるかも」

などと考えていると、背後から嫌な感じがしたので反射的に横へと

飛ぶと次の瞬間先ほどまでいた場所に白いものが飛んできた

「わ！」

「何アレ？」

そしてその白いものは着弾した地点からクモに向かって細長く延びていた

「あれって……」

「もしかして……」

「糸……かな？」

などと話していると今度は連続で白い糸が迫ってくる

「うお危ねえって」

それを除けながら逃げるがそのたびに糸の量が増えていき次第に追い詰められていく

それにしても……

「遅え……」

あんの口リ婆！まだ術者見つけれないのか

（小僧……貴様今を変な事を考えなかったか？）

「イ、イエナンニモカンガエテナイデスヨ……ってキティが！」

「？キティ？」

（なっ！き、貴様何故その名を知っている！）

あ、やべつい

（まあ、いい。だが後できっちり説明して貰うからな！いいな！）

拒否権はなしですか……

（それと術者は捕えた）

「なら、あれを早く消すとかして貰えませんか？結構いっぱいはいなんですよ」

「？さつきから一人でなにいつてんの？」

どうやら俺にしかエヴァの声は聞こえて無いらしい

このままじゃ、変人と思われるんじゃない？

（そのことだが、こいつが自分の力量も考えずに無理やり召喚したらしく自分では送還できないらい。だから貴様が何とかしろ！）

「は？」

（私はもうほとんど魔力が残ってないからな貴様に任せるぞ）

「ちょ、待てって！」

強制的に話を終わらせられた

「ちっ！絶対後で一発ぶん殴ってやる」

「どうしたのさっきから？」

「頭大丈夫？」

独り言が多すぎて裕奈に頭の心配をされました。ちくしょう

「気にすんな。それと頭も大丈夫・！！・ちい！」

「きゃ！」

抱えてた二人を軽く投げ飛ばす。やべ、怪我とかしてないかな

次の瞬間右腕に白い糸が絡みついてくる

「「佐倉君！！」」

「二人とも大丈夫か？」

「う、うん」

「ちょっと擦りむいただけだから」

大きなケガはなかったか

「二人ともすぐにここから逃げるんだ」

右腕に続いて左足にも糸が絡みついてくる

「でも！」

「ここにいると危ないからさ」

その間にも迫ってくる糸を遠当てで撃ち落としていく

「それは佐倉君だって」

「俺は大丈夫だから」

「そんな、やっぱ」「いいから！」・っ！

つい怒鳴ってしまっ

「そこにいられる方が邪魔だ」

少し、声のトーンを落として言う

その言葉にゆっくりと立ち上がり二人はその場から走り出して行った

これで大丈夫だ。さっきからあいつは俺に向かってしか糸を吐き出していない

つまり、途中からあいつの標的は俺一人だったんだ

これである二人は無事だろう……

これである二人は逃げきれだろう……

これで……

遠当てで防ぎきれなかった糸が今度は右足に絡みつく

これで……

「テメエをぶっ飛ばせるぜ」

俺の中のスイッチを戦闘モードへと切り替える

「覚悟しろよクソ虫が」

アキラ side

邪魔だ……そうわれ私は再び裕奈と二人で森の中を走っている

「……」

先ほどまでよく喋っていた裕奈も無言で走っている

理由は私にもわかる……不安なんだ

さっきまで一緒に逃げていた佐倉君がいないだけでこんなにも不安

になっっているんだ

そして、あの場に残った佐倉君が心配なんだ

あの場で彼にあそこまで言われなかったら私はその場に残ったまま
まだっただろう

多分彼はそれをわかった上で私達にそう言い放ったのだ……
けど

裕奈の足が止まりつられて私の足も止まる

「……アキラ」

「……うん」

私にも裕奈の考えている事がわかった

「戻ろう！」

やっぱり心配だ

何もできないかもしれない

本当に邪魔かもしれない

けど、このままでは見捨てるみたいで嫌だった

七時間目「月夜の逃亡劇」(後書き)

次回の投稿は前回あとがきに書いたとおり今週中は難しいと思いますができるだけ早めに投稿できるように頑張ります

八時間目「一日の終わり」(前書き)

だいぶ遅くなりましたが八話が完成したので投稿します

八時間目「一日の終わり」

裕奈 s i d e

アキラと二人、森の中を駆けていた

向かう先は私達を逃がしてくれた彼の元

邪魔だと言われあの場を後にはしたがやっぱり心配だ

（それはアキラも同じみたいだし）

私達があそこに戻っても何ができるかはわからない

もしかしたら佐倉君の言う様に本当に邪魔になってしまつかもしれない

だけれど、もし佐倉君がこのまま帰ってこなかったらと思ってしまうと、私は・・・いや、私達はクラスメイトを見捨てた事になる

周りの人たちはそれは違うというかもしれない

だけど私達の中にはその事が残り続けるだろう

まだ、半日しかたっていないが佐倉君の事が少しわかった

マイペースで少し抜けてる男の子

そして、優しくてあの時の笑った顔はあんな状況だった私を安心させてくれた

（だから・・・）

そう考えを巡らせ森の中を駆けもう少しで佐倉君と別れた場所にたどり着くというところで・・・

「そこから先は通行止めだ。明石裕奈、大河内アキラ」

「「え？」」

後ろから聞こえた声に驚く。その声は聞き覚えがあったからだ

振り向いた先にの声の主は私達の考えていた人物

「悪いが、お前らをここから先に進めるわけにはいかんのぞな」

エヴァちゃんと・・・

「申し訳ありません明石様、大河内様これから先は危険なので」

茶々丸さんがいた

八時間目「一日の終わり」

佑太 side

アキラと裕奈をこの場から逃がしてからには膠着状態が続いていた

クモの野郎は俺の様子が変わった事に警戒を強めており俺はと言うと

この糸をどうやって外すか・・・

この状態からの脱出を考えていた

今の状態は両足と右手が糸によりあいつと繋がった状態だ

しかし、逃げ回り時間を稼いでいたのでアーチファクトであるブーステッド・ギアの効果で力は漲っている

「やっぱ、今はこれしか考えつかいかな」

右手に絡まり繋がっている糸を左手で掴み思いつき引き引張る

「おもいつきりぶん殴る！！」

俺の引き力に対し巨大クモは踏ん張るがブーステッド・ギアで力が上がった俺には関係ない

クモの抵抗も一瞬で終わり体が浮き上がりこちらに勢いよく引き寄せられて飛んでくる

「うおおおおお・・・らっ!!」

飛んでくるクモに対しタイミングを合わせて左の拳を叩きこむ

殴られたクモは吹き飛んでいくが・・・

「あり？」

同時に繋がっていた右手と両足も一緒に引っ張られていく

「あれえええええ」

そのまま俺は巨大グモと同じ方向へ飛んでいく

木々をなぎ倒して行くクモの勢いが次第に治まっていきようやく止まるがダメージが足らなかったのか消えるまでには至らなかったが

「ああああああ・・・がつ！」

「ッ！」

勢いが治まらないまま突っ込んできた俺の頭突きが止めとなり声にならない叫び声を上げ消えていった

「いつ～～～！」

頭の痛みを堪え立ち上がると

「終わったか小僧」

「まあな」

背後に空から降りてきたエヴァに声を掛けられた

しかし、エヴァ以外にも数人の気配が感じたので振り向くと

「は？」

「こんにちは」

茶々丸さんと

「や！」

「ども！」

茶々丸さんに抱きかかえられていたアキラと裕奈がいた

エヴァ
side

時間はエヴァ達と二人が遭遇したところにまで戻る

「え、エヴァちゃん？」

「茶々丸さんもうして」

「ただの見学だ。茶々丸はただの付添だ」

あの小僧の本気が見れるかもしれんからな

「それよりも先に進むなって・・・」

「言葉の通りだ大河内アキラ」

「でもエヴァちゃん！佐倉君が！」

「あの小僧なら大丈夫だ。だからガキはとつとと帰れ」

「ガキって・・・エヴァちゃんの方が見た目子供じゃん」

「ぐっ・・・う、うるさい！」

人が気にしている事を・・・成長しないのだからしょうがないだろう

「いいかよく聞け、ここから先は貴様らからしてみれば非現実の世界だ！命の保証は無い世界だ」

「・・・」

「貴様らのような平和ボケしたような奴らには過酷過ぎる世界：ここから先はそういう世界なんだ」

少し、昔を思い出してしまう。否応無しに放り込まれ力なく逃げ回る事しかできなかったあの頃を

「エヴァちゃん・・・」

「エヴァンジェリンさん・・・」

「わかったら、さっさ「佐倉君は」

最後の通告を大河内アキラが遮る

「佐倉君はその世界で生きているんですか？」

「・・・わからん」

あの小僧が何者なのかは、まだハッキリとはわからない。ただ一つわかる事は

「だが、これから先ほぼ確実にその世界を歩んで行くだろう」

だからこそ私は知る必要がある

あの小僧がどういう人間なのか

だからこそ、あの妖魔をあの小僧に押しつけ力の一片でも多くをこの目にしようと考えたのだ

「そんな・・・」

「・・・」

その言葉と共に黙ってしまう

ええい、こんなことしてる時間はないというのに・・・仕方ない

「知りたいか」

「「え？」」

「世界の裏側をあいつが生きていくであろう世界の一端を知りたいかと聞いているのだ」

「佐倉君の」

「生きていく世界・・・」

時間が惜しいのとただの気まぐれだが

「特に明石裕奈、貴様に関してはまるっきり無関係という訳ではない」

「え？」

「私が？」

そうだ、こいつの両親は関係者だ

「もし、これから見た事を忘れたと思ったならば私が記憶を消してやる。そうすればお前たちは今までと同じ日常に戻る。だが、知ってしまったら普通の生活に戻るのは難しだろう」

無理というわけではないからな

「まずは選べ。このまま全てを忘れるか。それとも私について来て別の世界を垣間見るか」

「……………」

少しの沈黙が過ぎ

「私はエヴァちゃんと一緒に行くよ」

「裕奈！」

先に答えを出したのは明石裕奈だった

「私は全く無関係ってわけじゃないんでしょ」

「ああ……いずれは知る事になるかもしれん……が知らないままではいられない可能性もあるぞ」

「遅かれ早かれ多分知る事になったと思うよ。私って好奇心みたいな強いから」

「……私もエヴァンジェリンさんについて行くよ」

「アキラ……」

大河内アキラも自らの答えを出した

「ほんの少しだけど知っちゃたもん。だから確かめたいエヴァンジェリンさんや佐倉君のいる世界を」

「それがお前達の答えか・・・」

「「うん！」」

二人とも頷く

「いいだろう！見せてやろうお前たちの住む日常の裏側を！茶々丸！」

「了解しましたマスター」

私の言いたい事を理解し明石裕奈と大河内アキラの二人を両脇に抱える

「わっ！」

「ちょ、またあゝ！」

なにか騒いでいるがそんな事は知らん

「さあ、行くぞ！」

茶々丸と共に月夜の空へと飛ぶ

少し飛ぶと小僧と妖魔のクモとが戦っているのが見えた

「あ！アキラ！あそこ」

「佐倉君・・・良かった・・・」

二人もあいつを見つけた事でまずは一安心というところか

途中から合流した茶々丸から聞いた状況とまったく変わっていないか
つたので少しの間膠着状態が続いたのだろう

すると、奴は唯一自由な左手で自分の方へとクモの糸を引っ張った
のだ

あれほど巨大なクモなのだから普通なら引き寄せる事などできはし
ないが

「なっ！」

妖魔のクモは引きずられるどころか浮き上がり引き寄せられていった

そしてタイミングを合わせ殴りつけると妖魔は元いた方へと吹き飛
んでいく

「うそ！」

「すごい・・・」

この二人は驚きを隠せないでいた

今の奴の行動はどんな武道の素人でも子供でもわかる戦い方だ

糸の先についている物を引っ張ってタイミング良く殴る

ただそれだけだからこそ奴が普通の人間と違うという事がハッキリわかる

普通の人間はあんなモノを引き寄せる事は出来ない

「あれって・・・佐倉君？」

「・・・たぶん・・・」

この二人にも奴の異常さに気が付いたのだろう

そして、今の奴の戦い方で一つわかった奴は

「強力な一撃を持つパワータイプか・・・」

ここまでではよかった

このまま終われば末恐ろしい奴という判断で終わったのだ

だが・・・

「あれええええええ」

繋がったままの糸に引かれ奴も妖魔と一緒に飛んでいく

「・・・」

呆れて何も言えん

「あれって佐倉君だよな？」

「間違いなく」

さっきまでの見方と180°。変わり元の評価に戻ったらしい

そして止めの頭突き

それにより妖魔は消え去ったが私の中での奴の評価はわけのわからん奴という評価に変わった

「………とりあえず奴の元へと行くか。茶々丸」

「了解しました」

戦闘が終わり頭を押さえている奴の元へと向かった

「終わったか小僧」

「まあな」

空から降り奴の背後に立つ

「は？」

そして、振り向いた奴は困惑の表情を浮かべていた

視線の先には

「こんにちは」

「や！」

「ども！」

茶々丸と抱きかかえられている大河内アキラと明石裕奈

ああ、そうか

「こいつらは私が連れてきた」

s i d e o u t

「こいつらは私が連れてきた」

何やってんだよこいつは〜〜！

「言うておくがこいつらが貴様のところに戻ろつとしたのを保護してやったんだからな」

「え？」

二人を見ると茶々丸さんに離してもらい立っている

「どうして・・・」

「そんなの心配だからに決まってるじゃん」

「俺なら大丈夫だったろ」

「それでも・・・心配したんだよ・・・」

「・・・」

二人の言葉に何も言えなくなってしまった

こんなに心配してくれるとは思っていなかったから

「・・・ありがとう」

俺の言葉にキョトンとした顔になるが次第に笑顔に変わり

「なんで佐倉君がお礼を言うの」

「お礼を言わなくちゃいけないのは私達だよ」

「「助けてくれてありがとう」」

笑顔で感謝の言葉をくれた

「気にするなって。俺がそうしたかったから行動しただけだから」

「もういいか」

俺達のやり取りを一通り聞いていたエヴァがキリのいいところで声をかけてくる

「まずは佐倉佑太。とりあえずはよくやったと言っておこう・・・最後は何とも言えんながな」

「ははははは・・・面目ない」

「途中まではかつこよかったのに最後のはにや」

「あはは・・・」

バッチシ二人にも見られてましたか・・・

「そして、明石裕奈、大河内アキラ。お前らには一晩やる今後どうするか明日の朝までに決めろ。明日の朝、私の家で答えを聞かせて貰う」

「? 答えて何の?」

「こいつらが今日の事を忘れるか覚えたままこちら側の世界に来るという事だ」

「な!」

まさかのことで驚くがよく考えればどっちにしろ後半年ぐらいで知る事になるんだっけ?

「うん」

「わかったけど、私達エヴァンジェリンさんの家って知らないんだけど」

「茶々丸を迎えに寄こす佐倉佑太貴様も同様に三人で明日の朝家に来い。貴様にも色々聞きたい事もある」

えつと・・・

「拒否権は？」

「あると思っているのか？」

ですよね〜

「とりあえず今日はもう帰れ。私は爺のところに行く」

「わかった。それじゃ帰ろうか明石、大河内」

「うん」

「わかった」

その後特に二人は真剣に考え事をしていたからか会話も無く俺達は女子寮に戻った

こうして俺の長かった転校初日は終わった

八時間目「一日の終わり」（後書き）

どうも、作者のECです。連日のバイトと大学の疲れでなかなかパソコンに向かえなかったため投稿が遅れてしまったことをまずは謝罪します。

とりあえずようやく転校の初日が終わりました。バトルシーンが短すぎて本当にすみません。しかも主人公かつこつかないし・・・正直バトルシーンは書きなれてないので読みづらい点もあると思いますがそこは皆様の広い心で受け止めてやってください。それでは次回も頑張りますのでよろしくお願いします。

九時間目「二人の決意と仮契約」(前書き)

編集しました 5月31日

九時間目「二人の決意と仮契約」

「ふあ・・・・・・・・六時・・・・・・・・か」

本当だったらもう少し寝ているんだが

「エヴァに呼ばれてるんだっけ」

布団の中で体をほぐしながら脳を覚醒させる

「朝飯でも作るか」

布団から出て備え付けのキッチンへと向かう

数分後・・・・・・・・

コンコン

「はい」

「茶々丸です」

「どうぞ、開いてますよ」

「しつれいします。おはようございます佐倉さん」

「おはよう佐倉君」

「おはよう、佐倉君」

「おはよう絡繰、明石、大河内」

茶々丸に続き裕奈とアキラが入ってくる

「マスターが呼びですので一緒に来ていただけますか」

「わかった」

茶々丸について行こうと立ち上がるが・・・

「うっわ！何これ」

「どうしたの裕奈」

いつの間にかキッチンの方に入り込んでいた裕奈の驚く声が聞こえ
アキラもキッチンの方に行くと

「これは・・・酷いね」

アキラもその状態に驚いた様だ

なんか変なところでもあったかな？

「佐倉君どうしたのこの電子レンジ？」

ああ、あれね

「手軽にゆで卵作ろうと思ったらそうだった」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あれ？

「どうかした？」

「いや・・・」

「えっと・・・」

二人とも気まずそうだ

「佐倉さん、電子レンジではゆで卵は作れません爆発してしまいます」

なに！

「そうなのか？」

「はい」

俺達のやり取りに裕奈とアキラは呆れたように

「もしかして佐倉君って・・・」

「料理ができない？」

ぐう・・・そう言えば前の世界でもほとんど外食かコンビニ弁当だ

ったもんな。一度、料理した時なんか江利香さんに二度と台所に立つなとしめられたっけ・・・

「とりあえず片付けは置いてエヴァのところにいくっぜ」

「そうですねマスターもお待ちしてますし」

話しを区切り俺達は茶々丸に連れられエヴァの家に向かった

九時間目「二人の決意と仮契約」

「こちらになります」

「うわ」

「すごい・・・」

「なかなかいいところ住んでんじゃねえか」

目の前のログハウスにそれぞれの感想が漏れる

そして、茶々丸に連れられ家へと入る

「マスター佐倉さん達をお連れしました」

「遅い！何時まで待たせるつもりだ！」

最初の言葉はお怒りの言葉でした

「いろいろとあったんだよエヴァンジェリンで、俺に話ってなんだ」

「ふん、お前への話は後だ。先に明石裕奈、大河内アキラ、十分考えてきたのだろっ」

「もちろん」

「うん」

二人が先ほどまでとは違う真面目な表情になる

「それでは答えを聞かせて貰おう。だが、この選択によってお前らの未来が決まるそのつもりで答える。まずは・・・貴様からだ大河内アキラ」

エヴァがアキラへと視線を向ける

「私は・・・」

アキラ side

「私は・・・忘れないよ」

これが私が一晩考えて出した結論

「何故だ？全てを忘れれば今までと変わらない平穏な生活があるのだぞ」

エヴァンジェリンさんの視線が少しきつくなる

「たしかにそうかもしれない」

たしかに、全てを忘れてしまえば幸せかもしれない

今までと同じ生活が平穏な生活がそこにはあるかもしれない

でも・・・

「・・・知っちゃったから・・・佐倉君やエヴァンジェリンさんの
生きている世界を。私達の生活の裏にある世界の事を。それに・・・」

「それに？」

「佐倉君はその世界で生きて行くんでしょ？」

改めて佐倉君を見る

「ん？まあ・・・な」

「だから、私は・・・彼を・・・佐倉君を支えたい。何ができるかわからないけど心配だもん」

「／／／／」

私の答えに驚いて・・・る？・・・あれ？なんで佐倉君あんなに顔が赤くなってるんだろう？

「くくくつ、そうか。いいだろう貴様の答えはわかった・・・が」

「？」

「最後の言葉はまるで告白のようだったな」

「へ？」

告白？あれ？私・・・

「！ち、違うそついう意味じゃ・・・／／／／」

わ、私なんて事言っちゃったんだろう。って、裕奈なんか視線が怖いよ

「ああ、わかってる。言葉のあやってやつだろ？気にしてないから大丈夫だって」

「う、うん・・・」

気にしてないって・・・それはそれでなんか嫌だな・・・

でも、あれが私の本当の気持ちだし・・・エヴァンジェリンさんに告白って言われても嫌じゃなかった

もしかして私、佐倉君の事・・・・・・・・

「／／／／」

「いつまで顔を赤くしている大河内アキラ。貴様はこちらの側に来るといふ事だな」

「う、うん！」

これが私の答え彼を・・・佐倉君を支えたいんだ

「そうか、なら次は明石裕奈。貴様はどうする」

s i d e o u t

裕奈 s i d e

エヴァちゃんのアキラが佐倉君に告白したようだと言った時、少しムツとした

なんでだろう？私の好きな人はお父さんのハズなのに・・・

確かに佐倉君は嫌いなタイプってわけじゃないけど・・・

アキラは佐倉君の事を支えたい、心配だって言っただけど私はどうなのかにゃ〜？

「次は明石裕奈。貴様はどうする？」

「私も忘れないよ」

これは私も決まっていた

「……大河内アキラがこちら側に来るからといった理由でつというわけではないだろうな」

「うん」

アキラも忘れないと言った時、私はやっぱりと思った

昨日の晩、部屋に戻った時にアキラはお互い結論は自分自身の中で出してエヴァちゃんに言うまで聞いたりしないという様に決めていた

たぶん、アキラはあの時既に決めていたんだと思う

あの提案も自分の答えを聞いた私が流されて決めないようにしてくれたんだと思う

やっぱりアキラは優しいな

それに

「私も知っちゃったし、それに……私はまったく関係ないってわけじゃないんでしょ」

「・・・そうだ」

「だったら尚更だよ。私はその事も知りたいし・・・佐倉君の事も気になるしね」

言って気づいた

そうか、私は佐倉君に引かれ始めてるんだ・・・

助けて貰ったあの時から・・・

一目惚れに近いかな

だから・・・

「だから私もアキラと一緒に佐倉君を・・・佑太を支える！」

負けないよアキラ

side out

佑太 side

「・・・いいだろう」

二人の言葉に正直俺は驚いていた

原作を知っているのいずれこちら側に関わってしまうという事はわかっていたがこの時期にもう関わってしまうとは……

これも俺やエリカさんというイレギュラーの存在の影響か……

なら、このままってわけにはいかないよな

「エヴァンジェリン、頼みがある」

「なんだ」

「二人に戦い方を教えてやってくれ」

「え？」

「戦い方？」

二人は首をかしげているが

「こちら側に関わる上で必要な事だ」

「……………」

二人は互いに視線を合わせ納得したように頷いた……が

「…………断る」

エヴァから出たのは拒否の言葉だった

「ええーいいじゃんエヴァちゃん」

「嫌だ」

「そこをなんとか・・・」

「私は悪い魔法使いだぞ」

そう言えばそうだったな、なら

「タダと言わんさ」

「ほう、取引というわけか・・・それで何を差し出す」

「情報を一つ」

「ダメだ。貴様のその情報がどれほどの価値があるかは知らんが・・・」

「サウザンドマスター・・・ネギの父親に関しての情報だといったら？」

ここで一つの原作知識というカードを切る

「なんだと!?!」

「ネギ君の・・・」

「お父さん？」

どのみち新学期には知る事になるんだし大丈夫だろう

「さあ、どうするエヴァンジェリン？」

「・・・いいだろう。明石裕奈、大河内アキラ貴様ら二人に戦い方を教えてやる」

「やったあ！」

「お願いします」

これで、一応は大丈夫だろう

「本格的に始めるのは放課後からにしようとしてやる・・・が、とりあえず最初にやっておく事がある」

「やっておくこと？」

「パクティオ
仮契約だ」

「パクティオ？」

「そうだ、パクティオ つまり仮契約だ。魔法使いにはミニステル・マギと呼ばれるパートナーがいたほうがいいと言われていてな。魔法使いは詠唱中に無防備になる途中で攻撃を受けてしまえば詠唱は途切れ呪文は完成しない」

「つまり、その間の無防備な魔法使いを守るのがミニステル・マギと呼ばれる存在・・・」

エヴァの説明からミニステル・マギがどういうものかわかったらしい

「その通りだ大河内アキラ。しかし、規則としては契約できるのは一人だが、お試し期間として複数の人数と契約できるのが仮契約というやつだ」

「でもエヴァちゃん、私達戦ったりする事は出来ないんだけど」

「そうだな、それはこれから鍛えていくとしてだ、仮契約するといくつかの能力が得られる。その中の一つパートナーの存在能力を引き出すことができる固有のアーティファクトが今回の目当てだ」

「アーティファクト？」

「その人専用の武器って考えればいい。昨日俺が付けていた赤い籠手がそのアーティファクトだ」

「ああ、あれ」

「なに、なに！あんなカッコイイ武器が私達も貰えるわけ」

「まあ、簡単に言えばな。だがエヴァンジェリンもしアーティファクトが戦闘向きで無かったらどうするんだ？」

「そんなもんその時になったら考えるさ。当面の目標は体とアーティファクトの使い方を覚える事だな」

「そうか」

「それではさっさと済ますぞ、茶々丸！」

「準備はできていますマスター」

姿が見えないと思っていたら仮契約の準備を進めてたんですね

「ところでエヴァちゃんその仮契約ってどうすればいいの？」

「そういえば言っただけだったな。なに簡単な事さ仮契約の魔法陣の上でキスをするだけだ」

「き、キス！！」

エヴァは意地の悪そうな笑みを浮かべアキラと裕奈の二人は顔を真っ赤にして驚いている

エヴァの奴ワザと言わないで反応を楽しんでいるみたいだな。それにしても

「契約するのはエヴァなんだし、女同士なんだから少し過激なスキンシップって事で特に問題は無いんじゃないのか？」

「え？」

「エヴァちゃん？」

何故二人とも少し残念そうな顔をしているんだ

「何を言ってるんだ貴様は？二人と契約するのは貴様だぞ」

「は？」

この少女はいきなり何を言っているんだ？

「だから大河内アキラ、明石裕奈は貴様と仮契約をさせると言っているんだ」

「いや、俺魔法使いじゃないし、魔力もほとんどないから無理だと思っただけど」

ゆえに俺は魔法使いにはなれず落ちこぼれと言われた・・・懐かしい話だ

「いや、僅かながらにも魔力があれば大丈夫だ。ほら、ささっとせんか」

背中をおもいつきり押され魔法陣の中に押し出される

「それでは明石裕奈、大河内アキラの順でやれ」

エヴァの言葉にまずは裕奈が魔法陣の上に進み俺の前へと進む

「にやははゝこれ、なんか変な気分になるね」

魔法陣の効果で裕奈が少しもじもじしてるが、急に真面目な顔になる

「私、強くなるから佑太の事を支えられるくらいに・・・」

「・・・上等だ」

自分の顔に笑みが浮かぶのがわかる

裕奈との距離が次第に縮まり、唇が重なる。その瞬間足元の魔法陣が一層輝きを増す

バクティオー
仮契約

「にやはは……なんかてれるにゃ……一応ファーストキスだからね」

そう言うと顔を赤くしたまま裕奈は離れていき入れ替わりにアキラが魔法陣の上へと進みでる

「私も裕奈と同じ……」

その言葉を口にしたアキラの表情も裕奈と同じく真剣だった

「支えるから……佐倉君が……ううん、佑太君の隣に立てるようになつて……二人で佑太君を支えられるようになるから」

「ああ……期待して待つてるぜ」

アキラの唇が俺の唇と重なる。再び魔法陣が光り輝く

バクティオー
仮契約

「……私も……これがファーストキスだから」

こうして、俺は二人と仮契約を交わした

「本格的な修行は放課後からだ。放課後またここに来い」

「わかった」

「部活も無いから大丈夫だよ」

「わかったらさっさと学園に行け時間が無いぞ」

「ああ！本当だ」

「急ごう裕奈」

「うん！佑太も早く」

「後から追い付くから先行っててくれ」

「わかった」

「遅刻しないでね」

そう言い残しエヴァの家から走り出ていった

「それで、何故貴様はここに残った？」

「いや、聞きたい事があるって昨日言っただけじゃなかったか？」

そのために呼ばれたハズだったんだが

「ああ、その事が特には無いぞ」

「無いのかよ！」

「しいて言えばあいつらの答えを貴様にも聞かせておきたかったただけだ。ああ、後ついでに二人の答え次第で、仮契約させるつもりだったからな」

「そうですか」

確かに重要な事だけども……なんかな

「ほかに用がないのなら貴様もさっさと学園に行け」

「ああ、もう一つあるぞ」

「なんだ！」

そんなイラつかなくても

「知りたいんだろネギたちの父親の事」

「……」

「簡潔に言おうサウザンドマスターは生きている」

「なに!!」

おうおう、すごい喰いつきっぷりだな

「十年前に死んだと言われていたが、六年前ネギたちはサウザンドマスターに会い助けられたらしい」

「奴が・・・サウザンドマスターが・・・生きているだと」

エヴァの目には僅かに涙が浮かんでいた

「フ・・・ハハハハ」

生きていると知って余程嬉しいのだろう本当に嬉しそうに笑ってる

おっと、そろそろ俺も学校行かなきゃ

九時間目「二人の決意と仮契約」（後書き）

ども、作者のECです。いや、まさか連日で投稿できるなんて私自身思ってもいませんでした。まあ、一話一話が短いんですけどね。今回はアキラと裕奈の決意と心情を書いてみました。上手く表現できてるかどうかわかりませんがどうだったでしょうか？それにしても・・・キャラの喋り方がうまく書けない・・・。

次回も早いうちに投稿できるように頑張ります。

最後に、お気に入り登録が気づいたら150件いつてました登録をしてくださってる方々、本当にありがとうございますこれからもがんばります。

5月31日編集しました。

十時間目「鬼ごっこ?そして修行開始」(前書き)

だいぶ時間が空いてしまいましたが十話目が書きあがりませんでした投稿します。

それと、九話目を修正という形で最後の方に話を足しましたので読みなおして頂いた後で十話目をお読みください。 5 / 3 1

十時間目「鬼ごっこ？そして修行開始」

「へー、それで明石さんと大河内さんがこちら側に関わる事になってしまったと」

「ああ」

「さらには二人と仮契約までした……と」

「……ああ」

一日の授業が終わり約束の時間まで少しあるので昨晚あったことをエリカさんに話していたが次第に彼女の顔から笑みが消えていく

仮契約をした事を話した時なんて背後に般若が見えた……なんだ？

「まあ、夏には嫌でも巻き込まれてしまうのだから特には問題は無いとは思っけど……」

背後の般若が消え呆れたというような表情に変わる

「原作とは違うイレギュラーな出来事が起きてしまったのだから今後原作通りに進むとは限らなくなったと思うの」

「そうだな、というか俺達の存在自体がイレギュラーの塊みたいなもんだからな」

原作から少しだが既にずれ始めているからな……気を配る事を

忘れないようにしなきゃ

「だから、いざという時のためにあなたもアーティファクトを完璧に使いこなせるようにしときなさいよ」

「わかってるよ」

「それとエヴァちゃんのところでの修行に関してだけど、一応私もスプリングフィールドの血縁者だからさすがに参加はできないわよ」

「ああ、わかってる。エリカさんには悪いとは思ってるけど、修学旅行が終わるくらいまで我慢して貰うしか……」

修学旅行まで終わればネギがエヴァに弟子入りするはずだからそうすればエリカさんも普通にエヴァの別荘に入る事が可能だろう

「……そうね……」

しかし、エリカさんは少し浮かない表情だった……どうしたんだろう？

会話を続けながら教室の方へと向かうと

「あれ？あれは兄さんと神楽坂さん？何をやってるのかしら？」

「さあ？」

十時間目「鬼ごっこ？そして修行開始」

教室の前で言い争っているようなネギとアスナを見て気になったので二人に近づき声をかける

「何してんだ二人とも？」

「佐倉！エリカちゃん！ちょうどいいわ」

「？」

「ちょうどいいってどういうこと？」

「佐倉！あんた、今喉渴いてない？」

「なんでだ？」

「ネギが紅茶をいれたんだけど私は喉渴いてないし捨てるのも勿体無いからあんたにあげるわ」

「ア、アスナさん！」

何か焦っているネギの口を押さえて、コップを俺の方に差し出す

「そうか、なら遠慮なく」

そのまま受け取り一気に飲み干す

「「あ！」」

飲むのと同時に二つの声上がる。一つはネギ先生のそしてもう一つは

「ん？エリカ先生も飲みたかったのか？」

「あ、あんた何考えてるのよ！」

「ん？何って」

ただ紅茶を貰って飲んだだけだが？

「あ、あのなんともありませんか？」

「いや、ちよつと普通の紅茶より苦いかなって思ってたくらいだけど？」

なんだ、その変な物を飲ませてしまった的な顔は

「ホラ、何にも起こんないじゃない」

「失敗かぁ・・・」

何も起こらない？失敗？・・・

「なあ、どういう・・・ってなんで顔をそむけてるんですか？エリ

力さん？」

「……忘れてたのねあなたは……今、あなたの顔を見るのは不味いからよ」

「は？忘れてるって……何を「あれ、エリカちゃんと佐倉君もおったの？」近衛さん？」

外の騒ぎが気になったのか教室からこのかが出てくる

「……」

そして、俺の顔を見て動きが止まり徐々に頬が赤くなり目の色が変わっていく

「……佐倉君って……なんか、かつこええな」

「は？」

このかの言葉の意味が一瞬よくわからず呆けていると、その間にこのかが俺の首に腕を巻きつけてくる

「な～佑太くん」

「ちょ、こ、近衛さん」

「いややわ～このかつて呼んで～な」

だんだんこのかの顔が迫ってくる

「近いつて！」

「んゝゝなにがゝ」

「顔が！」

その間も止まらずに近づいてくる

「「「ちょ、何やってんのよこのか」「」」

騒ぎの声で教室から柿崎、釘宮、椎名の三人組が出てくる

その声に反応しこのかの腕の力が一瞬緩んだ隙に何とか抜け出しこのかから離れる

「あゝゝん、なんで逃げるん？」

「なんでもなにも一体どうなってるんだ・・・とりあえず三人とも助かった・・・」

感謝をしつつ顔を三人の方へと向けると

「「「・・・・・・・・」「」」

三人の顔が先ほどのこのかと同じように変化してる

これって・・・まさか・・・

「「「佐倉くゝん!!」「」」

「お前らもかあゝ！」

このか達の急変に戸惑っていると後ろから話声が聞こえる

「ほ、本物だったんだ……ちっ」

「兄さん……なんて事をしてるんですか」

「ご、ごめんエリカ……」

「お前ら、俺に何飲ませたんだ？」

ネギとアスナは少しすまなそうな顔で

「「ホレ薬」」

「ざけんなあああああ！」

「「「佑太くん！」」「」」

俺はその場から逃げだした

「……おバカ」

最後に聞こえたエリカさんの呆れ声を耳にしながら

「あいつら、運動能力上がってないか？」

もう十分近く走り続けているが普通に一定の距離で追いかけて来ている

何度目かの角を曲がりすぐ近くの開いている部室らしき所に逃げ込み扉を閉め鍵をかける

「何とか逃げ切ったか・・・後は時間を潰して効果が切れるのを・・・」

「あら、どちらさま？」

安心したのもつかの間、室内から女性の声が聞こえる

「あら、あなたは・・・佐倉君？」

「あんたは・・・誰だ？」

「千鶴よ、那波千鶴。あなたのクラスメイトよ」

「ああ、那波な」

その部屋にはクラスメイトの那波千鶴がいた

「それで、天文部に何か用でも？」

「天文部？いや特には・・・？なんで天文部が出てくるんだ？」

「なんでって、ここは天文部の部室ですよ」

とつさに逃げ込んだから確認なんかしてなかったからな・・・

・ん？なんで彼女は平然としてるんだ？

「そうなの？急に駆けこんで来たものだから何かあったのかと」

「ああ、ちょっと色々あつてクラスの奴らに追われててな」

ああ、薬の効果が切れたのか以外に早かったな

「・・・・・・・・何かしたんですか？」

「い、いえ・・・・・・・・何も・・・・・・・・」

千鶴さん、顔は笑ってるのに目が笑ってないのですが・・・

完璧に誤解されてんな

「でも、追われているんですよね」

「は、はい」

ちよ、なんでだんだんと迫ってくるんですか

「これは、御仕置きが必要ですね・・・・・・・・」

「は？御仕置き？・・・・・・・・なんで？」

「私が不愉快だからです」

いや、意味わからんし

千鶴が一步進み、俺が一步下がる

「ちょ、那波さ・・・うわっ！」

しかし、それを何度か繰り返してるうちに何かに躓き仰向けに転んでしまう

「ててて・・・てええええ！」

いつの間にか千鶴が俺に覆いかぶさっている

「ふふふ・・・さあ、観念してくださいね」

「お、おい！」

まさか、時間差・・・だと

そして、千鶴の両手が俺の頬を抑え・・・

「ふふ・・・佑太は私の物よ・・・ん」

「んん」

俺と彼女の唇が重なった

「ん、うん・・・」

「んん」

唇は未だ離れないが千鶴の手が俺の服にかかる

「ん・・・んあ！・・・え！わ、私・・・」

が、その途中でようやく薬の効果が切れ千鶴は正気に戻る

「なんで佑太・・・君？の上に乗っているのかしら？」

片手を自分の頬に当て首を傾げている

どうやら薬の影響を受けていた時の記憶がないようだ

「とりあえずどいてくれないか？」

「あら、ごめんなさい／＼／＼」

自分達の体勢を理解したのか顔を真っ赤にしながら俺の上から降りる

「あ、あの、なんであんな体勢に・・・／＼／＼」

「転びそうになった俺を支えようとして支えきれず一緒に倒れちまっただけだから気にすんな」

とっさに思いついた嘘で未だに顔を赤くしている千鶴を無理やり説得させる

「そ、そう・・・／＼／＼」

「じゃ、俺はこれから用があるから行くわ」

「え、ええ。また明日」

「おう、またな」

そう言い残し早々に天文部の部室を後にする

「・・・・・・・・／／／／」

未だに佑太を見つめている千鶴に気づかずに・・・

「はははははは・・・・・・・・」

現在、訪れた家の家主が目の前で大笑いをしている

今朝の約束通りに俺はエヴァの家を再び訪れた

「ははは・・・・しかし、あのボウヤも大胆な事をするもんだ」

「ああ、人の心を操る薬、魔法は禁止なんだろう」

「ああ、そうだ。バレたれ即オコジョだな」

「・・・・・・・・なにやってんだが」

「こんにちわー」

「エヴァちゃん、来たよ」

用事があったため少し遅れたアキラと裕奈がやって来た

「お、来たか。では行くぞ」

「行かつて・・・」

「何処に？」

首をかしげる二人に対しエヴァは勝ち誇ったような笑みを浮かべ

「私の別荘だ！」

と言い放ち先導して歩いて行く

俺達はその後に続いていく

しかし、エヴァは外へと通じる扉ではなく家の地下へと続く階段へと向かっていく

俺はエヴァの別荘がどういう物かしているから不思議に思わないが二人は不思議に思っているようだ

階段を下り少し薄暗い部屋に着くとその中央で大きなボトルとその周りがうっすらと光っていた

近づいてよく見るとボトルの中には建物のミニチュアがある

「これが・・・」

「エヴァちゃんの別荘？」

「そうだ」

「・・・おもちゃじゃん」

裕奈呟くとアキラもなんとなく苦笑いを浮かべている

「いいから黙ってついて来い」

そう言いボトルの方に近づいていくと急にエヴァの姿が消える

「えー!!」

「消えた？」

「ほら、俺達も行くぞ」

あっけにとられている二人の手を掴み進んで行くと突然、体が浮かぶ感覚がした

「わー!!」

「きゃー!!」

その感覚に二人は驚き俺の腕にしがみつく

しかし、数秒でその感覚は無くなり足の下に地面を感じる

そして目に入ったのは

「わぁ~~~~」

「すごい」

南国の島だった

「やっと来たか、早くついて来い」

さっさと進んで行ってしまいうエヴァの後を追いかける俺達

「エヴァンジェリン、ここはどこだ？」

「私の造った別荘だ。しばらく使って無かったがお前らの修行にちょうどいいと思い掘り出した」

「へ〜こんなの造っちゃうなんて魔法使ってすごいんだね〜」

裕奈は驚きあたりをキョロキョロと見回している

「ああ、ついでにここは一日単位でしか利用できないからな。丸一日は出れないぞ」

「「ええ〜〜!!」」

「じゃあ、明日まで出れないってこと？」

「明日の授業どうしよ〜！」

「よし！授業サボれる！」

一人違う反応に二人の視線が刺さる……冗談なのに

「最後まできちんと話を聞け！」

エヴァの一声で俺達は黙る

「ここは外と時間の流れが違う。浦島太郎の竜宮城つてのがあっただろう。ここはその逆だ。ここで一日過ごしても外では一時間しか経過していない」

「つまり一日いても明日の授業には出れると」

「そう言う事だ」

「残念だったね〜佑太〜」

だから、冗談だったのに

「それでは修行を始める前にこれを渡しておこう」

エヴァは懷からカードを四枚取り出す

「こっちの二枚が貴様のだ佐倉佑太」

エヴァから受け取ったカードを見ると裕奈とアキラの姿がそれぞれ描かれていた。おそらくこれがパクティオーカードのオリジナルなんだろう

「そしてこつちのがそれぞれ大河内アキラ、明石裕奈のパクティオーカードだ」

残りの二枚の複製カードをそれぞれアキラと裕奈に渡す

「……綺麗……」

「これで私も超能力者か」

「それは違うと思うのだが……」

アキラは純粹にカードに見惚れているが裕奈は違うところで感動している

「それがお前らのパクティオーカードだ契約したという証だからな。無くすなよ」

「うん」

「はい」

「わかってるよ」

それぞれが返事をする

「次にカードの使い方を教えてやる。佐倉佑太貴様も自分のカード

を出せ」

「ああ」

自分の仮契約カードを出すとアキラと裕奈の目がそれをとらえる

「佑太君も誰かと仮契約してたんだ」

「ん？という事はその子とキスしたってこと！！」

二人の視線がきつくなる

「佑太、誰と仮契約したのか私達に教えてくれないかにゃ」

笑顔で俺に詰め寄ってくる裕奈だがその背後に般若の面が見える。
その恐怖に負け正直に答える

「えっと……エリカ先生です」

「「！！」」

裕奈とアキラの顔が驚きに変わる

「佑太君って……ロリコン？」

「ぐはっ！」

生涯最大のダメージを受ける……そうだよな十歳の少女とキス
するって……orz

・・・あれ？でも彼女は前世から合わせれば普通にいい年じゃん！
問題な・・・くは無いな見た目どう見ても子供だし

「貴様がロリコンだろうとそんなこと今はどうでもいいからさっさとアーティファクトを出せ」

絶望に打ちひしがれてる俺に対しキツイ一言を浴びせるエヴァ・・・
ここに俺の味方はいないのか

「はいはい。来い（アデアット）！-」

とりあえず言われた通り仮契約カードを出しアーティファクトを出す

「もういいぞ」

「あいよ。去れ（アベアット）」

「このように、アデアットで呼び出し、アベアットで戻せる。さっそくアーティファクトの名前を確認し呼び出してみる」

「うん」

「わかった」

二人とも自分のカードを見る

「私のは流水の羽衣リユウスイノハコロモか・・・アデアット」

出てきたのは水色の羽衣

「羽衣……だね」

「羽衣だな」

「おそらく防御向けのアーティファクトなんだろう」

「防御向け……か」

アキラは少し嬉しそうだ

彼女は基本的には争いことは苦手なのだろうそこで防御向けのアーティファクトが出たので少し嬉しかったのだろう

「とりあえず身に着けてみれば」

「うん」

アキラは羽衣を身に纏うと

「うわぁ……これ、すごく軽い……あれ、これ浮いてる？」

羽衣は身に着けるといふよりもアキラの周りでゆったりと浮いていた

「おそらくそのアーティファクトの特性か能力だろう」

「へ」

「次は私がやってみるね。私のは嵐の双銃か……アデアット」

アラシノソウジュウ

出てきたのは漆黒の装飾銃が二丁……ってあれ？

「わぁ〜カッコイ〜」

「見たまんま銃だなしかも二つ」

両手に現れた装飾銃を見つめながら言う裕奈だが俺はその銃に見覚えがあった

あれって……black catのハーデイスじゃん数字は刻まれてないけど

「でも、これ弾が入ってないみたい」

「おそらく魔力や気が弾代りになるのだろう。それは後々教えてやるう」

「うん、すぐには使えにやいのか……残念」

アーティファクトの確認が終わったところでエヴァが俺達の前に立ち修行内容を話し始める

「さて、アーティファクトの確認が終わったところでお前たちの修行内容が決まったぞ。まずは大河内アキラ！お前は体の動かし方基本的に攻撃の避け方それとアーティファクトの特性を理解するところからだ」

「うん」

「次に明石裕奈！お前も大河内アキラと同じく体の動かし方を覚え

て貰う。それとお前には魔力の使い方つまりは簡単な魔法も覚えて貰うぞ」

「了解」

「基本的な動き方は茶々丸に教われ。茶々丸！」

「了解しましたマスター。それでは大河内さん、明石さんこちらへ」

茶々丸の後に続いて行く二人。その後に俺も続こうとするが

「佐倉佑太、貴様はここに残れ」

「は？」

エヴァに呼びとめられてしまった

視線の先、少し距離が開いた場所でアキラと裕奈に茶々丸が訓練を着けている

「さて、貴様のアーティファクトもう一度見せろ」

見せろって

「さっき見ただろ？」

「さつきはあいつらに見せるためでちゃんと見てはいなかったんだ。だから見せる！」

強制っすか

「わかったよ・・・アデアット！」

アーティファクト・赤龍帝の籠手を出す。するとエヴァが俺の腕を正確には籠手を掴みじつと見ている

「この紋章・・・まさか、ロンギヌス神滅具の一つをこの目で見る事があるとはな」

エヴァの言葉に驚く

「なん・・・で」

「何を驚いている、それぐらいの知識はあるぞ・・・赤龍帝の籠手、赤き龍の力を宿した神滅具。言い伝えによると十秒ごとに持ち主の力を倍にしていく能力・・・時間を稼げればいずれは神にもならぶ力を得られる。狂ったような力の結晶だな。だが、時間を要する分リスクもある・・・一応は貴様も知っているようだがな」

そうエヴァは言うが、俺が驚いたのは別のところだ

神滅具の概念が存在しているということだ

この力は転生者のチート能力としてゼウスの爺さんから貰った他の作品の武具だこの世界には存在しない
ハズの・・・しかし、エヴァは神滅具・赤龍帝の籠手の事を知って

いた

どういふことなんだ？

「エヴァンジェリン・・・聞きたい事がある」

「・・・なんだ」

俺の表情から重要な事だと判断したのだろうエヴァの表情も真剣な物になる

「お前が知っているだけで他にどんな神滅具がある」

「・・・私が知っているのは貴様のを合わせて三つ・・・伝承から調べても神滅具は三種類しかない」

「その中に・・・白龍皇の光翼ディバイン・ディバインゲというのはあるか？」

俺が一番聞きたいのはここだった。もし白龍皇の光翼が存在したならば二天龍の因縁で戦う事になるかもしれないからだ

「・・・いや、伝承に残っている神滅具は剣、槍、籠手の三種それ以外は存在しない」

「・・・そうか」

エヴァの言葉で少しは安心した。これで余計な因縁は無いだろうと

「事のついでだ貴様もここで少しは鍛えたらどうだ」

エヴァの提案は魅力的だ・・・・・・・・・・が

「タダじゃないんだろ」

「察しがいいな・・・・・・・・赤い龍の力を宿した者の血を一度は飲んでみたいと思ってな」

「さいですか」

やっぱり・・・・・・・・俺の血なんて上手くは無いだろっに

「まあ、どちらにしろあいつらの使用料として貴様の血はいただくがな」

「どっちにしても血い吸われんのかよ！」

既に逃げ道は無かった

十時間目「鬼ごっこ?そして修行開始」(後書き)

まずは、二週間ほど更新ができずすみませんでした。二人のアーティファクトがなかなか決まらなかったこと風邪でダウンしてなかなか小説を書くことができませんでした。今週から再び更新を再開できるように頑張ります。

あと、ご意見、ご感想も受け付けております。

十一時間目「居残り補習とドッジボール」(前書き)

十一話目投稿します

十一時間目「居残り補習とドッジボール」

エヴァの別荘で修行を初めて一週間・・・まあ、こっちでは三日しか経ってないんだが過ぎた

それは今朝のHRでの出来事だった

「と、言う事なので綾瀬さん、アスナさん、まき絵さん、長瀬さん、クーフエイさん、佐倉さんの6人は放課後に居残り授業をしますの
で残ってくださいね」

「はい？」

突然言われた言葉が理解できず

「ちょっと待て！居残り授業ってなんだよ！」

立ち上がり発した声に教室中の目が後ろの隅俺の席の方へと集まる。
ちなみに俺の席はエヴァの横だ

「そのまんまの意味ですよタカミチが授業をやっていた時にたまに行っていた小テストの得点があまりにも低かった生徒には居残り授業をしていたんですよ。それを今回からは僕がやる事になりました
ので……………」

「そうじゃなくって俺が聞きたいのはなんで俺も居残り授業に出なくちゃいけないのかってことだ」

なんでそんな面倒なモン出なきゃいけないんだよ

「佐倉さんの場合はタカミチの授業を受けた事ありませんのでとりあえず出て貰うという事です。それに……」

言葉の途中でネギの言葉が言い淀むと隣にいるエリカさんがその続きを口にする

「あんだ、まともに授業受けてないでしょう」

「受けてるよちゃんと教室にいるだろうが」

「いるだけで大半寝てるじゃないの」

そっぴやそっぴだな……だって一度受けた事のあるのをもう一度聞くって……

「だから、とりあえず受けときなさい」

「いや、放課後は用事が……」

エヴァの別荘での修行を言い訳にしようとしたが、

「別に貴様がいようといまいと特に問題は無いからしっかりと居残り授業をやってこい」

「……さいですか」

エヴァから念話で戦力外通告されたどうやら俺の存在はどうでもいらしい……というかエヴァさんや俺に対しての態度が冷たくはありませんかね

「いや、なにかこうお前を見てるといじめたくなつてな」

このドS幼女め！

「……………今日は特別だ私が直々に手ほどきを加えてやる
う」

ごめんなさい！俺が悪かったんで勘弁してください！

いつもの俺の別荘の過ごし方としては茶々丸とチャチャゼロとの組み手がほとんどだ。どうやら俺自身戦うという事の経験が足りないらしくその辺の経験を積みまされている

・
たまにエヴァともやるがその時一方的に攻められ何もできずに終わるのがほとんどだ。一度だけまともにダメージをあたえた事があつたがその後エヴァの魔法をくらい半日ほど氷漬けになったけ…………

「あはははあ……………ご愁傷さま？」

「が、頑張つてね佑太君」

ちなみにこの会話は裕奈とアキラにも聞こえていた

「ネギ先生！俺、すんげえ勉強してえから居残り授業に参加するわ
！」

「ホントですか！わあ…………一緒に頑張らしましょうね」

「おう！」

俺の急変にネギは喜び数人の生徒を覗いて他の生徒は少々戸惑っておりある人は仲間ができたアルなど

まあ、誰とは言わんが

残り数人、俺達の会話を聞いてた三人と副担任は呆れ顔と苦笑이었다

十一時間目「居残り補習とドッジボール」

「というわけで……2 - Aのバカ五人衆とおまけがそろったわけが……」

バカブラックこと綾瀬夕映

「いっしょ」

バカブルーこと長瀬楓

「てへへ」

バカピンクこと佐々木まき絵

「アル」

バカイエローこと古菲

「誰がバカレンジャーよっ！」

バカレッドこと神楽坂明日菜

「おまけって俺のことか？」

そして俺の六人が残っている

しかし、長瀬と古菲その腕で波を表わすようなフニャフニャな動きはなんだ

その間に明日菜とネギとのやり取りがあつたがその辺はどうでもいいだろう

「えーと、じゃあまずこれから10点満点の小テストをしますので6点以上とれるまで帰っちゃダメです」

それぞれ前の方の席に着き説明を聞くまあ、小テストで合格点を取れという事か

横では余裕だという二人が・・・お前らはさっきから緊張感とかまったくねえな

「じゃあ始めてください」

開始の合図聞き問題に向き合う……なんだこりゃ？普通に簡単じゃねえか

数分後

「できましたです」

「俺もできたぞ」

俺と綾瀬の二人が立ち上がりネギの元へとテストの用紙を渡す

「えっ、もうですか!？」

二枚の用紙を受け取り採点を始めるネギ

「……うん、4番綾瀬夕映さん9点合格です」

綾瀬は頬笑みその後ろで待っていた宮崎と早乙女が共に喜ぶ

「全然できるじゃないですかー」

「……勉強キライなんです」

ほめるネギに少しすねる綾瀬

「次に佐倉さんなんですけどえっと……」

何か言い辛そうなネギ。なんでだ？普通に全問解けたハズだが？

「・・・・・・・・１点です」

「は？」

どういうことだ？キッチンと解いたはずだぞ

「えっと・・・佐倉さんの場合理解もできていて答えも当てるんですけど・・・スペルがところどころ間違っています」

「マジで？」

「はい・・・で、でもおおそできているのもう一度同じ問題を今度はスペルに気よ付けてやってみてください」

さっきやったのと同じ問題が書かれた用紙を受け取り席に戻る

さらに数分後

長瀬楓 3点

古菲 4点

佐々木まき絵 3点

首をかしげる三人

「あれ？アスナさんは？」

「う・・・」

差し出した用紙には2の文字が

「よっしゃ、今度こそはできたぜネギ！」

「・・・・・・・・えっと、佐倉さんまたスペルが違います」

アスナと同じ2の文字だった

それからネギがポイントの説明をした事で長瀬、古菲、佐々木の三人は合格し教室にはネギ、アスナ、俺の三人だけになった

さらに時は進み日が暮れるが・・・

目の前には1～5の数字が一つずつ書かれている紙がならんでいる

まさか、中3の問題ができないとは

「おつ、やっぱり例によってアスナ君・・・・・・・・となんで佐倉君までいるんだい？」

タカミチが廊下側の窓から顔を出している

「たっ・・・・・・・・」

「うるせーこんなに難しいとは思わなかったんだよ」

アスナはうるたえ俺は愚痴を吐く

「ははは、そうかいじゃ、がんばってね三人とも」

そう言い残すとタカミチは去っていった

するとアスナはうな垂れ僅かに震えていると

「うわああーん」

「ああ!？」

急に駆けだして行ってしまったアスナ。その後を追っていったネギ

「・・・・・・・・俺はどうすればいいんだ？」

そして教室には俺一人残された・・・・・・・・寂しい

「・・・・・・・・・・・・・・・・帰るか」

とりあえず先に帰ると書置きを残しカバンを持ちエヴァの家へと向かった

翌日の昼休み

俺はタカミチと二人で歩いていた

「学園生活はどうだい？ 佑太君」

「周りが女だらけで疲れる」

「はははは、確かにあのクラスは元気がいいからね」

「元気がいいにもほどがあるだろう」

タカミチは笑っているが実際あれは辛いんだぞ休み時間のたんびにあつちに引つ張れこちに引つ張られて半分パシリ扱いだ

「ん？ 何か騒がしい様だけど」

タカミチが視線の先に騒いでいる集団をとらえる

「あれは神楽坂と雪広と・・・黒い制服の集団？」

「あれは聖ウルスラ女子高の制服だよ」

この学園いくつの学校があんだだよ。あ、取っ組み合いのケンカが始まった

しかしあいつらも好戦的すぎるだろう

「ったく、あいつら止めてくるわ」

「大丈夫かい？」

「何とかなんじゃね」

タカミチから離れアスナ達の集団へと向かう

「あ！」

「佑太！」

アキラと裕奈の二人は俺に気づいた様だがここはスルーをし

ビシッ
×2

「あいた！」

「きゃ！」

「落ち着かんかドアホども」

特に好戦的な二人の頭に軽いチョップを決める

「さ、佐倉！あんた」

「じゃ、邪魔をしないで下さいませんか佐倉さん！このままではネギ先生が」

「どう言われようが先に手を出したら負けだ。それに女が取っ組み合いのケンカなんてみっともねえよ」

「う……」

「ですが……」

納得の言って無い二人を無視してウルスラの生徒の方を向く

「クラスメイトが手を上げるような事をしてしまいすみませんでした」

「いえ……ってなんで男性が……もしかしてあなたが噂の……男子生徒？」

俺の事ウルスラの方にまで行ってるのね

「はい！しかし、先輩方も中学生相手にするのはいささか大人げないのでは？」

「う……それは……」

「ちょっと佐倉！何謝ってんのよ！悪いのはあいつら……」

「さつきも言っただろ。手を出したらお前の負けだぞ神楽坂」

こいつは人の話を聞いていたのか？……まあ、興奮してて耳に入んなかったんだろうが

「そうだね。佑太君の言う事は正しいよ」

そこにタカミチが遅れてやってくる

「た、高畑先生」

その後はタカミチがまとめ上げその場は解散となった……なん
か最後の最後はタカミチ任せになってしまったな

その事でタカミチに礼を言うがタカミチは笑って

「ほとんどは君が収めてくれたからね。それほどの手間はかからな
かったさ」

と言われた

そして午後の授業へと進み科目は体育。皆は教室で着替えているが
さすがに男の俺は教室で着替えられるハズも無く（教室で見た目小
学生の双子の片割れに脱がされそうになったが）教室より遠い教員
用の

更衣室で着替えてから屋上に向かう。今日の種目は屋上のコートで
バレーだからだ

屋上に着くと

「ハクシユン!!」

突風と共にめくれ上がる女子生徒のスカート……ふむ、眼福眼福

「ではどうでしょう両クラス対抗でスポーツで争って勝負を決める
んです」

いつの間にかクラス対抗で勝負することになっていた

「いいわよ、私達が負けたらおとなしくこのコートから出ていくし、今後昼休みもあんた達の邪魔はしないわそれでどう？」

「だが、高校生と中学生だと身体能力に差が出ませんか？」

とりあえず俺の存在が空気に近くなってるのでここで少し出しやばってみる

「佐倉さん！」

「あんた今頃来たの！？」

俺の登場にネギは驚きアスナは文句を言うが

「教員用の更衣室は遠いんだよ。それと先輩方、年齢や体格の差はどうするおつもりですか？」

「それならハンディをあげるわ。種目はドッチボールでどう？こっちは全員で11人そっちは倍の22人でかかってきていいわよ」

いや、種目はともかくそれはハンディじゃないから

「あの先輩？ドッチボールの人数の多い方がふ」わかったわ約束よ！！」おい、神楽坂」

「大丈夫よ！一対一は無理でも二対一なら勝機はあるわ！」

このバカレッドがそれじゃ逆にハンディ背負っちゃまうんだよ

「皆いくわよー!!」

「よし」

「後悔するなよ」

裕奈に双子あおるなよ

「ただし！私達が勝つたらネギ先生を教生としてゆずってもらっわ」

「いいわね？」

「な・・・」

「え~~~~っ!!」

あ~~~~もう知らんかってにしろ

ポン、ポポン

茶々丸が花火をあげ、チア部の三人組が音楽に合わせて踊っている・
・・・前の世界ではチアって実際に見た事が無かったから新鮮だな
とりあえず俺は男という理由でメンバーには入っていない・・・別にやる気ないからいいんだけど

「佑太（君）!!」

「んあ？」

振り向くとアキラと裕奈

「「私たち頑張るから見ててね」」

「お、おう」

二人の気迫に押される。そんなに高等部が嫌いなのか？

「くくく・・・やはり貴様は鈍いな」

後ろからエヴァが声をかける

「まあいい、大河内アキラ、明石裕奈貴様ら二人は一度でも当たったら今日の修行はいつもの二倍だ」

「「ええ〜〜！」」

いや、二人とも最近ようやく付いていけるようになったところなのに二倍とか鬼でしょ

「嫌だったらあんなガキ達の球に当たるな。いいな」

「「は、はい・・・」」

ガキって見た目はエヴァの方が子供みたいなんだけどな

「貴様、今変なこと考えなかったか？」

「イエベツ二」

「まあいい、変わりに一人でも当てたらこいつを好きにしていぞ」

「はい!!」

この幼女いきなり何を言い出しますか

「佑太君を・・・／＼／」

「好きに・・・／＼／」

何を想像して頬をそめるんだ

「俺の意思は？」

「あると思っていたのか？」

「・・・さいですか」

こんなやり取りを終え二人はコートへと入り試合が始まる

「しかし、あいつらはバカなのか」

そのまま腰を下ろすと隣に座っているエヴァが話しかけてくる

「バカなんだろ。逆にハンディを背負ってるんだから」

「だろうな、あんなコートに22人もいたら的が多くなり圧倒的に

不利だからな」

アスナ達もそれにようやくそのことに気づいたらしい

だから止めようとしたのに

その後も何人かがアウトになるがアスナがボールを取り高等部の生徒に向け投げるがあっさりと・・・

いや、普通にとってはいるが少し痛そうだ

そして、彼女達は実はドッチボールの関東大会優勝チーム「黒百合」だとわかった

ちよつと制服を脱いでる瞬間ドキドキしていたのは秘密だ

いや、お前らバカにしてるけど関東優勝って普通にすごいからな・・・
・・・全国では知らないが

その後、雪広がトライアングルアタック（まあ普通に三角形でパス回して当てるだけだ）でアウトになりアスナが二度当てをくらい怪我を（かすり傷だが）しアウトになったがアスナの言葉でネギがネギの言葉でクラスが一つになり結果2 - Aの勝利となった

「やったー」

「勝ったー」

裕奈とアキラも最後まで避けきり共に相手をアウトにしていた

クラスが喜びを分かち合うなか、アスナの背後でリーダー格の高等

部の生徒がボールをあげスパイクの
体勢に入る

「まだロスタイムよ！」

繰り出されたスパイクはすごい勢いでアスナへと迫る

「危ないアスナさんっ！」

「え？」

ネギが叫ぶがあの状態では避けられないだろう……クソが！

バチィッ

一瞬でアスナの背後に回り片手でボールを受け止める

「な……」

「佐倉……」

「佐倉さん……」

どうやら後ろにはネギもいるようだ

「……『どんな汚い手を使っても勝つ』お前らのポリシー
を否定するつもりはない……だが！」

「ひっ！」

ウルスラの生徒を睨みつける

「それは試合の・・・ルールの中でだけにしろ！」

ボールをおもいつきり投げ返す

「きゃっ!!！」

俺の投げたボールを受け止めきれずはじかれて倒れてしまう

「ルールの守れない奴にスポーツをする資格は無い!!これ以上こんなことを続けるつもりなら・・・」

はじかれて宙に上がっていたボールが再び俺の手元に戻りそれを突き出す

「今度は俺が相手をしてやる。もちろん・・・手加減なしでな」

「「「・・・」」」

呆然と俺の方を見ているが

「お、覚えてなさいよ～～～！」

「あ!!」

「ちょ、待てって」

俺の視線に耐えきれなくなったのかリーダー格がコートから逃げ出し他の生徒も次々と屋上を後にする

「ふう」

やっと一息付くと

「「「か・・・・・・・・」「」

「ん？」

「「「かつこいい〜〜〜」「」

「うお！」

クラスメイトが俺の周りに集まってくる

「『ルールの守れない奴にスポーツをする資格は無い!!』だって」

「『俺が相手をしてやる。もちろん・・・手加減なしでな』だって」

「「「きゃーーーーー!!!!」「」

なんかすごい事になってるんですけど

「佐倉さん!!すごいです！」

興奮気味のネギ・・・・・・・・って、ああ！なんてこったあの場面は本来ネギがアスナを助けて女子高生の服がはじけ飛ぶシーンだったはずだったのになんてことしちゃったんだーーーー俺はーーーーorz

「ど、どうしたのよ佐倉」

俺が突然うなだれたので不審に思ったのかアスナが近づき声をかけてくる

「い、いや、なんでもない・・・それよりも神楽坂は怪我は大丈夫か？」

「え、ええ、大丈夫よ。あ・・・ありがとうね。佐倉」

視線をそらしながら礼を言ってくるアスナ

「ん？なんか言ったか？神楽坂？」

最後の方がよく聞こえなかった

「つ~~~~~~~~あ、アスナでいいって言ってんのよ呼び方を!!」

「お、おう。わかったよアスナ」

「ふん」

なんで助けたのに怒られなあかんの？

「「「改めて、試合終了ーッ!!」」」

ネギを胴上げし高等部とのドッチボール試合が終わった

ちなみにその頃エリカさんは他のクラスで普通に授業をしていたらしい

余談だが、翌日から外を歩いているとよくウルスラのドッチボール部の「黒百合」の人たちに声をかけられるようになった・・・
何で？

十一時間目「居残り補習とドッジボール」（後書き）

やっと一巻目の内容が書き終わりました。今回は珍しく主人公がかっこいい！・・・のかな？そして、エリカさん・・・ほぼ空気です。私が未熟なせいではほとんどオリキャラのエリカさんが目立ちません。次回はオリジナルを一話入れてみてから図書館島の話へ入ろうと思います。

十二時間目「もう一つの力」(前書き)

十二話目投稿します

十二時間目「もう一つの力」

「くっ」

狙いをつけられないように縦横無尽に走り回る

エヴァの魔力の込められた拳が迫る。それを捌き受け流すが

「ほら、脇ががら空きた」

逆の手が迫るがそれは捌ききれず腕でガードをするが耐えきれず吹き飛ぶ

「ちっ」

吹き飛ばされながらも何とか体勢を立て直す。エヴァは攻撃をしたその場に浮いていて距離があるがのんびりしてる余裕はない

休む間もなく両サイドから茶々丸とチャチャゼロが迫ってきている目の前で二人が交差し左右が入れ替わり茶々丸の拳がチャチャゼロの両手に持っているナイフのうちの一つが俺に迫る

迫りくる二方向からの攻撃のうち俺は茶々丸の方へ一歩踏み出し茶々丸のパンチに勢いが乗る前にその腕に手を添えその勢いをそのまま流し茶々丸を投げ飛ばしそのまま回転し逆方向から迫ってくるチャチャゼロのナイフを籠手で受け止めさらに回転の勢いを殺さずチャチャゼロに回し蹴りを繰り出すがそれはもう一つのナイフによって防がれるが勢いは殺せず吹き飛ぶ

「ふっ」

追撃しようとチャチャゼロが吹き飛んだ方向へ駆けだすが横からの殺気にとっさに腕を上げガードの体勢を取ると一秒も立たないうちにガードした腕に衝撃が走る

「よく防いだが・・・リク・ラク ラ・ラック ライラック 来れ
アストラフサト
(ケノテートス) 虚空の雷薙ぎ払え(デ・テメトー)！」

エヴァの詠唱が聞こえ中断させようとエヴァとの距離を詰めようとするが詠唱と同時にエヴァは後方へと飛び開いたスペースに茶々丸が現れる

急いでエヴァとの距離を詰めようとしたため茶々丸への対処が遅れ一本背負いのようりで投げ飛ばされ

「ディオス・テュコス
雷の斧!!!」

「があああ!」

雷系の魔法が全身を襲う

十二時間目「もう一つの力」

「し、しびれる……」

「ふむ……五分か……まだまだだな」

「あ、あれでまだまだって……」

「私達からしたらすごいとしかいいようがないんだけどね」

アキラと裕奈は組み手を見学していたが途中からどうなったかわからなくなってきたしまったらしい

「三対一でアーティファクトの能力無しとはいえ最低一時間は粘れるようにしろ」

「いや、いくらなんでも一時間は……」

一時間粘らなきゃいけないなら途中で逃げるし

「それぐらいでないと貴様の場合は生き残れん。貴様はそれ程危険なモノを宿しているんだからな」

「まさか……」

「冗談ではないぞ、ロンギヌス神滅具とはそれほどまでしても手にしたいと思う代物なんだからな」

「ふ……ん」

「すごいんだね」

アキラと裕奈の驚きは薄いようだ。まあ、いきなりそんなこと聞いても、二人はいまいちロンギヌスについてわかってないみたいだし「他人事ではないぞ。お前らもこいつの従者なんだから私クラスの奴らに狙われる可能性もあるんだぞ」

「「えゝ！」」

それを聞いて二人の顔色が変わる。いつもの組み手は手を抜いたレベルであれだからな

「今ならまだこいつとの仮契約を解約して元の日常に戻れるぞ」

「「だ、大丈夫です！」」

少し声が震えてるようだが二人の決心は揺らがないようだ

エヴァの顔も満足そうだ

「ま、いざとなったらアレを使うから大丈夫だろ」

「ん？アレとはなんだ？」

初めて聞いたぞという表情をしている

そりゃそうだまだ言って無いし。だから・・・

「・・・・・・・・ひ・み・つ！」

某アニメの未来から来た少女の禁則事項のしぐさを取る・・・・・・・・
え？キモいつて？ほっとけ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エヴァの手に魔力が集まる

「・・・・あのエヴァンジェリンさん？その手の魔力は・・・・」

「いや、ちよつと今の貴様にムカついたからな・・・・・・・・凍てつく氷
枢」

エヴァの魔法により氷柱に封じ込まれました

やっぱり男がやるもんじゃねえな

数分後

「そんなものまで持っていたのか貴様は・・・・・・・・」

「エヴァさんやそろそろ体の感覚が無くなってきたのですが・・・・」

現在、俺の体は未だに氷柱の中にあつた。全身を封じ込めた状態ではO H A N A S I ができないので首から上だけは氷から解放された

「茶々丸！大河内アキラと明石裕奈のアーティファクトの特性と能力は理解できたのか！」

無視ですかい……

「はい。まず、大河内さんのアーティファクトは水を操る事ができ、羽衣自体は攻防一体の武器です」

……氷紋の羽衣版みたいなもんか？

「次に明石裕奈さんのアーティファクトですが、マスターの予想通り魔力を弾として打ち出せますが魔力の込め方の違いでしょうか五種類の弾丸が確認できました」

……某あさり貝のマフィアの右腕ですか？

「そうか……よし、そのまま続けアーティファクトを使いこなせるようにしろ」

「はい！」

「了解しましたマスター」

そのまま二人は修行を再開し茶々丸もその後に続いて行ってしまったあ、そろそろ眠くなってきたかも……

「おい、いい加減起きるか！貴様はこれから見回りの仕事だろうが」意識が遠のきかけたところで氷柱を解かされエヴァに蹴り起こされる

「ういゝっす」

そう言えばそうだったなと思い出す。昨日までは転校したばかりだからまだいいと言つのでやらなかったのが初の見回りだ

何とか起き上がり別荘を出て学園長室へと向かった

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

く、空気が重いです。俺は今、桜咲さんと龍宮さんと三人で学園長に頼まれた通り園内を見回ってます

当初は一人で見回るハズだったが学園長室に言ったら二人がいて最初だから一緒に回るように言われました

そう言うわけで三人で見回りをしているんですが……

「……………」

「……………」

二人とも終始無言さらに桜咲さんに関してはすんごく睨んできます・
……アンでだよ？

刹那 side

私と龍宮は今最近転入してきた佐倉佑太という生徒と共に夜の学園
の見回りをしている

彼には最初だから私達が同行すると言ってついて来ているがもう一
つ目的がある

『彼、佐倉佑太の実力を確認する』

これが私と龍宮が学園長に依頼されたもう一つの依頼だ

私にとってこの依頼都合がよかった

学園長がどういう思考で彼を女子中等部にしかもお嬢様のいるクラ
スにこの男を転入させたのかわからないが、この男がお嬢様にとっ

て害をなす者かどうか、西の刺客かという考えも完璧に無いとは言えないのだから

学園生活での彼とお嬢様はごく普通の親しい友人という感じだ

他のクラスメイトに関しても同じようだが、特に仲がよさそうなのは大河内さんや明石さんの運動部の四人、鳴滝姉妹にクーぐらいだろう

もっともクーに関しては先日のドッチボールの一件以来、彼が強者だと感じ勝負を挑み続けそれを断られ続けなお諦めず挑み続けているだけで、鳴滝姉妹に関してはいたずらの対象になっているというような感じだが

（刹那）

（ああ、この辺ならいいだろう）

龍宮からの念話で考えを止める

いつの間にか世界樹前の広場に出ていたようだ

そこで私は夕風を龍宮は銃を取り出し

「止まれ佐倉佑太」

彼、佐倉佑太に突きつけた

s i d e o u t

「止まれ佐倉佑太」

世界樹前の広場に出たとたん桜咲さんには刀を龍宮さんからは銃を向けられていた

「……どういっつもですか？桜咲さん龍宮さん」

あくまでも冷静に変に焦ると酷い目に遭う……主にエヴァとの修行に関してだが

「君の実力が知りたくてね。万が一の時に足手まといは邪魔だからね」

二人の眼は真剣そのものだった

どうしてこう俺は力試しとかそういうのが多いのだろうか……

「はっ！」

落ち込む暇もなく桜咲さんが斬りかかってくる

それを後ろに跳びかわすが続けざまに斬撃が迫る

「試させてもらうぞ貴様がお嬢様に害を成す者かどうか」

「くっ」

リーチの違いで中々攻撃に移れない

「神鳴流奥義……」

まずい！

足に氣をためその場から飛び退く

「斬岩剣……！」

一太刀で岩をも切り裂く神鳴流の奥義……マジで殺す気ですかあんな

服一枚で斬岩剣をかわす。腹のあたりがパツクリ切れてら

そこでかわした事に安心したのが不味かった

「私のことを忘れては困るな」

「しまっ」

気づいた時には遅く龍宮さんの放った銃弾がギリギリのところを掠める

「今のは威嚇だ……今度隙を見せたら君の体に打ち込むよ」

服を掠めた程度ですんだが現在彼女の銃の照準は確実に俺の左胸にあっている

・・・ったくよ、この二人マジで殺る気だよ・・・

桜咲さん・・・いや、桜咲は再び構え龍宮も銃を構えたままだが、さつきよりも二人の殺気は増している

・・・そこまでやるなら仕方ねえ

「おい、テメエら」

・・・久しぶりに使うか

「後悔しても知らねえからな」

頭の中でスイッチを切り替える。そして・・・

「格の違いってヤツを見せてやるよ」

押さえていた殺気を少しずつ解放した

刹那 side

「格の違いってヤツを見せてやるよ」

その言葉と共に私達の周りを重い・・・とてつもなく重い殺気が包む

この男は誰だ？

さっきまで目の前にいたのは多少は腕があるかもしれないがどこか抜けているひょうひょうとした男だったはずだ

だが、今私達の目の前にいる男は違う。あの目は・・・

「いくぜ・・・」

「ッ！！」

男の姿が消えた瞬間衝撃が私の体に走る

「刹那！！」

龍宮が呼ぶ声と遠ざかる姿を見て初めて私は自分が吹き飛ばされている事に気が付いた

「くっ！」

空中で体勢を立て直し着地するも飛ばされた勢いが残っているので少し着地地点から後方へと流れるが背後から首を掴まれその勢いが止まる

「よぉ！」

背後から聞こえた声には私は背筋が凍った

「さっきまでの威勢はどうしたよ」

振り向いたそこにはあの男が……

「刹那あ!!」

「ちっ」

龍宮の放った銃弾が迫って来た事に男は再びその場から消えた

「大丈夫か刹那」

龍宮が駆け寄ってくる

「ああ、先ほど掴まれていた首が少し痛む程度だ」

「彼を少し甘く見ていたようだな」

「ああ」

彼は力を隠していたんだ……

「相談は終わったか？」

少し距離を空け彼は悠々と歩いてくる

「こんなもんじゃ終わんねえんだろ」

「い、いや、お前の力はわかつ「アデアット!」」

私の止める声も聞かず彼はアーティファクトを呼び出す

リバーズワールド
「逆転する世界！！」

その手には一振りの刀が握られていた

「やるしかないようだな」

「ああ」

再び夕風を構えるが先ほどのダメージが残っているせいから少し震えている。いや、これは攻撃が残っているのではない

怖いのだ。彼が……彼の殺意の籠った瞳が

「はあああ！」

恐怖を無理矢理消すかのように叫びながら彼に斬りかかる

後方には龍宮の援護がある

「神鳴流奥義：斬空閃！」

これは斬撃を飛ばし遠距離の敵を斬る奥義だ

「さあ、どうかわす！」

当たるとは思っていない彼ほどの実力があるなら手の刀で弾くか避けるはず

そこで龍宮が銃で足止めし私が斬りかかる

そう考えていた……

しかし、彼は私の予想していなかった行動を起こす

「なっ！」

避けずにそのまま斬空閃をくらったのだ

何故？

その疑問はすぐに解けた

「ぐうつ！」

右肩から腹部にかけての激痛で私は倒れる

その場に倒れた私は自分の体を見る。激痛の走った位置の通り右肩から腹部にかけてざつくりと斬られていた

そして彼の方を見ると彼はまったくの無傷だった。これは……どういう事だ？

「刹那！くそ！」

「ま、待て龍宮」

痛みで小さくなった私の静止の声は届かず龍宮が彼の四肢に向かって放つが再び彼は避けずその銃弾をその身に受けるが……

「っ!!」

痛みの声をあげたのは撃った龍宮の方だった

そして、撃たれたはずの彼はまたもや無傷……何が起こってるんだ？

「まだやるのか」

なんなんや……なんなんやあんたは

彼が一步步近づいてくる

「その程度かと聞いてるんだ」

勝てへん……うちはこの人に勝てへん

体が震える恐怖でどうにかなりそうや

「その程度ならてめえは何も守る事はできねえよ」

何も守れへん……

その言葉が心に突き刺さる

その言葉が昔の出来事を思い出させる

守れへんかった大切な友達

守ると誓った大切な友達

「お前にお嬢様は守れない」

守れない……お嬢様を……このちゃんを……

……それだけは

……その言葉だけは

「言わせへん」

刀を杖にして立ち上がる

「守ると……誓うたんや」

だから……私は

「死んでもこのちゃんを守るんや」

「なら死ねよ」

「え」

彼の握る刀が腹に刺さる

「がつ！」

「刹那ああああ！」

痛い傷が燃えるように熱い……遠くで龍宮の叫び声が聞こえる

「死んでも守るなんてのは弱え奴のいう事だ」

彼の言葉が頭に響く

「守られて死なれたら守られた方も迷惑だ」

私はこのまま死ぬんだ

「今のテメエに必要なのは生きる覚悟だ。守りながら生き抜いてみ
せろ」

生きる・・・覚悟・・・もうすぐ死んでしまつかもしれない私
が？

「お前は どうしたい？」

・・・私？・・・私は・・・

「いき・・・たい」

「・・・」

そうだ私は

「生きた・・・い。生きてこのちゃんを守るんや」

「刹那・・・」

龍宮がいつの間にか私のそばにいた

自分の心に素直に慣れた・・・

「ジャスト一分だ」

その声と共に世界がまるでガラスのように砕け散り崩壊した

「え？」

「これは・・・」

「『悪夢』は見れたか？」

そこにいた彼は先ほどまでとは違い年相応の意地の悪い笑みを浮かべていた

「なに・・・が」

龍宮も意味がわからないようだ

そこで私は気づく先ほどまでの焼けるような痛みが無いのだ

急いで自分の服を巻くしあげ確認するが先ほどまでであった傷が無い

「これは・・・」

龍宮も自分の体を確認するが先ほどおった傷が無かった

「どういうことだ」

理由を知っているであろう彼に目を向ける

「怪我が無いのは当たり前だお前らがさっきまで感じていたのは全て長い長い一分間の幻、夢だったんだからな」

ニツコリと笑っている彼の表情が少し憎らしい

「幻・・・だと」

「ああ」

「・・・聞いたことがあるありとあらゆる物に一分間の幻を見せる事ができる魔眼の一つ『邪眼』というモノがあると」

一分間の幻だと

「よく知ってんなその邪眼だよ」

彼はあつさりと認める。恐らくそれを知られたところで彼からしてもたいした問題ではないのだろう

「桜咲」

「はい」

「お前の覚悟は立派だ。守りたい大切な人がいるそのためには命すら投げ出す……だが、実際に死を体感してみteどうだった？」

「……もの凄く……怖かったです」

怖かった……意識が闇に包まれていく感覚

頭に過る友人達

そして……このちゃんの顔

思いだして少し震えが走った

ボンと頭の上に彼の手が置かれる

「だったら死んでもなんて悲しいこと、もう言つなよ」

「……はい」

その手は温かく心までも温かくなり私の目から涙がこぼれていた

「もう、大丈夫です。ありがとうございます」

「ん、そうか」

少しの間、涙を流していた私の頭を撫でてくれていた彼に礼を言う

「さて、いいモン二つも見れたし、俺はもう帰るわ」

「そうだな、もう解散してもいい時間だな」

「はい」

いいモノとはなんだろう？

「桜咲の泣き顔ってのは貴重なんだろ」

「な！／＼／」

わ、私の泣き顔って

「そつえば私も初めて見るな」

「た、龍宮」

そつえば最後に泣いたのは何時だっただろう

「ま、普通に笑ってりゃ桜咲も龍宮もかわいいんだから少しは笑えよ二人とも」

「「なっ！／＼／」」

何を言い出すんだこの人は

「じゃ、お先に」

そう言い残し彼は駆け出したが少し離れたところで振り返り

「そうだ、桜咲」

「はい？」

「男の前でおもいつきり服を捲るのはやめた方がいいぞ俺は眼福だったけどな」

「？．．．．．っ！！／／／」

言われて思い出す傷の確認とはいえ私は彼の前で服を．．．

「さ、佐倉さん！！！！／／／／」

怒鳴り声をあげるがそこには既に彼の姿は無かった

「くくく。さんざんだった刹那」

「龍宮．．．かもな、でも彼に教えられたよ自分の命の大切さを・

・・守る事の本当の意味を」

私は・・・お嬢様の事を守る事ばかりで自分の命まで見えてなかったのだな

「しかし、どこからが夢だったのだろうか」

「邪眼のことか？」

そういえば・・・

「一番最初の攻防は現実だったのだろう彼の服は切れたままだったし。そこから刹那が切れる前までの間だな邪眼をかけられたとしたら」

「その途中が彼の實力・・・もしくはアレらが全て幻だったのか」

「佐倉佑太・・・悪いやつではなさそうだが實力は不明か」

「ああ」

十二話目「もう一つの力」(後書き)

十二話目を投稿しました。今回はほぼ刹那サイドのお話でした。次回は期末試験の話になるか、飛んで春休みの話のどちらかです。どうするか考え中なので少し更新が遅れるかもしれません。

十三時間目「図書館島の探検」(前書き)

十三話目です。今回はすごく短いです

十三時間目「図書館島の探検」

図書館島それは明治中頃に麻帆良学園創立とともに建設された世界でも最大規模の巨大図書館。ここには二度の大戦の戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められた。蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返され、現在ではその全貌を知る者はいない。

そんな図書館島に今、俺は…いや、俺達（バカレンジャー＋ネギ、木乃香、俺）はいた

「なんで、俺はここにいるんだ？」

「さつきも話したでしょ図書館島の深部にある読めば頭が良くなる『魔法の本』を探しに来たのよ」

「いや、だから何で俺まで一緒に行かなきゃいけないんだって聞いてんだよー！」

「アンタが頭悪いからよ！」

アスナよ…お前にだけは言われたくないんだが…。あと、人を指さすな

「実はな……」

俺達の様子を頬笑みながら説明してくれる

十三時間目「図書館島の探検」

「つまり、学期末試験でのクラス平均点が最下位のクラスは解散し
その中で特に成績の悪かった人は留年どころか小学生からやり直し
……………」と

「そうやで。それでこの図書館島にある『魔法の本』を探しに来た
んや」

「…で、なんで俺も連れてこられたんだ？」

「それがな、ネギが佐倉君もあんま頭ようないってゆうからついで
につて」

ほう…あのガキやシバクぞ

現在は図書館島地下三階、中学生が入れるのはここまでらしい

「ほらほら、アスナさん見てください！これなんかスゴく珍しい本
…」

ネギははしゃぎながら近くの本棚の本に触るとカチツ！と音がする

「あ、先生、貴重書狙いの盗掘者を避けるために…」

夕映の言葉と同時にネギがいる本棚の反対側の本棚から矢が飛び出してくるが

「うひゃー!!」

寸前で長瀬がその矢を掴む

「ワナがたくさん仕掛けられていますから気を付けてくださいね。
マトモな図書館は地上部だけです」

長瀬は掴んだその矢を折った

「うそーっ!!」

「死ぬわよそれーっ!!」

佐々木は半泣きでアスナは普通に叫んでる

「……………しかし、なんだろう確かにこんなイベントはあったがその後
どうなったけ？」

最近、原作の内容がほとんど思い出せないんだよねあゝ…まあ、も
う十数年前の知識だからかな

「では出発です!」

「「「「「おーーーっ!!」」」」」

つといつの間にか話がまとまり再び進みだす

その後もいろいろあった

高い本棚の上を歩いていたら佐々木が落ちかけたが新体操のリボンを使い難を逃れたり

上から傾き落ちそうな本棚をクーフエイが蹴りで元の位置に戻しその本棚から雪崩落ちてきた本を長瀬が全て空中で回収したり……というかお前らソレ運動神経がいいってレベルの話じゃないからな

そして、ネギに関してだがどうにも様子がおかしい……いや、ネギというよりもアスナが妙にネギに気をかけているという感じだ

途中、休憩を入れ再び進むが、ここは本当に図書館か？

本棚に本はあるが道らしい道が本棚の上だったり湖があったり本棚を崖みたいに降りたり……ここはS A S U K E か S A S U K E の方が楽に見えるわ！あ、俺とネギ以外女だからK U N O I C H I か

今は、床と天井が本の縦一冊分しかない隙間をほふく前進で進んでいる

「あゝんもついやゝ」

佐々木は何だかんだ泣きごとを言いながらもここまで通て来てるな

「夕映けっこう燃えてるやろ」

「ふふ……わかります?」

木乃香が夕映に尋ねると夕映はVサインで返す

いや、わからねえよ!少しは表情に変化をみせろや!てか、よく気づいたな木乃香

「ここまで来れたのはバカレンジャーの皆さんの運動能力のたまものです。……佐倉さんもよくついて来れましたね」

よくついてって……っておい

「よかったのか?俺は別に一緒に来なくってもよかったのか?」

「……おめでとうです。さあ、この上に目的の本がありますよ」

「無視か、おい、無視かよ!」

俺をスルーし皆がさっさと上に上がっていく……無理矢理連れてこられてこの仕打ちって

「悲しくなんて無いやい」

なんか目から汗が出てきたけど気にせず俺も上に上がると

「…伝説の剣でもあんのか?」

そう口にしてしまうような部屋の造りだった……まあ、魔法書も似たようなモンか。FFだと専門店があったけど

他の面々のラスボスの間だのRPGで見た事あるのだの

「魔法の本の安置室です」

だから夕映、感動してんのはわかるが少しは表情を変化させんか

「こ、こんな場所が学校の地下に……」

アスナは苦笑いだ

「見てっ！！あそこに本が！！」

佐々木が指さす先には本が開いた状態で置いてある

「！！あっ…あれは！！」

「ど、どうしたのネギ！！」

ネギが上げた声にアスナがいち早く反応する

「あれは伝説の『メルキセデクの書』ですよ」

何？メルケレド・・・その何とかの書ってなんだ？つつか、この位置からよく見えんな

ネギの言葉に皆が本物だと思い本に向かって駆け出す……って

「おい、待てって」

「あんなに貴重な魔法書、絶対にワナがあるに決まってます。気を付けて！」

しかし、そんな言葉も届かずネギや木乃香も含め七人の姿が消える本が置いてある祭壇への橋が急に無くなったのだ

「っ！」

急に姿が消えた事に焦り急いで駆け出すが

「は？」

「いたたたあ」

「え？何これ？」

以外に浅かったらしい

「大丈夫か？お前ら」

「はいです」

「なんとか」

「ならいいが……英単語TWISTER？」

全員の無事を確認した後ふと目に入った言葉を読む

「？ツイスターゲームがどうかしたの」

「いや、そこにそう書いて…」

言いながら俺もそこに降りると

「フオフオフオフオ」

祭壇の左右に立っていた石像が動き出す

「この本が欲しくば、わしの質問に答えるのじゃ」

「キャー！！！」

「せ、石像が動いた……」

これがワナねえ……どう聞いてもこの声って学園長じゃん

そして、質問というか英語の問題が始まる。答えを教えると失格らしいのでネギがジェスチャーや関連性のある言葉で遠まわしに説明をする。そして…

「すごい体勢だな」

「そやね」

わかってはいたがツイスターゲームってのは互いに体が交差やらなんやらで大変だからな

「最後の問題じゃ！『DISH』の日本語訳は？」

答えは皿だが

「お！」

「さ！」

そう、ここまではよかった

「ら！」

『ら』だと思いアスナと佐々木が手足を付けたのは

「……おさる？」

「ああ、たしかに『る』を押してるな」

『る』の文字だった

「ハズレじゃな」

笑いながら石像は手に持っていたハンマーで床を叩き割った

「ひゃああああ~~~~」

「アスナのおさる~~~~！！」

そして全員が暗闇の中へと落ちていった

十三時間目「図書館島の探検」（後書き）

どうも、ICです。今回は図書館島編の前半を御贈りしました。まとめると長くなりそうなので前後半に分けたら前半がこんなに短くなりました。すみません。今回は前回のあとがきで書けなつた事も書こうと思います。佑太の邪眼に関してですがこれはGet Backersの主人公の物ですが持っているのは邪眼だけでもう一つの力の方は持っています。そもそも、これは本当は佑太は持つはずではなかった物でした。その事に関してはそのうち物語で出すと思いますのであしあらず。

次回の更新は早くて土日、遅くても来週には投稿するつもりです。

十四時間目「地底図書室と期末試験」

「キャア~~~~」

「みんなゴメン」

落ちながらアスナと共にあそこにいた8人が落ちていく

「あわわーた、助けて〜っ」

「ネギ!」

ネギも手足をバタつかせながら落ちていくがアスナがネギに近づき自分の方へと抱きしめる

「いや〜ん」

「わあ〜」

「ちっ」

俺の近くにはこのかと佐々木がいるのでこのままでは不味いと思い

「先に謝っとくわ」

「わっ!」

「ひゃ!」

二人を胸元に引き寄せ抱きしめるクーフェイと長瀬は既に空中で体勢を整え夕映は長瀬が抱えているので大丈夫だろう

そしてそのまま暗闇から抜け明るくなったのと思い当たりを確認するまもなく水に叩きつけられ意識を失った

十四時間目「地底図書室と期末試験」

「・・・・・・・・・・」

誰かの声が聞こえる

「・・・・・・・・・・」

うるさいな、もう少し寝かせろっての

「・・・・・・・・・・!!」

だぁーもう！起きればいんだろ起きれば

ゆっくりと目を空けると目の前には黒い影

「ん・・・」

それにしてもなんか今日の枕は妙に寝やすいな

「あ、起きたん？」

この声は

「この…え？」

「そうやえ、佐倉君」

そうか、目の前の影は近衛か……ってはあ？

「なんで…っ!!」

起き上がろうとすると右肩に痛みが走る

「あ、まだ大人しゅうしとかんとあかんで。右肩外れてたんやから」

「ああ」

そうだ、思い出したわ。俺達は図書館島に魔法の本を探しに来て安置室まで行ったはいいがトラップにハマリ

「落っこちたんだっけ？」

「そうやで。ごめんな佐倉君私達を庇ったせいで怪我させてもって」

「お前らは怪我なかったか？」

「うん」

「ならいいさ」

庇つときながら庇った相手に怪我させるなんて事になったら意味ねえからな

「それで、ここは図書館島のどのへんなんだ？」

「なんかな、夕映がいうには”幻の地底図書室” ゆうらしくてな、地底なのにあたたかい光に満ちた貴重な本がぎょうさんある本好きの楽園なんやて」

「楽園つて……んで、あそこで騒いでる連中は？」

少し離れた場所でネギを中心に泣いたり笑ったりしてる

「ああ、あれな。あれはネギ君が期末に向けてここで勉強するゆうてな」

「ああそれか……ん？期末までに戻れるのか？」

魔法を使えば話は別だが

「困難らしいけどネギ君は何とかなるって」

……まさか、魔法を使うとか言わないよな

「……ところで近衛よ」

「なんや？」

「なんでお前の顔が常に俺の目の前にあるんだ？？」

さつきからずっと同じ位置にこのかの顔がある

「ん？膝枕気持ちよくない？」

「いや、そういうわけじゃ…ん？膝枕？」

「ん、膝枕」

あゝ、さつきから後頭部に当たってるぶにぶにした物はこのかの太股だったのか

「……もう少し頼むわ」

「はいな」

まさか、こんなところで”かわいい女の子に膝枕して貰う”という男の夢が叶うとは思ってもみなかった。役得役得

「お、目を覚ましたでござるか佑太殿？」

「ああ」

ちっ！糸目が何しにきやがった

「外れた肩は拙者がはめ直しておいたが、少なくとも一月は腕を吊

って安静にしていた方がいいでござるよ」

「わかった。ありがとな治療してくれて」

それと糸目と言って悪かった

「礼には及ばんでござるよ。それでは拙者達は食料を探してくるでござる」

「俺も言った方がいいか？」

このかの膝枕は惜しいが

「大丈夫でござるよ。佑太殿は安静にこのか殿は佑太殿を見ていて下され」

「わかったえ」

「すまんな」

糸目……いいやつだ！

翌日

「つーわけだ」

（何が「つーわけだ」よ！あんたまた原作忘れてたわね）

「しょうがないだろ、もう十年近く前の事なんだから」

（その十年近く前の事を私は覚えているけど？）

「生意気言ってすみませんでした」

授業をやっているネギ達からトイレと言って離れ仮契約カードを使い地上のエリカさんと念話をしている

（とりあえず、全員無事なのね）

「ああ、少しの怪我と俺の肩が外れたくらいだ」

（あんたの事はどうでもいいわ。こっちではあなた達は学園長の許可を貰い兄さんが特別授業を行ってるって事になってるわ）

「まあ、ここにいる元の原因は全部あのジジイの所為だからな」

（そうね、それと非常口の場所はおぼえてるの？）

「ああ、確認もしてきた」

（そう…あ、あと、私にも最終課題が出たわ）

「どんなんだ？」

（兄さんおよびあなた達がいらない2 - Aを纏めて、期末試験のクラス平均を前回の試験よりも上げれば正式に教員にしてくれるそうよ）

「大丈夫そうか？」

（ええ。だからこっちの心配はしないであんたもしっかり勉強なさい）

「わかったよ」

エリカさんとの念話を終え続いてアキラと裕奈にも念話で状況報告をした佐々木の無事を伝えると二人は安心しどうして自分たちにも声を掛けなかったのかと文句を言われ最後にエヴァからの伝言と言う名の死刑宣告を伝えられた

強制的に連れてかれて修行を休んだからって時間無制限の魔法の回避特訓は酷いと思います。てか、反撃無しで全力の真祖の魔法を避け続けろって無理でしょ！普通にえいえんのひょうがとか避けられませんから！あんな長距離の転移魔法以外でどう避けると！一応は死なない程度に手は抜いてくれるんだが、逆に死にます。あんなのただの鷲り殺しです。

帰ってからのエヴァの御仕置きを想像して怯えていると

「キャーーーーッ！」

「何だ？」

悲鳴の聞こえた方向に向かう途中で

「ネギ先生！アスナ！近衛！」

「佑太」

「何があつたんだ？」

「わかんない私達もこのかに呼ばれて今向かってるとこ」

そして、そこには

「誰か助けて」

「ま、またあのでかいの！」

「ゴーレムですよ！アスナさん！一緒に落ちてきたんだ」

魔法の書の安置室にいたゴーレム（まあ、学園長が操ってるんだが）
がタオル一枚の佐々木を掴んでおり、同じくタオル一枚の長瀬とク
ーが対峙していた

とりあえずジジイよタイミングを考えろや

「って、佑太！あんたは後ろ向いてなさい」

「はいよ」

アスナに言われ俺一人後ろを向かされる

…しつかり網膜に焼きつけたいらしいだろう

「ぼぼ、僕の生徒をいじめたな！いくらゴーレムでも許さないぞ…

…ラス・テル マ・スキル」

ちよ、ネギ！お前何を

「くらえ！魔法の矢」

このバカたれ~~~~~

・

・

・

・

・

・

・

・

……あれ？

当たりが静寂に包まれる

「ま」

「まほーのや……？」

あ、そういやこいつ自分で自分の魔法封じてたんだっけ？

「フオフオフオ、ここから出るには迷宮を三日歩かなければ出られんぞ。もう観念するのじゃ」

「み、三日！」

「それではテストに間に合わないアル」

「み、みんなあきらめないで」

三日と聞き驚いている皆に対してネギが励ます

「僕の魔法の杖で飛んでいけば一瞬だから……ハッ！」

「こ、こら、ネギ！」

こいつ本当に魔法を隠す気あんのか？

「ま……まほーのつえ？」

「キヤー……！！何でもない何でもない」

必死でネギを庇うアスナ

「と、とにかく、私達は諦めないんだからね！明日の期末テストまでに絶対ここを抜け出してやる！とにかくみんな逃げながら出口を探すわよ！」

「帰るん？みんなの荷物取り行かな」

「俺も行くっ」

アスナの言葉に荷物を取りに戻るこのかの後に続く

「長瀬、クー、ここは任せたぞ」

「OKアル」

「ニンニン」

あの二人なら大丈夫だろう

みんなの荷物と水浴びをしていた三人服を持ちこのかと共にみんなと合流する

「ほら、服だ。それとその本持つてるんだ？」

佐々木達に服を渡し何故クーがメルなんかの書を持っているかを聞く

「ありがとう！さっきのゴーレム？の首のどこあったのを逃げるついでに取ったの」

やっぱ、バカレンジャーって身体のスペック高えな

「ま、待つんじゃない」

「あの慌てようきつとどこかに地上への近道があるです」

背後からゴーレムが追ってくる

「こっちだ！こっちの滝の裏側に非常口がある」

先頭に出てみんなを先導する

「ちょ、あんた何で非常口なんて知ってるのよ」

「昨日見つけた」

「なら早く言いなさいよー！ー！」

「いや、綾瀬がここにいたって言うてたから」

「それとこれとは話が別です」

いや、そんなにすねなくても

「ここだ」

話している間に非常口の前に着く

「ホントにこんなところにあっただ」

「あれ？扉になんか書いてある」 問い１ readの過去分詞の発

音は？”これって問題？”

「ええ……つなになにそれ」

「そんなこといきなり言われても」

問題がわからずアスナ達が戸惑っているとは後ろで追いかけてきたゴーレムに蹴り飛ばしていたクーが

「ムム…これワタシコレわかるアルよ！答えは”red”アルね！」

正解の音と共に扉が開く

「ひ、開いた」

「早く中へ」

中へ入ると今度は天へと延びるかのように上へと向かう螺旋階段あった。天辺は暗くてよく見えない

「コレ、上まで登るん？」

「しかないだろうな。行くぞ」

階段を上っていくと壁を破ってゴーレムが追いかけてくる

「しつこいなーまだ追ってくるアルよ！」

「ならぬ、本を返すのじゃ」

ゴーレムの言葉に佐々木とクーがあかんべーとする

「わっ！また石の壁に問題が！」

その問題を今度は長瀬が答え扉が開く。その後もたびたび扉に書かれた問題が道を塞ぐが迷うことなく答えていく

「あう！」

「夕映ちゃん！」

しかし途中、夕映が木の根につまずき転んでしまう

「こ、こんなところに木の根が……足をくじきました」

「ええ……大丈夫？」

「先に行ってください、この本があれば最下位脱出が……」

「だ、駄目ですよ夕映さん」

夕映が本をネギに差し出し先に行くように言うがネギは本を受け取らずアタフタしてる

ひよい

「わぁ！」

「ほら、ささつといくぞ！後ろからゴーレムが来てんだから」

夕映を左肩に担ぎ走り出す

「お、おぶるならしつかりとおぶるです！」

「あ、右腕が動かねんだこれで我慢しろ」

「で、でも……は、恥ずかしいです」

「気にするんな。おら、お前らも呆けてないで行くぞ」

そのまま再び階段を上っていく

そのまましばらく登って行くと

「あ、携帯の電波が入りました地上が近いようです」

携帯を握っていた夕映が圏外が消えた事を知らせてくれると

「ああ、みなさん見てください！」

ネギが指さす先には

「地上への直通エレベーターです！みんな、急いで乗ってください
！」

全員で掛け込むが

ブブブブブブブブ！

重量オーバーの表示が点灯しブザーが鳴る

そこで全員が騒ぎ出すがアスナが片足を出すだけでブザーが鳴りやむ事に気づき

「みんな、持っている物とか服を脱いで！」

言葉にそれぞれが服を脱ぎだししまいにはほぼ全裸の状態になるが

ブ
ブ
ー
ー
ー
ッ
！

音は鳴りやまなかった

「やっぱり駄目アル」

「もう捨てる物ないよ、後少しなのに」

……さて、眼福もした事だしさっさと地上に戻るか……おっと鼻血が

「これ、捨てりゃいいじゃん」

エレベーター内にある本をつかむ

「え？」

「ちよ！」

「それは！」

「よつと！」

「「「「「あ~~~~~!!!!!!」」」」」

その本メデ…なんだっけ？の書を外に投げると

「フオフオフオ・ぼお！」

偶然登つて来たゴーレムに当たり本と共にゴーレムは地下へと落ちていくのを見ながらエレベーターの扉は閉まった

「あんた！何やってるのよ！」

「せつかくの魔法の本が」

「あ？んなモンなくても何とかかなんだろ。それにしっかり勉強したんだろ」

「それは…」

「そうだけど…」

「なら、魔法の本なんかに頼んなくても大丈夫だろ。第一テストつてのは持ち込みできねえのに本がなきゃ解けないって時点でダメだろっ」

「「「あゝ！」「」」

気づいてなかったのかよ

「まだ、時間はあるんだ、何とかなるさ」

全員の表情が柔らくなる

「ま、とりあえずは」

エレベーターの１Ｆの表示が光り扉が開く

「外に出れた――！！」

「「「いえ――い！！」」」

「とりあえず、まずは誰かに連絡して服持ってきてもらえ」

「「.....キャ――！！！！」」

アスナにおもいっくそ殴られました

その後の事を話そう。徹夜で勉強し一時間だけ寝るつもりが寝過してしまい遅刻で別室で受ける事になった。途中、寝不足の俺達にネ

ギが魔法を使い眠気を飛ばしてくれた……終わったから寝ようと思
っていたのに

そして数日後、クラス成績発表日、原作通り最初の発表で最下位だ
ったためネギが故郷に帰ろうと駅に向かったのをアスナが追いか
け止める。その後に俺を含めた遅刻組がネギの元に集まる

学園長をもう一度説得しようと話していると学園長が登場。遅刻組
の点数をクラス全体に合計し忘れたと言いその場で全員の平均点を
発表した

このか、宮崎、ハルナの三人は何時も通り好成绩、そしてバカレン
ジャーも大幅に平均点を上げていた。そして…

「最後に佐倉佑太なんじゃが……お主、普通に試験を受けたんじゃ
よな？」

「ああ、そうだが？」

「え、そ、そんなに悪いんですか？」

その場にいた全員の顔に不安が浮かぶ

「い、いや逆じゃよ…おほん、では改めて佐倉佑太。平均点は…9
4点じゃ」

「「「……………はあ！！」「」」

「な、なんで！佑太？！」

「いや、俺が苦手なのって英語だけだし」

「納得いかないわよ!!」

なんでこんなに攻められなきゃいけないんだよ

「ま、まあこれを2 - Aに合計すると2 - Fを上回り2 - Aがトップじゃ!」

「「「や……やったーーーー!!」」」

こうして2 - Aはクラス最下位から脱出し平均点も前回の試験よりも上回ったためネギとエリカさんは
4月から正式に教師となった

十四時間目「地底図書室と期末試験」(後書き)

十四話目です。図書館島編が終わりました。この後春休みを挟んでエヴァ編へと突入です。次回の更新は決まっています。来週までには一本書き上げるつもりです。それでは

十五時間目「とある春休みの日々 その一」(前書き)

遅くなりましたが十五話が書きあげりましたので投稿します

十五時間目「とある春休みの日々 その一」

色々あったが無事に期末試験を終え終業式も済み春休みを迎えた

「・・・・・・・・ふむ」

「ど、どうかな？」

「?・・・ああ、普通にうまいぞ」

「そ、そう・・・・・・・・よかった」

俺達は今、女子寮管理人室・・・・・・・・つまり、俺の部屋?でアキラと二人朝食を食べていた

「しかし、別に何もできねえって訳じゃねえから、毎日来なくつても……」

「うつん、私達が好きでやってる事だから・・・・・・・・迷惑……かな？」

「んにゃ、助かってるよ。ありがとな」

「うつん」

期末試験の翌日、エヴァと茶々丸そしてアキラと裕奈が俺の様子を見に来た

エヴァは

「ふん、油断しているからそんな怪我をするんだ」

と、少しイライラしており、肩の治療を頼むが

「は？なぜ私がそこまで貴様の面倒を見なければいけないのだ？」

と呆れた目で見られた

茶々丸は

「こちらが塗り薬です」

茶々丸からは魔法薬の塗り薬の差し入れた。なんでかんだで心配してくれたようだ

アキラは

「それで、怪我の様子はどうなの？」

純粹に心配してくれ

裕奈は

「なんで私も連れてくれなかったのよ」

図書館島に一緒に行けなかった事にブーたれてた

俺だって無理矢理連れてかれたんだよ

その後、エヴァと茶々丸はすぐに帰った。一応怪我が治るまで修行

は無しだそうだ。そして裕奈とアキラと三人で飯を食べる事になったんだが

「何これ――――！！！」

やべっ

「佑太、普段朝何食べてんの？」

ん？そりゃ

「コンビニ弁当かレトルト食品」

「却下――――！！！！！」

十五時間目「とある春休みの一日 その一」

「そっぴや裕奈は？」

「休みだからまだ寝てるよ」

「そっかい」

それからという物、毎日アキラと裕奈の二人が飯を作りに来るようになった

「今日はどうするの？」

「とくに用事は……アキラは？」

「部活も無いし修行の方もエヴァちゃんが用事があるから今日無しだって」

二人で今日どうするかと話していると・・・

バンッ！！

「デートしよう！！アキラ！佑太！」

「「は？」」

突然、裕奈が部屋に入って来た

「つまり、裕奈も部活が無いし暇だから出かけよう」と

「そう！」

裕奈はけっこう育った胸を張り言うが

「嫌だ」

俺はきつぱりと断る

「ええええ〜〜〜なんで〜〜〜!」

「こんな腕の状態で、出かけようとは思わん。それにせつかくの休みなんだしゆつくり休めや」

「嫌だよ さ、アキラ部屋に戻って準備してこよ」

裕奈はアキラの手を引っ張りドアへと向かっていく

「佑太も準備して30分後寮の前に集合だから、じゃ」

そのまま二人は部屋を後にした……。だから、俺は行くとは
言っていないんだが

30分後

「さあ！行くわよ」

「あははは……」

⌈
•
•
•
•
•
•
•
⌋

で、結局俺はここにいる。さすがに行かないと迎えに来そうだしな

はあ、せつかくの休みが……

アキラ side

「着いた、渋谷」

私達三人は裕奈の提案で渋谷へと来ました

「何処に行くの？」

「ん、とりあえず服とかいろいろ見ようよ」

裕奈の提案に私は賛成だが……

「佑太君もそれでいい？」

今日は二人じゃないんだから佑太君にも聞こうと思った

「ん？……あ、その前に行きたいところがあるんだがいいか？」

「ん？どこ？」

「ケータイを買いたいんだ。この前の図書館島で水没したから」

「あ、そういえばそんなこと言ってたね」

その時に夕映に勝ち誇った顔をされたって言うてたしね

夕映曰く

『図書館島探検部として防水ケータイなんて初歩の初歩です。何が起こるかわからないのに普通のケータイを持つてくるなんてバカです』

と言つてた。実際にあの時にケータイを持って来ていた人は佑太君を覗けばみんな防水だったらしい

「それじゃ、まずはケータイショップにGO!!」

そしてケータイショップ

「見て見てアキラ！これかわいくない？」

「うん、色もきれいだね。新しい機種？」

「そつみたい！あゝ私も機種変しようかな」

「ふふ。佑太君はどういうのがいいの？」

「俺は、できるだけシンプルなのでいい。余計な機能とか覚えのがめんどいし」

そう言つと佑太君の視線は『超シンプルケータイ』と大きく書かれているコーナーを見ているが

「いや、佑太君」

「それはちょっと待って!!」

そのこのコーナーの上には『お年寄りケータイ　らくらくホン』と書かれていた

「覚えやすそうだからコレで」

「ダメーーーー!!」

なんとか説得して再びケータイを選ぶ

「そうだ、いつそ私達と同じ機種とかどう？」

「そうだね、それなら教える事もできるし」

そうなればい、一緒にいられる時間が…その…ふ、増えるし

「それはいいが…お前ら二人とも機種別々じゃ？」

「………あ」

そ、そうだった私と裕奈は機種が違ったんだ

「ま、まあそれでもどっちかと同じの方が結局は教えやすいから…」

「それもそうだが……一応それも考えに入れとくわ」

そう言い再びケータイを選び始める佑太君

結局、佑太君は私とも裕奈とも違う機種を買いました

ちよつと残念かな

side out

ケータイを購入し時間が少しかかるようなのでケータイショップを後にし三人で再び街に繰り出す

「じゃあ今度は服見に行こうよ」

「いいかな？」

「ああ。俺の用事は終わったから今度は二人に付き合っよ」

この言葉を俺はこの後少し後悔した

三時間後

「こっちもいいと思わない？」

「うん、裕奈によく似合っと思っよ……こっちはぶっっ」

「いいじゃー！アキラ似合ってるー！」

二人は互いに選んだ服を評価し合い、俺はそれを遠目から見ていたが

「…………女の買い物がここまで長いとは」

店に入ってから約三時間。二人は未だに服を選んでいる

そんな二人をボーッと見ていると

「あれ？佐倉君？」

「んあ？」

横から掛けられた声にそちらを見ると

「村田？」

俺が村田？の名を呼ぶと村田？はガクツとうなだれる

「村田って誰よ…私は村上。村上夏美だよ！」

「おお、そうか悪かったな村上。で、何やってんだ？」

「私達は服を買いにちよつとね。佐倉君は？」

「俺はアレの付添だ」

未だに服を見ている二人を指さす

「アレ？……裕奈とアキラ？佐倉君で二人と仲良かったんだ」

「まあ、ほどほどにな。村上は一人か？」

「うっん、私は・・・だゝれだ」

村上との会話の途中に急に視界が真っ暗になり後ろから声が聞こえた

「・・・・誰だ？」

なんとなく予想はつくが・・・おお、背中が天国だゝゝ

「ふふ、ヒントはあなたの知り合いです」

「いや、普通見ず知らずの人にはこんなことはしないと思うが？あと、チチが当たってんだが」

「それもそうね。そ・れ・と・それは当ててるのよ」

とつとと離れる

「もう少しこのままで」

「思考と実際の言葉が逆転してるわよ」

何と！俺とした事が

「お望み通りもう少しこのままで・・・」

「ち、ちづ姉えゝ何時までやってるのゝ」

「あらあら、夏美ったらバラしちゃ面白くないじゃない」

村上の言葉で背後にひっ付きながら俺に目隠しをしているのが那波千鶴と判明した

「とりあえずこの目隠しはハズしてくれないか？何もみないんで」

何時までも視界が真っ暗じゃ……危ない妄想しちやいそう！

「いいけど、目隠しだけでいいの？」

「できれば背中感触はもう少し……」

これは止みつきだ

「そう、それじゃごたゝいめゝん」

「は？」

千鶴の目隠しが止め目に入ったのは日の光と……

「ニコニコ（怒）」

笑顔が素敵な二人の般若でした

「佑太君？（怒）」

「何をしてるのかにやゝ（怒）」

「あゝと」

この状況どうすんべ

などと考えていると

「えい」

「おおっ」

背中 of 柔らかな感触がさらに・・・って

「那波さん何をなさいますですか？」

振り向き千鶴に文句を言うが

「だって佑太君が目隠しハズして抱きついて来てって」

「言ってねえーし！目隠しハズして背中 of 感触はそのままですって
言っただけで！・・・あ」

「クスクスクス」

アキラと裕奈の目元が前髪で暗くなってるのに眼だけあやしく光っている・・・普通に怖いんですけど

「スコシ O H A N A S I ショウカ」

わっい・・・死んだ？

夏美 side

「村上達はもう帰るの？」

「ええ、寮であやかが待つてるから」

本当はいいんちよも一緒に来ればよかったけどいつもの病気……
じゃなかった悪い癖が

「あやか？」

「いんちよの事だよ」

「ああ、あのシヨタか」

佐倉君って本当に人の名前覚ええないんだね

「そう、そのシヨタ委員長が寮にいるから帰らなきゃいけないのよ。
いつものびょ……じゃなくって
悪い癖が出てなきゃいいけど」

ちづ姉は片手を頬に当てながらため息をついている。というかちづ
姉キツイって

「そう、それじゃあたし達はもう少しお店回ってから帰るから」

「え？まだ回るの？」

「またね那波さん、村上」

「おう！またなアキラ！裕奈！」

いつの間にか私の横で二人に向かい手を振ってる佐倉君

「佑太はこちだにゃ」

そう言われ佐倉君は裕奈に襟を掴まれ引きずられていく……なんかドナドナが聞こえるよ

三人に向かい手を振り寮へと帰ろうとするが

「ちづ姉？」

「ん？どうしたの？夏美？」

一瞬、佐倉君達を見送るちづ姉の顔が寂しそうだった？

「大丈夫？」

「？どうしたの、夏美いきなり？」

「いや、なんかちづ姉が少し寂しそうだったから」

「そんなことないわよ。さあ帰りましょうか」

そう言つとちづ姉は駅の方へと歩き出してしまつ

やっぱり少し変だ……そう言えば今日のちづ姉は少しいつもと違つたような

少し子供っぽかったというか何というか……

甘えてた？

誰に？

でも朝は普通だった、ここに着いた時も

何時から？

買い物しててアキラ達を見つけた時から？

……あれ？

「ちづ姉……もしかして佐倉君のこと……」

side out

??? side

はじめまして私は麻帆良学園中等部2 - A 出席番号7番 柿崎美砂です

私は今クラスメイトの釘宮円と椎名桜子の三人で渋谷に遊びに来ています

春休み中なので思いっきり遊ぶぞ〜！

と、考えていたんですが・・・

「ねえい〜じゃ、俺達と遊ぼうぜ」

ナンパ男五人に引っかかっています

「いえ、いいです」

「そんなこと言わないでさあ〜」

も〜こうなったら

「しつこいな〜彼氏がいるんで間に合ってます!」

「でも、今日は一緒じゃないんでしょう？ だったら今日は彼氏の事なんか忘れてさ、俺達と楽しもうぜ〜」

ホントにしつこいな円と桜子も嫌がってる、自慢じゃないが、私は何度か似たような経験があるため少しは対処の仕方がわかるけど二人は慣れてないらしい早く何とかしないとこの手の男は

「いいから来いよ」

「きゃ!」

腕を掴まれて引っ張られる

遅かった、ヤバいこのままじゃ・・・誰か！

「さすがに無理矢理はちと不味いと思うぞ」

私のそんな祈りは届いた様だ

「な、なんだデメエ」

「ん？俺か？」

私の腕を掴んでいる手をさらに掴む手、そして聞こえた声はここ最近
は聞いてなかったけどウチのクラスで一人だけいる男の子

「こいつのクラスメイトです」

「さ、佐倉？」

なんで？

「とりあえずこいつが痛がってるから離してやってくれねえか？」

「いででで！クツ！」

急に痛がったと思ったらナンパ男が私の腕から手を離す。そして離
れた腕を見ると佐倉が掴んでた場所が少し痣になっている・・・
どれだけの力で掴まれたんだろう

「このガキ！どうやら痛い目にあいてえらしいな・・・おい！」

どうやらこの人がリーダー格だったらしいこの男の声でさっきまで

円と桜子にちよかい出してた人たちも集まってきた

「覚悟はいいな！いく「ちょい待ち！」あ？」

殴りかかろうとする男達を一声で止める。中途半端で止められた所
為か五人全員が佐倉を睨みつける

「なんだ、今更いのも「いや、俺はあの人たちがあんたらに用がある
と言われて呼んで聞くれと頼まれただけだ」何だと」

佐倉の指差す先には・・・

「げ！」

「うつ！」

「うわあゝ！」

金や黒の長い髪に赤いルージュひらひらしたスカートなどの服を着
たおっさんがいた

あれって・・・何なんだろう？

「こんなガキの相手なんかしてないであの人たちのところに行った方
がいいんじゃないか？」

いや、佐倉さすがにそれは無理があるって・・・しかし

「そ、そうだな／＼／」

「おい！早く行こうぜ見失っちまう」

「ああ、小僧、殴ろうとしたりして悪かったな」

「行くぞ！」

そう言ってナンパ男達はその人たちの元に向かって行ってしまった

「ぐゅっくりっ」

佐倉はハンカチを片手に男達を見送った

「ありがとう！佐倉君」

「助かったよ」

桜子と円の二人はナンパ男たちが去った事で安心したのか窮地を救ってくれた佐倉にお礼を言っている

「……あれ？この状況よく考えたら私達はその人たちに負けたって事？」

「もう生きていけないorz」

「ん？どうしたの美砂？」

「きつと安心して腰が抜けたんだろ」

「違うわ！」

この男は！あんな事で腰なんか抜けないわよ！

「おら、のんびりしてないで、ささっとここから離れるぞ」

そう言つて佐倉君はさつさと歩いて行つてしまい、私達はその後を追いかけた

少しすると遠くから男の叫び声のような物が聞こえたような気がした

「いい悪夢^{ユメ}見れたかよ」

「？なんか言つた？」

「いや、何も」

その後、佐倉君と一緒に来ていたらしいアキラとゆうーなと合流しそのまま行動を共にした

だけど、あの時の佐倉の言葉が私の中で引つかかる

『こんなガキの相手なんてしてないで』

あの後、佐倉にさっきの事を聞いてみたら

「ん？あれかそのまんまの意味だが？チチもねえガキを相手にするわけねえだろ」

私達がガキなんて・・・あんたも同じ年でしょうが

それに胸だつて・・・私は一般的にはフツ　よ！

まあ、その後ゆーなとアキラの二人に打たれていたけど・・・二人
ってあんなキャラだっけ？

とにかく！私をガキなんて・・・絶対に私の魅力をわからせてやる
んだから！

彼氏持ちをなめるなよ！

s i d e o u t

十五時間目「とある春休みの日々 その一」（後書き）

やってしまった・・・またフラグを立ててしまった。普通に回収できなくなりそうです。そして、お知らせです7月8月はリアルが多忙なため更新は不定期になります。空いた時間にコツコツと書くつもりですが、周一とか無理そうです。私めの未熟な小説を楽しみにしてください方には申し訳ないと思います。

十六時間目「とある春休みの日々 その二」(前書き)

だいぶ空きましたがようやくかけたので投稿します。
今回はちょっとやりすぎた感が・・・

十六時間目「とある春休みの日々 その二」

「・・・・・・・・眠い」

「どれだけ寝れば気が済むのかしらあなたは」

春の暖かな日差しの中、学園都市の展望台に二つの影がある

「だって、こんなにいい天気の日じゃ昼寝をしたいと思うのが普通だと思うのだが？」

「それは一部の怠け者と呼ばれる人たちだけよ。・・・・・・・・変わらないのねあなたは、転生してもしなくても」

まあ、言わずもながら俺とエリカさんなんだけど

「人間、そうそう変わりはしないさ」

「普通は前世の記憶があつたら少しは違う生き方をしてみたいとか思わない？」

「・・・・・・・・十分にしているとと思うけど？」

生まれた家系が魔法使いだったり、魔法が使えず落ちこぼれと言われたり、師匠に無理矢理に修行の旅に連れてかれたり、男なのに女子中に転校させられたり、エヴァに殺されかけたり、エヴァにしごかれたり、別荘を借りる代わりに血を吸われたり・・・・・・・・今のところの半分近くはエヴァがらみだな

「・・・そうね。でも、あんたのその怠け癖は変わっていてほしかったわ」

そんなに呆れるように言わんでも

「こつやって気を抜いてないとやっていけないって・・・ふあゝゝ」

あゝマジで睡魔が・・・

「ゆ、ゆゆゆゆユウタ？」

「あ？どうしたそんなにどもって？」

「よよよ良ければ、ひ、ひじゃくらいなら、かかしゅわよ」

「？ひじゃ？」

「つ~~~~~~~~////」

噛んだのか

あゝあ、首まで真っ赤にしちゃって

「いいからこつちに来なさい！肩腕だと寝ずらいでしょ！」

「うお」

無理矢理頭を掴まれ膝の上に置かれる

「　　」

エリカさんは妙に嬉しそうだが、俺は周りの目がすごく気になって
います展望台って意外と人いるし、そこで十歳の女の子の膝枕って・
・

意外とアリ？

・・・・・いや、俺はロリじゃない！ロリじゃない！・・はず

しばらくその状態でいると睡魔が・・

「あれ？佐倉君にエリカちゃん？」

「何やってんのこんなところで」

「@+*#','%&,%&!」

「あで?!」

急に立ち上がったエリカさんの膝から落ち地面に頭をぶつける

・・・痛いし目え覚めちゃったよ

十六時間目「とある春休みの日々　その二」

「つつつ、アスナに近衛か？」

後頭部を抑えつつ起き上がり声を掛けてきた二人を見る

「で、何してんのよこんなところで」

「ん？エリカ先生とデート」

「「「な！／＼／／／」」」

アスナと近衛はわかるがエリカさんまで驚かんでも

「・・・・・・・・「冗談だ」

「・・・・・・・・」

エリカさんにグーで頭をグリグリされた・・・・・・・・痛い

「二人で学園を見て回ってたんですよ。ここに来てあまり経っていませんからね」

「そんなら、ウチらが案内しよか？」

そりゃ嬉しいが・・

「眠いからパ」それではお願いして貰ってもいいですか？近衛さん、

神楽坂さん「いや、俺は「それでは行きましょうか、佐倉くん」だから！」

俺の声を無視しエリカさんは俺だけに見えるように

「ね！」

素敵な黒い笑顔でこちらを見る

一緒に行かないという選択肢は俺には無いらしい

「わかったよ」

俺も重い腰を上げるが

「ああ、ちょっと待ってもう一人来るから」

「？もう一人って」ピンポンパンポーーン、迷子のご案内です。中等部英語科のネギ・スプリングフィールド君。保護者の方が展望台近くでお待ちです」ネギか」

放送で呼び出すのかよ

しばらくすると半泣きのネギが来た

「アスナさん酷いです！ってエリカに佐倉さん？」

「よう！」

「こんにちは兄さん」

「どうして二人ともここに？」

「ここにいたらアスナ達が来て学園を案内してくれるっつつからネギを待ってた」

「そうなんですか！」

「そうや、さすがに一日じゃ学園内全部は案内しきれんえ」

どこまで広いんだ学園都市！

「三人ともここから見みなよ」

「うーん、風がとっても気持ちいいわあ」

アスナに呼ばれた方に行くと

「うわあ〜」

「スゴイ・・・」

そこからは麻帆良学園都市が一望できた

ここまで広いか学園都市！

いや、広すぎだろうコレ

少しそこからの眺めを楽しんでいる（主にネギとエリカさんと）と近衛とアスナが学園長に呼ばれたのでどうなるかと思ったがたまた

まそこを通りかかった鳴滝姉妹が変わり案内してくれる事になった

「いいですよ。学園の案内ですね」

「それならボクら散歩部にお任せあれ！」

「散歩部？どんな活動をつてお散歩をするクラブに決まってますよね」

あゝいいなそれほのぼのしてて・・・入ろっかな散歩部

後ろで鳴滝姉がネギにハードスポーツだのプロのスポーツ選手だの毎年死傷者が出るなど言ってるが嘘だろ、それ

最初に向かったのは中等部専用の体育館

ここでは21あるクラブが青春の汗を流しているらしい

「何やってんのあんた？」

「ナレーションだ」

「その説明はさっきボクがしたよ！」

「やつほゝゝネギ君！エリカちゃん！佑太！」

「あ、ゆーなさん」

「こんにちは」

「よー」

話していると部活中の裕奈がやって来た

「どうしたの？」

「いや、風史が学園案内してくれるって言っから」

「まとめるなあですー！」

二人纏められるのが嫌なのか後ろで騒いでる

「むっ後で覚えてろよ」

「はいはい」

とりあえず体育系の部活はドッチボールやバレーそして、新体操のような女つぽいのが強く、バスケット部は弱いらしい

チラリと裕奈を見る

「？」

「バスケット部は弱いらしい」

「ほっとけー！ー！！」

「なるほど、スポーツをがんばっている女子生徒というのはいいですね」

そりゃそつだがネギよその言い方は

「兄さん・・・」

「何か先生、発言がオヤジっぽい」

エリカさんは呆れ風香と史加は顔を赤らめ含み笑いをしている

「じゃあ、ネギ先生のご期待の更衣室探検：いつとく？」

風香更衣室のドアを少し空けるとそこからまき絵が顔を出す

「な、なんでそーなるんですかー！」

ネギは顔を真っ赤にしながら叫ぶが、

「ネギ先生！何事も経験は必要だ！だからここは更衣室探検を」「佑太？」「・・・しないで次のところに行こうか」

エリカさんと裕奈の殺意の籠った視線に耐えられず先を急がせる・・・
・・・ちくしょう！

次にやって来たのは室内プール

ここでは水泳部が活動していた

そこにはもちろんアキラもいる

「アキラ」

「こ、こんにちは」

「ちゝす」

「ネギ先生、エリカ先生、佑太」

俺達の訪問により部活は一時中断しネギの周りに集まり雑談している

ネギは赤くなり目のやり場に困っていた

俺はそれを少し遠目に見ている

いやゝ、女子生徒の水着姿はいいなあゝ・・・・・・・・けど

「あのエリカさん？」

「何ですか？」

「なぜ、俺の背中に杖を突きつけているんですか？」

「そんなの決まってるじゃないですか 変質者から生徒を守ってるんです」

俺は変質者扱いですか

つつか、水泳部の人たちも何人か恥ずかしそうにこっちをチラチラ見ている

彼女たちにも変質者だと思われるんだろうか・・・・・・・・凹むぜ

時折、カッコイイなどと聞こえる

モテモテだなネギ先生！

次は、屋外の体育クラブのコートへと向かった

そこではチア部が練習しており、クラスメイトの椎名、釘宮、柿崎がいた

「あ、ネギ君。何しに来たのー見学？」

「……………のぞき？」

「いいよー、のぞいてきなー」

ついにはネギは黙ってしまい鳴滝姉妹はまたもや含み笑いをしている

やっぱりまだまだガキだな

「さーくら！どう？似合ってるでしょ」

ネギを眺めていたら柿崎が声を掛けてきた

「？普通に似合ってると思うがそれがどうかしたか？」

「……………そ、そう／＼／」

それだけ言つと柿崎は一目散でその場から離れてしまった
遠くで普通にとか鈍感とか言ってる

・・・俺、なんか変な事言ったかな？

結局、今日一日で部活を紹介しきれないという事なのでお茶をする事にした

鳴滝姉妹とエリカさんは幸せそうな顔でデザートを食べている

それを見ながらネギはクラス名簿に書き込みをしている

これを見る限りまだまだ色気より食気だな

ちなみに、最年長という事で俺が全て抱いました・・・なんで？

そして最後はこの学園の象徴ともいえる世界樹へとやって来た

みんなで登ろうと言っているが

「片手でどう登れというんだ？」

「え？かえで姉はピョーンて飛ぶけど？」

「佑太できないの？」

「いや、普通できないかな」

一応、できる事は出来るけど

あいつ、忍びつての隠す気ないだろ

「いいから、四人で登ってきな」

「わかったです」

「いこ、ネギ先生！」

「は、はい」

そうして三人はスルスルと登って行く・・・三人？

「エリカさんは行かないの？」

横には俺と一緒に三人を見つめるエリカさんがいる

「誰かさんが一人じゃ寂しいと思って」

「そっか・・・」

少し見づらいがここからでも夕焼けは綺麗に見える

「あなたはこれからどうするの？」

これからというのは原作に関してだろう

正直、戦うのは嫌いだ痛いし・・・だから俺は

「俺は、基本原作には関わる気はないよ。基本は静観してるよ」

正直言うと最近ほとんど言っていないほど原作が思いだせないのだ

「そう言うエリカさんは？」

逆に聞き返す。俺は仮とはいえ彼女の従者だ。エリカさんの行動次第で俺の動き方も変わってくるだろう

だけどエリカさんの答えは

「私は……まだわからないわ」

何かを思っているのかはわからないが俺が見た彼女の顔はは涙を堪えてるように見えた

だから……

「ゆっくりでいいと思うよ」

「え？」

自分の道を、後悔のない道を選ぶのは

「時間はあるんだゆっくり考えていけばいいと思うよ」

「佑太………ありがとう」

沈む夕日の中でエリカさん唇が頬に触れたのだった

十六時間目「とある春休みの日々 その二」（後書き）

今回はエリカさん中心のお話でした。そして、タヤさんからの情報でエリカ・スプリングフィールドという名前が別の小説であるようですが、名前を変えずこのままで行こうと思います。タヤさん情報ありがとうございます。さて、今後ですが後二つほど話を挟んだ後、新学期に進もうと思っています

十七時間目「それぞれの春休み」（前書き）

十七話目投稿します。

今回佑太の出番はありません。キャラがかなり壊れています。ご了承ください。

十七時間目「それぞれの春休み」

「明石裕奈の一日」

「ここまでにしましょう」

「うん、ありがとう茶々丸さん」

「ありがとうございます」

三学期も無事終わり春休みに入った

去年までなら部活ばかりだったけど今年は違う

部活の他にアキラと一緒に修行をやっている

事の始まりは一月前の夜だった。私達は、漫画やテレビで見るような魔法使いや魔物の類と遭遇してしまい、今までの日常の裏の世界をかいま見てしまった

そこを彼に助けられ、その世界の事を詳しく聞き選択を迫られた

この事を忘れて日常に戻るか、覚えているかだ

そして私達はある決意のもと、忘れずにこの世界に関わる事を決めた
ぶっちゃけホレちゃったんだけどね

ピンチの時に颯爽と表れて助けてくれる

そんな、お伽話みたいな状況じゃホレちゃってもむりないでしょ

それはアキラも同じようだ

それに、私はまったく無関係って訳じゃないみたいだけどね

後でお父さんを問い詰めなくっちゃ

お父さんも好きだけど、なんか今まで感じてた好きと変わってきてきやたんだよね〜

今でも父親として、家族としては大好きだ！

でも、彼に対しての好きは違う気がする

こりゃ、本格的に惚れたなあ〜

その彼は変に鈍いけど・・・うん、頑張ろう！

「調子の方はどうだ」

「あ、エヴァちゃん」

「誰がエヴァちゃんだ!!」

彼女がこの別荘の持ち主のエヴァちゃん

なんか昔は悪い魔法使いつてことで有名だったみたいだけど、そんなイメージは全然ないんだよね〜

「マスターお怪我が・・・」

茶々丸さんの言う通りエヴァちゃんの手には血が少し滲んでいた

「ああ、たいしたことは無い、あいつに一発貰っただけだ。じき治る」

「そうですか」

「ん？それで佑太は？」

「ああ、奴ならあそこだ」

エヴァちゃんの指差す先には大きな氷の塊がつて

「ゆ、ゆうたーーーーー!!」

なんとその氷の中にはあの時私達を守ってくれた思い人の姿が

いつもはあんな感じだけど、いざって時は頼りになるからそのギャップにキュンときちやうんだよにや」

「大河内アキラの部活」

今日は部活の日

「大河内さん最近調子いいわね、タイムが少しずつだけど前より縮んでるわ」

「あ、ありがとうございます」

コーチに褒められたが少し複雑だ

「すごいじゃんアキラ」

「なんかいい事でもあったの？」

「ん、どうだろう」

「あはは、なにそれ」

部活の友達も口々にいろいろというが私自身少し罪悪感が・・・

実際、最近の私は部活で手を抜きながらやっている

理由は簡単、本気を出すと軽く世界記録とか出しちゃうから

「普通の日常には戻れないぞ」

あの時の言葉が最近になって身にしみるようになってきた

エヴァちゃんの別荘での修行とアーティファクトの特性のおかげか、私には水の流れや重さに敏感になっている

水を操る力が私のアーティファクトの特性。そして、体術の修

行もそれに合わせて流れに合わせるような感じでやっている

裕奈も裕奈で最近部活では動きを制限しているらしい

でもこのままじゃ、私達はいずれ部活をやめる事になるかもしれない

エヴァちゃんが私達に求めているのそういうレベルだ

エヴァちゃん相手に自分の身を守るレベルとなるとそれくらいだ
そうだ

それを聞き、ほんの少しだけ後悔した私は泳ぐのが好きだから

だけど、それ以上にそれほどの人たちに狙われるだろう佑太君が心配だった

彼の事が好きだから

ほっとけないから

それにこちらの世界に残り、彼と仮契約を交わした時に決めたから

彼を支えると

今はまだ無理だと思うけどいつかは彼の隣に立って彼を守るようになりたいから・・・いや、なるんだから

「大河内もう一本行こうか！」

「はい！」

だから今は頑張ろう、強くなるために

楽しもう、この日常を

　　＼ 那波千鶴の想い ＼

最近の私は少し変だ

自覚もあるし原因も解っている

原因はあの日の出来事だ

彼、佐倉佑太君が転校してきた翌日の出来事

突然天文部の部室に来た彼に、何を考えたのか私は迫り、押し倒し、
そして……

「 / / …… 」

そつと唇に手を当てる

「 キス …… しちゃったんだ …… 」

「 ? なにしたのちづ姉? 」

「!!!!」

いきなり後ろから聞こえた声に驚いてしまう

「どうしたのちづ姉？なんか変だよ」

「なんでもないわよ夏美」

いつものように頬笑みながら夏美に答える

今日は夏美と二人麻帆良外に買い物に来ている

あやかも誘ったんだけど

「今日はネギ先生と〜〜」

いつものごとくあやかの病気がはじまったので置いてきた

夏美と二人色々を見て回っていると

「あれ？あれって佐倉君？」

夏美の指差す先にはベンチに一人腰かけボ〜っとしている彼がいた

「……そうだ

「夏美、あなた佑太に声を掛けてきなさい」

「ええ！なんで〜」

「いいから行きなさい。私もすぐに行くから」

そして夏美を彼の元に行かせ私は彼の背後に回り目隠しをする

この時自分の胸を押しつけるのも忘れない

結果は思った通り。大河内さんとゆーながヤキモチを焼くというおまけ付き

そして少し話した後彼らとは別れた

待ちの中に消えていく彼女達を見ていいなと思ってしまう

もし、彼の横にいるのが私だったらな・・・とさえ考えてしまう

「ちづ姉？」

夏美の声で意識を戻し二人で帰り道に行く

今日、彼と話してみてわかった

彼は、私があの子のことを忘れていると思っている

最近、彼をよく見ているせいだろうか彼の人となりが少しはわかってきた

普段はどこか抜けていてボーっとしていてマイペース

だけど、一度だけ見たことのある彼の真剣な表情

決意の籠った瞳

頼りたくなるような背中

その一つ一つにドキドキしたのを覚えている

その時初めて自分の気持ちに気づいた

彼が好きなのだと

一度気づいてしまったら、もう止まらない

彼のそばにいたい

彼に甘えたい

彼に甘えられない

なんだかこれでは自分が恋する乙女のようにだ

恋をしているのは自覚しているけど

「私、こんなキャラじゃ無いはずなんだけどな」

私をこんなにしたんだから

「責任を取って貰わなくっちゃ」

柿崎美砂の心情

「私って魅力ないのかな」

「どうしたの美砂？」

　　今、私は円と桜子と三人でお茶してる

「いや、この前佐倉達がチア部にきたじゃん」

「あゝネギ君達と一緒に見学に来てたね」

「その時佐倉に迫ってみたんだけど普通に返された」

　　テーブルに突っ伏す

　　それなりに自分の容姿には自信があつたのだが

　　ナンパしてきた男達は男に取られ

　　佐倉には子供扱いされ

　　その佐倉に迫ってみるも素で返され逆に自分が照れてしまう

「自信無くしそう」

「まあゝまあゝ」

「佐倉君と言えばアキラとゆーながいつも一緒だよな」

「那波さんともよく話してるし」

私とあの三人との違い……

三人とも美人だけど私もそれなりにイケてるほうだ……と思う

スタイルは……

那波さん……明らかに叶わないというかあの人が同じ年とは思えない

ゆーな……最近また成長しているようで負けてる気がする

アキラ……身長にあった感じのスタイルで羨ましい

私……悪くは無いと思うが特別にいいというわけでもない

結論……

「やっぱり胸か……胸なのか……!!」

なんかさらに凹む

「でも、エリカちゃんやエヴァちゃんとも中がいいよね」

いや、エリカちゃんは年相応だが、エヴァちゃんは那波さんと逆の意味で同じ年とは思えないんですけど

でもそうになると佐倉ってロリコン？

それはそれでなんか嫌ね

「てか、最近の美砂はそればっかだね」

「うん、最近暇さえあればどうすれば佐倉くんを誘惑できるかばかりじゃない？」

言われてみればそうね

「そういうのは彼氏にやりなつて。なんで佐倉くんにこだわるの？」

「だって、なんか悔しいじゃない」

「なにが？」

「なにがつて……あれ？」

なにがそんなに悔しいんだろう？

ガキ扱いされたから？

迫ったのにあつさり返されたから？

どれもしつくりこない

「なに、美砂つては彼氏がいるのに浮気？」

「そ、そんなんじゃないって」

そうだよ！私には一応彼氏がいるんだから

・・・・・・あれ？一応

「まさか、彼氏持ちなのに惚れたか」

「なっ！そ、そんなわけないじゃん！」

そうだよ！私はただ自分の魅力をあの鈍ちにわからせてやりたいだけなんだから

あ！そっか私は佐倉を見返してやりたいんだそれだけだ

決して惚れてるとか気になってるとかそんなんじゃないんだからね！

さて、次はどう迫ってやろうか

くエヴァンジェリンの楽しみく

私が氷漬けにしてやった男の元に駆け寄る二人の女

「茶々丸、何分かかるとおもう？」

「おそらく2く4分ぐらいかと。明石さん次第です」

「それほどまでに成長したか」

茶々丸の言葉に笑みが浮かぶのがわかる

「はい、大河内さん、明石さん共にかなりの速度で成長しています」

「そうか、あいつとは大違いだな」

そういつてあいつらの主である奴と比べてしまう

「？佐倉さんはダメなんですか？」

「ああ、あいつに才能は無いよ」

数か月に及ぶ鍛錬であいつはほとんど成長しなかった

組み手をすればするほど動きはよくなる攻撃は鋭くなるし守りも固くなってくる

おそらく今なら3対1でやってもいい勝負ができるだろう

ただし、それは成長では無い組み手を重ねる事で本来積み重ねてきたが動き戻ってきているだけだ

奴は魔法の才能が無い魔力はあるモノのタカミチと同じく呪文詠唱ができない

だから私は呪文詠唱の必要無い感卦法を奴に教えた元々気を使えるあいつはいとも簡単に感卦法を習得した

これには私も驚き僅かながらも才能があると思ったのだが感卦法と奴のアーティファクトは相性が悪く一回の力の倍増で感卦法の制御が崩れ消えてしまう

そんなことなら最初から使わない方がいいだろう

そして、こいつの何よりの欠点はスロースターターなのだ

本人いわく臆病だから逃げ脚には自信があるらしくこいつは大抵の相手なら逃げ切るか時間を稼ぐくらいはできる

こいつのその戦闘スタイルとアーティファクトの相性はいい

いや、もしかしたら本能的な部分でこいつはアーティファクトに合わせた戦闘スタイルを取っているのかもしれない

それに、いざとなったら戦闘ように切り替えると言っているがそれでは遅い

もし、この先一撃必殺のすべを持つ相手と相対した時、勝負は一瞬で着くだろう

それでは私の気が済まない少しとはいえこの私が師事したのだ。簡単に死なれては困る

それに、あいつの考え方は私に近い

無駄に戦いたくないなどいつてはいるが、いざとなったら奴は完膚なきまでに己の敵を打ち砕くだろう

おそらくそこに正義は無く他者よりも自分の仲間を守る、見知らぬ
9を捨て知りうる1を救うタイプだ

だから、私はあいつがどう成長するのが楽しみだそしてあいつの
従者がどう変わっていくのが楽しみだ

「おっ！意外に早いな」

「はい、2分16秒です」

本当に楽しみだよ

失望させないでくれよ、佐倉佑太

十七時間目「それぞれの春休み」（後書き）

十七話目です。今回はそれぞれの春休み中の心情を書かせてもらいましたが、キャラが壊れまくっています。特に千鶴さんは結構壊れた感がありますが私の小説ではこれで行きます。そしてアキラや裕奈の部活に対しての様子は私の想像で書きました。美砂は何気に彼氏と佑太との間で揺れ動いたり、エヴァは才能の無い佑太に楽しみを覚えたりなど結構話がぶっ飛んでいます。そんな内容を書かせていただきました。

十八時間目「初めてのお見合い？」（前書き）

久しぶりの更新です

十八時間目「初めてのお見合い？」

ネギside

いよいよ明日から新学期です！

この間の課題をこなした事で僕とエリカは正式に麻帆良学園の教員として採用されました。

ようやく先生に慣れたし、明日からの新学期がとても楽しみです

「お待たせネギ君。目玉焼きー、イギリス風ブレックファーストやえ〜」

このかさんが朝食を作ってくれたのでこれからご飯です

「うん！おいしいです！このかさん」

「やーうれしーわーネギ君」

このかさんの料理はとてもおいしいので大好きです

「いつふえひまーふ」

アスナさんは今日もアルバイトがあるようですぐ食べて出かけてしまいます

「本当においしいです！このかさん、素敵なお嫁さんになれますね」

「もう、ネギ君てば」

このかさんは顔を赤くしながらトンカチで突っ込んできます

何時も思っんですがこの突っ込みは少しハードだと思います

朝食の後、洗濯や掃除をするというので居候としては手伝うべきだ
と思ひ手伝います

このかさんはお料理は上手だし掃除に洗濯までこなし、なにより優
しくっていいな〜と思います

怪力でガサツなアスナさんとは大違いです

「ただいまー！ちょっとネギネギ」

「うわぁ！ゴメンナサイ」

アスナさんが急に帰って来た事に驚き考えてた事がばれたかと思い
反射的に謝ってしまいました

「何あわててんのよ」

「ど、どうかしたんですか？」

アスナさんは手に持っていた手紙を僕の方に向け小さな声で

「（ボソッ）イギリスからのエアーメールに魔法学校って書いてあ
るじゃないバレたらどうすんのよ。不用心ねえ〜」

「（ボソツ）あ、本当だ」

手紙はお姉ちゃんからでした

内容は正式に先生になれた事のお祝いの言葉と気を抜かずに頑張れ
とのこと

そして、パートナーについてだった

僕にはまだ早いと思いますが、アスナさんは聞いてきたので魔法
使いのパートナー、魔法使いの従者^{ミニステル・マキ}についての事を話しました

結局、アスナさんには恋人探しに来たとしかにんしきされませんでした

間違っでは無いんですけどね

「ヘーネギ君、実は恋人探しに日本に来たん？じゃあウチのクラス
の女の子だけでも30人やからよりどりみどりやな」

「わぁーこのかさん！」

「木乃香！いついつから聞いて・・・」

突然のことに驚きアスナさんと二人後ずさりしてしまいました

「途中からやけど？・・・みんな、ネギくん恋人探しに日本に来
たらしいえー」

「ち、違います本当に先生になるためですよ」

このかさんそんな大声で言わないで〜

「スマンスマン、冗談やネギ君。アスナ、おじいちゃんが呼んどるから行ってくるなあ〜」

「え〜またあの話?」

「そうや」

あの話?

「それにしては今回は嬉しそうね」

「え〜そんなんちゃうって〜ほなな〜」

そう言っこのかさんは行ってしまいました

それにしてもバレたかと思いきドキドキしました

side out

十八時間目「初めてのお見合い?」

「で、何の用ですかクソ爺（学園長）？」

「本音と建前が逆になつとるぞ。まあよい、少し君に頼みたい事があつての」

俺はジジイと呼ばれ学園長室にやって来た・・・つか、なんで教えてないのに数日前に買った俺の携帯に連絡が来るんだ？

「まずはこれに着替えてくれんかの？」

渡されたのは黒のスーツ

「あんたの葬式に着ていくためのか？」

「ワシ、いい加減泣くよ、泣いてもいいよね」

「キモいからやめてくれ。いいからいい加減話を進めてくれ」

「話を逸らしたのは君だったような気がしたのじゃが・・・まあよい、ただの顔合わせのようなものじゃよ」

「顔合わせ？」

魔法先生と魔法生徒達とか？

「なら、別にスーツじゃなくて制服とかでもよくね？」

「特別な相手なんじゃよ。場所も料亭でな顔合わせついでに一緒に

「食事もするのでそれなりの格好でないとの」

「ああ、そういう事……ん？待てよ」

「おいジジイ、一つ聞きたい事がある」

「?! なっなんじゃ」

「まさかとは思うが」

「それって……おごりか？」

「ふぉ!？」

「だから、その食事はタダで食えるのかと聞いているんだ!」

「そんな高そうな店の支払いなんぞできんぞ」

「も、勿論ワシが場を用意したんじゃから料金の方はワシ持ちじゃよ」

「ならいい! すぐに着替えてくる」

「急ぎ学園長室を出て着替えに向かう」

「バレたかと思っただぞい(ボソツ)」

「その言葉は俺の耳には届かなかった」

「・・・・・・・・・・」

「二三二三」

料亭の案内された一室には着物を着た綺麗な子・・・・・・・・まあ、このかなんだが

「やゝ、綺麗やなんてウチ照れてまうわゝ」

「声に出てたか？」

「うん」

「まあ、実際に綺麗だし見とれてたからな」

「／／／／／」

「ん？どうした？」

「（ボソツ）そないあつさり言われたら反応に困るやん／／／」

「なんだって？」

なんか呟いてるみたいだけど良く聞こえん

「なんでもあらへんよ」

「そうか」

「ワシ、忘れられてる？」

そついや学園長もいたな

「まあよい。後は二人で好きにせい。なんなら今日は帰らんど」な
ゆうてんねん、おじいちゃん」もっ」

爆弾発言しようとした学園長ジジイにこのかのトンカチの突っ込みが入る

いい気味だ

頭にできたたんこぶを抑えながら部屋を出てく学園長ジジイと入れ替わりに料理が運ばれてくる

それをこのかと向かい合って雑談しながら料理を食べる

しかし、顔合わせの相手が学園長ジジイの孫のこのかだったとは……………

あれ、このかが魔法の事知るのでって修学旅行じゃなかったわけ？

なら、この時期はまだ魔法の事は知らないはず……………

それに、この状況って……………

「なんか、お見合いみたいだな」

「ん？なにゆうてるん佐倉君？」

俺の呟きが聞こえたようだ

「みたいやのうて、お見合いそのモノやよ」

「・・・・・・・・・・は？」

この子は今、なんて言った？

「せやから、今日はウチと佐倉君のお見合いやで おじいちゃんから聞いてへんの？」

「・・・・・・・・・・あのジジイ」

今に見てろよ。クッククッククツクツ・・・・

「な、なんや笑顔が黒いで」

おっと

「気にするな。まあ、せつかくだお見合いというモノを楽しむか」

「そうやね」

そのまま、二人で料亭の味を楽しんだ・・・・・・・・うまかった~~~~

「喰いすぎたかな」

「佐倉君めっちゃ食べてたからな」

さすがにちよつと喰いすぎたかな

「腹ごなしにその辺歩くか」

「そうやね」

席から立ち上がり

「このか」

このかに向け手を差し出す

「え？」

「こういう時は男がエスコートするもんだろ。それに……」

「それに？」

「一応はお見合いなんだからお互い名字じゃなくて名前で呼び合う方がいいだろ」

「あ……うん / / /」

頬を赤く染めながら俺の差し出した手をしっかりと握り返してくる

そのまま二人で手をつないだまま外へ歩いて行く

いや、なんか手を繋いだはいいけど離すタイミングがなかったからそのまま繋いでいた

こうして、春休み最終日をのんびりと過ごした

そのまま終わればよかったのに、そうは問屋がおろさなかった

「さて、弁解を聞こうか・・・あくまで聞くだけだが」

「そうだね、一応理由だけは聞きたいな」

「ちゃっちやと吐いた方が楽だと思うにゃ」

「ふふふふふふふふ・・・」

どこで知ったのか俺がこのかと思いをした事をエヴァ達が知り夜、俺の部屋に押し掛けてきた

というか、那波さん？何故あなたまでいるんですか？

「「「「さあ、O H A N A S H I しよう」「」「」

・・・助けてください！（セカチユウ風に）

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに・・・」

近衛門 side

今日のお見合いはうまくいったのゝ珍しくこのかが乗り気じゃったし
やはり、年が近い方が良いのかもしれないのゝ

今のところ候補としてはネギ君と佐倉君の二人じゃな

ネギ君は言わずと知れたサウザンドマスターの息子じゃし佐倉君も
あやつの孫じゃ

それに二人ともなかなか見どころもあるしの

「あの、学園長先ほどこれが・・・」

「むつ、すまんのしずな先生」

これは、今日の料亭の請求書かどれどれ・・・なっ！

「なっ、なんじゃこの請求額は！」

いつもの額の倍、いや3倍は言ってるぞい

「ど、どついつことじゃ？」

請求書と一緒に入っていた金額の割り振りを見ると・・・・・・・・

「あ、あ奴はどんだけ食べたんじゃ・・・」

追加という名目の下にフグやら伊勢海老やら高級食材のオンパレードの料理の名前と金額が記されていた

「・・・ネギ君に行ってもらうべきじゃったかの？」

こうしてささやかな仕返しは終わっていた

「いや、これ、全然ささやかじゃないからの！」

side out

木乃香 side

「~~~~」

「今日はご機嫌ねこのか」

「んゝ、そゝかゝ」

「それだけ顔がニヤケてればわかるわよ。はあゝこっちは一日大変だったってのに」

アスナがため息をつきながらテーブルに突っ伏す

うゝゝウチは何を考えるとるんやゝ

「そう、ならいいけど」

明日から新学期やし・・・もう少し積極的に話しかけてみてもええかな？

side out

十八時間目「初めてのお見合い？」（後書き）

どうも、ICです。7月8月はほとんど投稿できなくて私めの小説を楽しみにしててくださいました方がいたら申し訳ありませんでした。9月からは以前よりは更新ペースが落ちるかもしれませんが徐々に戻して生きたいと思っています。

今回でようやく春休み編が終わりました。次回からはいよいよエヴァ編です。主人公の立ち位置どうしよう・・・ではまた次回

人物紹介（前書き）

一段落しましたのでここでオリキャラの設定を紹介しようと思います。

人物紹介

主人公 佐倉 佑太

佐倉愛衣の一つ年上の兄。魔法の才能がなく魔法学校にはいかなかった。普通の生徒として生きていたがある日であった老人に（強制的に）連れられ、武術の修行を付けられ数年後麻帆良に連れてこられた。目を合わせた相手に一分間の幻影を見せる事ができる邪眼を持っている。

アーティファクト『赤龍帝の籠手』

始動キー：なし

得意魔法：なし

能力：赤龍帝の籠手、邪眼

仮契約者 エリカ・スプリングフィールド

明石 裕奈

大河内 アキラ

オリキャラ

エリカ・スプリングフィールド

佑太と同じく転生者。ネギの双子の妹。容姿は、顔や髪の色はネギそっくりだが髪が腰ほどまである

ロングヘアー。原作90時間目のネギの狐娘のようなイメージ。実は、転生前の世界では佑太の大学の

先輩。

始動キー：不明

得意魔法：不明

能力：不明

仮契約者 佐倉 佑太

今のところはこのような感じです。今後の更新で不明の部分を明らかにしていくつもりです。

人物紹介（後書き）

次回からいよいよ新学期・エヴァ編を始めようと思います

十九時間目「新学期と吸血鬼」（前書き）

新学期エヴァ編始まります

十九時間目「新学期と吸血鬼」

暗き闇の世界に一つの黒い影が走る

夜闇に浮かぶは満月

ハアッハアッハアッ

目の前には獲物足る少女が逃げ惑う

「ひっ！」

その少女はせまる黒き影に驚き足を取られる

「あ．．．．．いや．．．．．」

そしてその影は．．．

「いやああ~~~~ん」

少女に襲いかかった

少女を襲った黒い影が立ち上がりその傍らには少女が眠っていた

満月の光が黒い影を照らす

映し出されたのは少女の姿

（ようやくだ・・・）

（ようやくこの時がきた）

少女は夜空を見上げる

「まずは挨拶といこうか」

「はいマスター」

傍らには緑の髪の少女の姿もある

（覚悟しておけよスプリングフィールドよ）

（長年あのバカにここに閉じ込められた報いその身を持って償って
もらうぞ）

「クックククツ・・・ハッアハッハッハッハッ」

満月の夜空に少女のエヴァンジェリンの笑い声が響いた

そして・・・

「いよいよ新学期・・・吸血鬼の襲来・・・か」

その姿を遠目から見つめる少年がいた

十九時間目「新学期と吸血鬼」

「「三年！A組！」」

「「ネギ先生ーっ！！！」」

（バカどもが……） 長谷川千雨

（アホばっかです） 綾瀬夕映

相変わらずこのクラスの奴らテンションたけえゝなあゝ

「えと……改めまして三年A組担任になりましたネギ・スプリングフィールドです」

「副担任のエリカ・スプリングフィールドです」

「これから来年の三月までの一年間よろしくお願いします」

「「はい」」

「……ここ本当に中学校か？」

「……エヴァ、そんなにネギを睨めつけんかって……惚れたのか？」

「……今日はいつもの倍でいいのか？」

「すみませんした」

「しょうがない四倍で勘弁してやろう」

「いや、増えてないか？」

「ふん！」

エヴァさんがご機嫌ななめです

「で……なんでお前は俺の服を脱がそうとしてるんだ？風香？」

「これから身体測定だからだよ」

「そうなのか？」

「ええ………だから」

なんだ、この怒気の籠った声は

声の聞こえた方を振り向くと

「さっさと出てって下さいね（怒）」

ものっそい笑顔で黒い覇気を出してるエリカさんでした

・・・わお

結局、教室から追い出されたので不貞寝しようと屋上に向かう

その途中

「およ？そんなに慌ててどうしたんだ亜子？」

廊下を懸命に走っている亜子を見つける

「あ！佑太！」

ちなみに彼女、和泉亜子とはアキラ、裕奈との関係で比較的仲がいい

「それがまき絵がまき絵が！」

「落ちて着け亜子！まき絵がどうしたって？」

「それが・・・」

場所は保健室、亜子から事情を聞いた俺はここに亜子はネギ達に知らせるために教室に向かった

保健室では亜子と同じく比較的仲の良い少女、佐々木まき絵が寝ていた

目立った外傷は無く桜通りで寝ているところを発見されたい

しかし、彼女からは少し魔力のような物を感じた

「まき絵さん」

亜子の知らせでネギとその他クラスメイト達がやってきた

「佐倉さん」

「おう！亜子から聞いたんだな」

「佐倉さんも？」

「ああ、たまたま亜子と会ってな」

そして、ネギもまき絵の容体を確認し、俺と同じ結果に至ったらしい

結局その場はネギが貧血と判断しみんなを返した

さてと……

「俺も行くか」

「たいした演技だな」

昼休み、屋上に向かいその扉を開き目的地に着いたと同時に頭上から声がした

「どういづつもりだ」

「どうもこうも無いさ、見ていたんだろ．．．．．昨夜の事を」

「ああ」

あれは本当にたまたまだったんだがな

「しかし、クラスメイトが襲われる現場に居合わせながら見ているだけとは酷いやつだな」

「そのクラスメイトを襲ったクラスメイトは誰だ？．．．．エヴァ」

屋上のさらに上にある場に彼女はいた

見てるだけって．．．．助けるにしても結構な距離あったからどっちにしろ間に合わなかったし

「知らなかったのか？私は悪い魔法使いだぞ」

「そうだったな．．．．狙いはスプリングフィールドの二人か？」

「ああ」

「そして、その二人を試すために必要な魔力．．．いや、血を集めている」

「ほう……そこまでわかっているのか」

わかっているというか”知ってる”と言った方が正しいか

「血が必要なら俺のを吸えよ」

「他に被害が及ばないように自分の血を差し出すか……やはりお前はおかしなやつだ」

赤の他人ならともかく一応はクラスメイトだからな

「それもいいが、今夜は貴様の手を少し借りたい」

「何をする気だ？」

「スプリングフィールドを誘き出すためある女を襲う。その後、その女を保護しろ」

「女、子供は手をださないんじゃないのか？」

それがエヴァのポリシーだったはずだ

「殺しはしないさ。それと、あいつらは……スプリングフィールドは別だが……殺しはしないさ」

なるほど、こいつのポリシーは”殺さない”であって”手を出さない”わけではないんだな

「……いいだろう。襲われた子を保護するだけだそれ以外は手は貸さない。それと……もし、お前がいきすぎた行動を取れ

ば俺はお前を……」

俺は、押さえている殺気を少しだけ出し

「潰すからな」

エヴァを睨みつけるた

「……いいだろう、貴様の境界線がどの程度が見せて貰うぞ」

エヴァ side

話が終わると奴はこの場を後にした

しかし……『潰す』ときたか

あの時のあいつの瞳

あれは決意を固めた者の目だ

久しぶりにゾクゾクしたな

やはりあいつは面白い

これと言って才能は無く、あるのは赤龍帝の力のみ

まあ、それも一種の才能と言えば才能なのだが

しかし、奴は時折とんでもない事をしでかす

だから、あいつは面白い

言葉通り見せて貰うぞ貴様の中の善悪の境目を……

side out

その日の夜

友人と別れた宮崎のどかは一人桜通りを歩いていた

「27番宮崎のどかか……行くか」

「いつてらさーい」

エヴァはそのまま宮崎の元へと向かい

俺はそこから少し離れたところでその様子を見ていた

エヴァが宮崎に襲いかかろうとした時、静止の声と共に杖で飛んできたネギが現れた

ネギはそのまま魔法の射手を放つが、エヴァはそれを魔法薬を使っ

た氷楯で防いだ

ネギはその隙に宮崎を抱きかかえる

しかし、ネギの魔法の余波までは防ぎきれずエヴァの帽子がそれへと舞いエヴァの顔がハッキリと見えた

それにより、ネギはエヴァがこの一見の犯人だとそして、自分のクラスの生徒に魔法使いがいた事に驚いていた

ネギがエヴァの行動の意味がわからず何故このような事をするのか問うが、エヴァの答えは・・・

「この世には、いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ネギ先生」

その言葉と

「氷結・武装解除」

魔法薬を用いた魔法だった

その魔法をネギは片手を前に出し抵抗したが防ぎきれず前に出した腕の袖と抱きかかえていた宮崎の服のほとんどが凍り砕けた

つまりは宮崎は今、ほぼ裸だ！

すぐに駆け寄りたい衝動をどうにか抑え事の成り行きを見守る

ネギも宮崎の姿に気づきアタフタしていると、そこにアスナとこの

かがやってきた

ネギと宮崎の姿を見てアスナはまたかと思いながらネギを見る

このかは冗談か本気かわからんがネギを噂の吸血鬼かと誤解している

その様子を見ていたエヴァは巻きあがる砂煙に身を隠しながらその場を後にしようとし

その姿をとらえたネギは宮崎をアスナとこのかに任せエヴァの後を追う

アスナもネギが心配なのかこのかにその場を任せてネギの後を追った

さて、そろそろ行くか

「ん~~~~どないしょ」

「どうかしたのか？」

偶然を装ってその場に近づく

「あ！佑太！助かったわ」

「？助かった？・・・っ／／／」

「あつ！み、見たらあか～～ん」

顔を赤くし後ろを向く。もちろんしっかりと宮崎の姿を網膜に焼き付けた後ですが

「と、とりあえずこれを宮崎に着せる」

着ていた上着を脱ぎ後ろにいるこのかに渡す

「わかったえ・・・・・・・・よし、もう大丈夫だよ」

「そうか、とりあえず女子寮まで運ぶぞ」

振り返り宮崎を俗に言うお姫様だっこする

「（ボソッ）・・・・・・・・ええなあ～」

「行くぞ、このか」

聞こえないふりをして歩き始める

・・・・・・・・あれ？このまま女子寮に帰るとこの後の事見れないじゃん

エヴァがやりすぎても止めらんない・・・・・・・・まっ、大丈夫だろう

そのまま宮崎を抱えこのかと女子寮の方に帰った

余談だが、女子寮に着いた時、ちょうど玄関にいたエリカさんに宮崎の姿を見られ、

「変態！信じてたのに！」

と言われ、涙目で平手打ちをいただきました

その後このかの説明で誤解と解り何とか涙を堪えてくれた

・・・俺、何もしてないのにorz

十九時間目「新学期と吸血鬼」（後書き）

今回、オリ主は基本傍観です。次回から少しずつ原作に介入させていくつもりです

二十時間目「俺の存在って何なのさ・・・」(前書き)

久しぶりの投稿です。ようやく二十話目です。

二十時間目「俺の存在って何なのさ・・・」

「ふーん、茶々丸が魔法使いの従者^{ミニステル・マギ}つてどこまでバラしたんだ」

「この程度のことなら、あの坊やにバレてもたいした問題ではない・
・が」

エヴァが宮崎を襲った翌日の昼休み、再び俺は屋上でエヴァと話していた

ついでに言うとエヴァは今日は学校には来ているが授業はサボりだ
そして、昨晚エヴァとやりあったネギだが今朝教室でエヴァの姿がないことにホッとしていた

これは教師としてはどうなんだろう？

「神楽坂明日菜・・・」

「ん？アスナがどうかしたのか？」

「蹴りを顔面にくらった」

「・・・・・・・・ぶっ」

「・・・・・・・・（怒）」

ドカッバキッボコッ・・・・・・・・しばらくお待ちくださいm

（――）m

「あいつは私の魔法障壁をあっさりと破られた。まるで紙のようにあっさりと・・・」

「それふあほうふあひたのか？」

しゃべり辛いし鼻血が止まらん

「真祖の魔法障壁だぞ！お前ならまだしも、ただの中学生のガキにだ！」

「ふえ」

俺の場合はブーステッド・ギアで2〜3回倍増して普通にグーで碎いた

「しかもあれは破られたというよりも」

「”無効化”された・・・か？」

「ああ、そうだ。しかし、もう直ったのか？」

「その辺は気にすんなや」

ギャグですから

二十時間目「俺の存在って何なのさ・・・」

「まあ、アスナだしな真祖のお前の魔法障壁を無効化したって不思議じゃないさ」

「?どういうことだ?」

「え?いやだつて、アスナは魔法無効化能力マジックキャンセル持ってるし」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

あれ?

「もしかして・・・言ってなかったか?」

「・・・ああ」

あれ?これって言っただけじゃなかったかな?

「ふふふふふふふ・・・」

エヴァったらそんなに素敵な笑顔を浮かべちゃって

「なぜそれを早く言わないんだ~~~~~!!!!!!」

「ぎゃーーーーー」

氷漬けにされた後のその日の記憶がないのでエロオコジヨの登場イベントに立会えなかった

まあ、別にいいけどさ

そしてその翌日

「ってことで、今回はエヴァ側に付くつもりだから」

「そうね、仮にもあなたは一応エヴァンジェリンさんの弟子ってことになってますもんね」

エリカさんと今回のことについて話し合っていた

「弟子って言うか・・・オモチャ？」

「・・・・・・それ、自分で言っただけで悲しくない？」

「・・・・・・少し」

ほとんどが修行という名のイジメだけだね

「それにしても、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんつ
たら……私のオモチャで遊ぶとはいいい度胸ね」

「いや、俺はあなたのオモチャになった覚えは」オモチャ「なんですか？ 佑太
？」オモチャ「いえ、なんでもありません（涙）」

あの、エリカさん？ 口調は丁寧なんですけど……黒いものが体
中から溢れてますって。その状態じゃ俺に拒否権なんて物はないな
「いいでしょう、どちらに佑太オモチャの所有権があるかハッキリさせる時
がきたようですね」

「いや、俺は物じゃ」オモチャ「なんですか佑太？」物でいいですハイ」

後日、エヴァにこの事を伝えると

「そうか、いいだろうエリカ・スプリングフィールド坊やがいれば
貴様など別にどうでもよかったが佑太オモチャがかかっているとすれば話は
別だ！ 貴様を完膚なきまでに叩き潰してやろう」

こうして、エヴァとエリカさんとの間で俺オモチャとしてのの所有権をかけた戦いが
始まるうとしていた

俺の意思というものはないんですね

あれ、目から汗が………グスン

翌日

（ふうん、あれが、エロオコジヨのカモ何とかネギの助言者ねえ）
なんか懷に隠れてるけど普通に見えてんですけど）

そんなことを考えながら茶々丸の後を尾行？しているネギとアスナ
の姿を少しはなれたところから見ながら今朝のことを思い出す

・ ・ ・ ・ ・

「あれ？どこに行くんだエヴァ？もう授業始まるぞ」

「フンツ！何で私がボーヤの授業なんぞに出なければならんのだ？
当然サボりだ！」

腕を腰に当て高らかと宣言するエヴァ

「んな堂々と宣言すんなよ・・・（ボソ）んな貧相な胸張って」

ヒュッ！

「何か言ったか？」

首に断罪の剣が突きつけられる
エクスキューションソード

「イエ、ナンデモナイデス。エヴァサン」

こんな堂々と魔法使うなよなあ」

「ちゃんと認識障害ぐらいしてる」

「さいですか」

心読まないでくださいって

「まあよい、それからネギ・スプリングフィールド、エリカスプリングフィールドに助言者がついたかも知れん。できるだけ私か茶々丸のそばにいる」

「助言者？」

「そうだ……オコジョだが」

・ ・ ・ ・ ・

（ん）今のところは普通に原作通りに進んでる。カモとネギが会いネギとアスナが仮契約をし仮のパートナーとなり、茶々丸を襲うために後をつけている（と）

茶々丸は一人で歩きながら風船が木に引っかかり泣いてる女の子の風船をとってあげたり

階段を辛そうに上っているおばあさんをおぶってあげたり

川に流されているダンボールに入ってる子猫を助けたり

野良猫に餌を上げたり・・・まあ、これは俺と交互に行っていたが

・・・茶々丸って普通の人間より人間らしいよね

そして原作通り人目がなくなっただころでネギたちが襲い掛かった
さすがの茶々丸も2対1では厳しい・・・いや、アスナの動きが思った以上によかったのか、アスナの動きに不意をつかれネギの呪文の詠唱を許してしまう

11のネギの魔法の射手が茶々丸向かいに放たれる

「ちっ！あのバカ！」

それを見ていや、ネギの表情を見て舌打ちをし駆け出す

原作通りなら茶々丸が避ける事を諦めたときの言葉でネギが魔法を逸らそうとするが、あの目は

（あの目は完全にヤル気だ！クソッ！間に合うか！）

「よけません。すみませんマスター・・・佑太さん、もし私
が動けなくなったら猫の餌を・・・」

（バカたれが！諦めんじゃ・・・）

「諦めてんじゃねえ~~~~~!」

ネギside

ここでためらったらだめだ!

アスナさんが茶々丸さんを引きつけてくれているうちに呪文を詠唱する

「光の精霊11柱…」

ここでためらったら今度はエリカが

思い浮かぶのは双子の妹、ここで僕が茶々丸さんを倒せばエリカに被害が行かなくなる

「集い来りて…」

だから僕は・・・

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

手加減はしない!!

茶々丸さんに向かっていく魔法の矢

これでいいんだこれで……

「諦めてんじゃねえ~~~~~!」

「え?」

魔法の矢が茶々丸さんに当たった音に隠れて男の人の声が聞こえた気がした

土煙が舞い僕からは茶々丸さんの姿は見えない

あの声には聞き覚えがあつた

「ちよつ、ネギ!今の声つて」

アスナさんが青い顔をして僕の方へと駆け寄つて来る

「やったぜ!兄貴!」

カモ君が僕の頭の上で騒いでいるけど

二人の言葉が耳に入らない

あの声は空耳だ!あの人がここにいるわけがない

そうだ気のせいだ!彼がここにいるわけないじゃないか

徐々に土煙が薄れていく

うつすらと見えてきたのは黒い影が二つ

一つは呆然とその場に立ち尽くす茶々丸さん。そして、もう一つは・
・・・

「あ、あああ」

地面に横たわって・・・

「う、嘘よ・・・」

地面を真っ赤に染めている・・・

「佑太・・・さん・・・」

大量の血を流しぐったりとしている、佐倉さんだった

s i d e o u t

二十時間目「俺の存在って何なのさ・・・」(後書き)

いやゝ、遅くなりましたがようやく書き上げられました。そして、神威さん誤字脱字の報告ありがとうございました。今回の投稿時に修正いたしました。句読点の方は暇を見て直していきたいと思っています。そして、質問にあった邪眼についてですが、これは後のストーリーで明らかにしていくつもりですのでその時ということでしょう。他にも、ご意見ご感想をお待ちしております。

二十時間目「赤い夕暮れ」(前書き)

久しぶりの投稿です。ちょっと短いです。

二十一時間目「赤い夕暮れ」

明日菜 side

赤く・・・

赤く・・・

地面が赤く染まっていく

時間は夕暮れ

夕日の色で地面が赤く染まっている・・・

違う・・・

あれは夕日の色じゃない・・・

”あの時”と同じ・・・

”あの時”と同じ色・・・

”あの時”と同じ匂い・・・

”あの人”の服にこびりついてた・・・

”あの人”の最後に見た姿に・・・

”あの人”の服を染めていた・・・

”血”・・・

そしてその血に染まっているのは”あの人”では、
”ガトーさん”
ではなく

いつも寝てばかりで・・・

いつもしまりのない顔をしていて・・・

時折、まじめな顔もしてるけど・・・

たまあゝに優しい笑みを浮かべている・・・

「ゆう・・・た・・・」

佐倉佑太の姿だった・・・

side out

二十一時間目「赤い夕暮れ」

茶々丸 side

いったい何が起きたのでしょうか

ネギ先生の魔法は確かに、私に向けられ撃たれたはず

そして、私は後ろにいた、猫さんたちが傷つかないように

ネギ先生の魔法を避けず、その身に浴びようとした

私なら、壊れても修理できるから・・・

マスターには、さびしい思いをさせてしまつかもしれない

あの人は優しく寂しがりやだから・・・

でも、今は大丈夫でしょう。佑太さんがいる

大河内さんや明石さんもいる

あの人たちがいれば、マスターは大丈夫だ

だから、私が壊れても大丈夫だ

そのはずだった・・・そのはずだったのに・・・

目の前で起きている、この状況は何なのだろう

真っ青な顔をしているネギ先生

大声をあげながら、こちらに走ってくる神楽坂さん

私は・・・

破損箇所・・・なし

正常稼動・・・確認

無傷？

そして目の前に横たわる人

認証開始・・・検索結果・・・該当あり

該当者・・・

「佑太・・・さん？」

そこに倒れているのは、佐倉佑太さんだ

何で、こんなところで寝ているんですか？

こんなところで寝ていては、風邪を引いてしまいますよ

佐倉佑太・・・負傷

状態・・・呼吸無し、出血多量

結果・・・重傷、生存確率0%

？どうして、こんな結果が出てくるのでしょうか？

佑太さんは寝てるだけですよ？

エラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラー

何度やっても、同じ結果が出てくる

私が無理やりデータを書き換えようとしてもエラーが繰り返し出てくる

《違う・・・》

おかしい、何故、私はこの結果を変えようとしているのだろうか？

《違う・・・》

やはり、私は先ほどのダメージで壊れてしまったらしい

《違う・・・》

早急に葉加瀬に修理してもらわなければ・・・

《違う・・・》

早く葉加瀬のところに行かなくては・・・

《違う！》

何が違うのだろう

《これは現実!》

現・・・実・・・?

《私を庇って・・・》

この状況が現実?

《彼は・・・》

佑太さんが、私を庇って、倒れていることが

《佐倉佑太は・・・》

血を流し倒れている彼が・・・

《死亡・・・》

「佑太・・・さん」

私は足元に横たわっている彼を抱き上げた

side out

ネギ side

わからない

いったいどうなったのだろう？

僕の放った魔法は確かに茶々丸さんに当たったハズだ

なのに茶々丸さんは呆然と立っている

どうしてたっているのだろう？

魔法は確かに当たったんだ！

そうか障壁だ！魔法障壁で防いだのか！

でも、茶々丸さんはロボットだって言ってたから、魔法は使えないはず

じゃあ、何で無傷なんだ？

僕はその時、意図的に茶々丸の足元を見ないようにしていた

信じたくなくて

自分がした事を、認めたくなくって

僕が魔法で一般人を・・・

自分の生徒を傷つけてしまったことを、信じたくなくって
だけど・・・

何度、見直しても

何度、考えても

目の前の光景は変わらず

横たわる佐倉さんからは、止まることなく赤い血が流れ

漂ってくるのは、鉄っぽい血のにおい

「あ・・・ああ・・・」

やっぱり・・・

「ア、アニキ」

間違いないんだ・・・

「あああ・・・」

「アニキ！しっかりしてくださいえ！」

これは、僕がやったんだ・・・

僕が・・・僕の魔法が！

彼を・・・佐倉さんを・・・

「うわあああああああああ~~~~~!!!!!!」

殺してしまったのだ・・・

頭を抱えて、その場につづくまる

なんで!どうして!

佐倉さんを傷つけるつもりなんてなかった

なのに!なのに!

僕は・・・・・・・・・・

「ジャスト一分だ」

「え？」

僕が殺してしまった人の声と共に

ピシッ！

目の前の光景ににひびが入り

パライイイイイン！！

ガラスのように砕けた

そしてその先には、茶々丸さんともう一人

「よう、ネギ先生」

僕が殺してしまったはずの

「悪夢^{ユメ}は見たかよ！」

佐倉さんが平然と立っていた

side out

二十一時間目「赤い夕暮れ」（後書き）

正直、今回のオチは、大半の人が予想できてたと思う。前回のあとがきで邪眼に関して触れちゃってたからな。次回はセツキヨウの時間です！できるだけ早く書き上げるようにしたいと思っています。ご意見、ご感想、誤字脱字などありましたら、お待ちしています。

二十二時間目「やりすぎです」(前書き)

遅くなりましたが投稿します。今回は難産でした。独自解釈やアンチ気味ですので少し読みにくいかも知れませんが

「二十二時間目」やりすぎです」

ネギside

世界にひびが入り砕ける

認めたくない

とんでもないことをしてしまった

そんな、世界が粉々に崩れていく

目の前には元気な彼の姿が

ああ、よかった

あれは夢だったんだ

僕は何もしてない

何も起きなかったんだ……

「二十二時間目」やりすぎです」

「いつまで呆けているつもりだ？」

「え？」

その声は、とても冷たく

「ゆ、佑太？ぶ、無事なの？」

「ああ、だから……構えろよ、ネギ・スプリングフィールド、
神楽坂明日菜」

とても、怖かった

「か、構えろって……あんた何言って……」

次の瞬間、佑太さんの姿が消え、風が吹く……

「次は……」

次に聞こえた声は背後からで……

「……当てるぞ」

「え？」

その手には僕のメガネと

「な、何が・・・」

アスナさんの制服のリボンが握られていた

こ、怖い・・・

「あ、あああああああああああ！ラス・テル・マ・スキル」

無意識で詠唱を始め

「魔法の射手！連弾・光の37矢！」

再び彼に魔法の射手を撃つ

「そつだ、来い」

佑太さんは、そう呟いたと思うと、僕の魔法を簡単に交わしながら近づいてくる

「ちょ、ネギ！佑太も！いい加減に」

怖い・・・怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「ああ、雷精、風の精！雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐！」

今の僕の最大呪文！これなら佑太さんだつて

「いかず・・・それは、少し危険だな」っ！！」

いつの間にか佑太さんは目の前に迫っていた

「え？」

次の瞬間、僕の体は浮遊感に包まれ

「あぐっ！」

背中から地面に叩きつけられた

「ネギ！佑太・・・なんで・・・」

なんで・・・僕は佑太さんと戦ってるんだろう

「何でか・・・か」

ネギ side out

佑太 side

「何でか・・・か」

こいつらはわかってないんだろうな

「逆に聞こう、お前らこそ、何やってんだ」

「「え？」」

「何をやってんだ、と聞いているんだ」

「そ、」

「それは・・・」

ネギとアスナが黙ると

「やいてめえ！」

「あ？」

足元から声がした

「テメエこそ何モンだ！なんの理由あつて兄貴の邪魔をしやがるんでい！」

足元を見ると白いイタチがいた

「あいつは真祖の吸血鬼のパートナーで兄貴の敵なんだ！そいつを今ボコツてるところで・・・はっ！そうか！てめえ！奴の仲間だな！」

ほう

「いい勘してんじゃねえか、イタチ」

「な！」

「そんな・・・」

ネギもアスナも驚いてる

「少なくとも、自分の教え子や、クラスメートを平気で襲える奴らの仲間では無いわな」

「「っ！」」

ネギとアスナが一瞬こわばる

「別に、お前らを攻めているわけじゃない。自分が襲われたんだ、やり返したところで文句は言わんさ」

「な、なら「だが」・？」

安堵した二人が何か言おうとさえぎる

そっだ、やられたら、やり返す

戦う者、戦闘者ならそれでもいい……だが

「それなら、さっさと教師を辞めてくれ」

「え？」

「どんな理由があろうとも、ここでは君は教師だ。その教師が生徒をましては自分のクラスの教え子を襲うなんて事はしてはいけないことだ」

「そ、それは……」

「何より、君は一度とはいえ俺を殺したんだ」

「あ……」

「で、でも、あれは幻で、実際に佑太は生きてるじゃない！」

幻……か……

「確かに、あれは俺が邪眼で見せた夢だ……だが、もし、あれが夢ではなかったら？」

「え？」

確かに、今回は偶然にも俺が見せた夢だ。だが、

「もし、俺が邪眼も無いただの人間だったら？それでも俺はあぁしたと思うぜ」

「……」

あの出来事が必ずしも無いとは言い切れない

本来、人払いの結界や周囲の確認はしてるのだろうが、もしかして
つということもある

だからこそ、

「ネギ……俺は君に知ってほしいんだ、力を持つことの意味を・
・力を持つ者の責任を……」

「意味……責任……？」

知ってほしい

「何故、君は力を振るう」

「僕は……」

力を振るう理由を

「その力は何のためにある」

何のために力を……魔法を使うのか

「魔法の射手ですら普通の人間にとっては拳銃と同じレベルの威力があるんだ、そんな物をその力を一般人に振るえばどうなる？」

100%つてわけじゃ無いがあたりどころが悪ければ簡単に人を殺めることができる

「そ、それは……」

「力を持つ者はそれなりの責務を負う。今のネギと同じだ」

「同じ？」

その力を無闇に振るえば

「やられたから、やり返す」

「あ……」

それは無限の連鎖

「そうされても仕方が無い」

「し、仕方が無いって……」

どちらかが死ぬまで……いや、死んだとしても、その連鎖は止まらない

「それが、力を持つ者の責任の一つだ。ハンムラビ法典にもあつたろ、『目には目を歯には歯を』って。法律としてはおかしいが、力の世界、戦場なんか当たり前のことだ」

「……」

二人は黙ってしまう

「ネギ・スプリングフィールド！君は何を思つて魔法を使う？」

「え？」

「魔法は所詮、道具でしかない。その人の心や思いによって初めて意味ある力、意味ある魔法となる」

道具に意味なんて無い。使う人しだい、それは善にも悪にもなる

「心……」

「君は今、どういっつもりで、魔法を使った？どういっ気持ちで、茶々丸に魔法を向けた」

「僕は・・・」

ネギは考え込んでしまっ、この子なりに、思うことがあったのだろ
う・・・だが、

「さっきの行動に、自分自身で間違ってなかったと胸を張っていえるのか？」

考え込んでしまってる時点で

「迷いがあるということは、心が決まってる、決意が無いのと同じだ！」

迷っているのと同じだ

「心なき力、決意なき力は、ただの暴力でしかない！」

「っ！」

「怖い・・・自分の力が、人を殺めることのできる力が・・・」

「・・・・・・・・・・」

「そして、神楽坂もだ！」

「え？」

こいつも、解ってないようだな

「本来、お前はネギを止める立場だ。そのイタチに何を吹き込まれたかは知らないが、間違ったことを、起こそうとしているしていると分かっているのに、何故止めなかった」

「そ、それは・・・」

解ってなかったのか？それとも・・・

「間違っている思わなかったのか？」

「ち、違っわ」なら、お前はぶん殴ってでも止めるべきだったんだよ」・・・ごめん」

「謝ったところで、結果は変わらん」

「・・・」

「最後にネギ、迷いがあるなら戦うな！決意なき者が戦ったところで、死ぬだけだ！」

言いたい事は言った・・・後はあいつら自身の問題だ

「行こう、茶々丸」

茶々丸の元に歩み寄り帰ろうとするが

「ですが・・・」

まだ、二人の事が心配なのだろう。本当に優しい奴だ

「後はあいつら自身の問題だ……それと最後に言うておく」

歩き出した足を止め振り返る

「もし、次に事を構えることがあるのなら今度は本気で行くぞ！」

「「?!」」

俺の視線に怯え、二人は視線を逸らす

「帰るぞ茶々丸」

「……はい」

茶々丸に掴まりその場を飛び去る

後はあいつらしだいだが……少しやりすぎたかな？

大丈夫だ！あいつらなら立ち直れる………よな？

しかし

「（ボソッ）これで、俺がエヴァの仲間と認識されたか」

と、これで終わればよかったんだが……

エヴァンジェリン宅

「いてててて」

「やりすぎです……佑太さん」

エヴァの家に戻った俺たちは家に入ったとたん茶々丸に頬をつねられた

「反省してるんですか？」

「ひてふ、ひてふはら、ふあなふいへふへ」

「反省が足りません」

今度は両頬を引つ張られる

「ひゃ、ひゃめふえふへっへ、ひゃひゃふあふ」

「……本当に……心配したんですよ……」

茶々丸の手が頬から離れ胸元に置かれる

「茶々丸？」

「ご無事で……よかったです……」

「すまん……心配かけたな」

やばい……ぐつと来た

茶々丸かわええ……

「……いつまでやってるつもりだ……貴様ら？」

つたく、コメカミなんかヒクつかせちゃって

「まったく、エヴァったら野暮だぞ」

「マスター、空気を呼んでください」

「私か！私が悪いのか！？」

せっかく、いい雰囲気だったのに

「エヴァ、茶々丸を嫁にくれ！」

「やるか！」

「マスター今までお世話になりました」

「何でお前も、嫁に行く気になってるんだ!!」

なぜ！茶々丸もその気なのに・・・あっそうか！

「もしかして、妬いてるのか？」

「妬いてるんですか、マスター？」

「な！／＼／」

あらま、顔を真っ赤にしちゃって・・・もしかして、マジで妬いてた？

「・・・ふふふっふふふふふふふふ・・・どうやら、また氷漬けになりたいようだな」

「ヤベ」

や、やりすぎた〜

そして、地獄の鬼ごっこinエヴァの別荘が再び開催され、数時間後、一つの氷像が完成されたそうだ

その途中、

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……佑太さんの逃げ
回る姿も素敵です！」

とりあえず茶々丸、眼科に行こうぜ

二十二時間目「やりすぎです」（後書き）

力や魔法に関してですが、これは私自身の考え方なので、納得できない人もいるかもしれませんが、その辺は多めに見てやってくださださい。そして、やはり私はシリアスを書くのが少々苦手です。よって最後にギャグを入れました。相変わらずのフラグ乱立です。・・・

- ・回収しきれるかな？

では、また次回

二十三時間目「学園都市大停電・前編」（前書き）

長くなりそうなので二つに分けました

「・・・念話時の会話のカッ」です

二十三時間目「学園都市大停電・前編」

あれから数日がたった

ネギは原作通り？かは、わからないが、長瀬やアスナ、エリカさんのおかげで立ち直ったらしい

翌日に、俺にも頭を下げに来た

俺の言いたいことが少しはわかったようで、その上でエヴァや俺に対して勝負を挑むようだ

エヴァは、その日に風邪で弱っていたが、ネギと茶々丸の看病と、俺のちょっとした嫌がらせのおかげで、翌日に全快し、翌日からは授業に参加し始めたが、逆に俺が風邪を引き二日ほど休んだ

いやゝ、わざわざ寝ているエヴァの横でエヴァの好物の菓子を堂々と食ったり、エヴァの未プレイのゲームをやっていたら、そらキレるわな

風邪が治ったのと同時に、別荘で数日氷漬けにされりゃ、風邪も引くよなゝ

実際、風邪引いたらエヴァと茶々丸、終いにはアキラや裕奈にまで

「「「「佑太（貴様）でも風邪を引くんだな」「」」」」

と、言われた

お前らは俺を何だと思ってるんだよ……ちくしょ！

二十三時間目「学園都市大停電・前編」

ついに、この日が来た

今日の夜、麻帆良学園都市の大停電の日

原作では今夜、エヴァとネギが対決する……まあ、対決とい
つても、実際はじじい（学園長）が
裏で糸を引き、ネギに本当の実戦を体験させるつもりなんだろうが・
・・

「なんで、俺も行かなきゃ行けないんだ？」

「貴様だけではない、貴様の従者二人も連れて来い」

「おい、あいつらを今回のことに巻き込むな」

「心配するな、大河内アキラと明石裕奈は佐々木まき絵と泉亜子と
共に操られボウヤを誘い出すだけだ。危害は加えさせんよ」

「……………変なところで優しいよな、キティって」

「その名で呼ぶな!」

胸倉を掴まれガクガクされた……………あ、酔った

「と、言うことらしい」

エヴァと決めたことを仮契約カードの念話でアキラに伝えている

「わかった、私と裕奈はその後どうすればいい?」

「泉と佐々木を保護して寝てていいぞ」

「……………無理、しないでね」

「ああ、わかってるよ」

「何かあったら、絶対に私たちを呼んでよ! 私たちだって戦えるんだから!」

「わかった、ありがとな」

念話を終え、空を見上げる

「……………いよいよか」

空には月が浮かんでいる

「こちらは放送部です。学園内はこれより停電となります」

放送部からの、停電の知らせが響くのと同時に

「佑太、時間だ来い」

「はいよ」

エヴァから呼び出しの念話が届いた

場所は大浴場・・・・・・・・大浴場？

俺って入っていいのか？

そんな考えを頭の片隅に置きながら大浴場に着くと、そこにはメイド服を着た裕奈、アキラ、泉、佐々木、茶々丸がいた

そして、その中央には黒のボンテージみたいな服を着た金髪の妙齡の美女が・・・・・・・・って

「あんた、誰だ？」

俺の言葉に金髪美女がズッコケた

「茶々丸、エヴァはまだ来てないのか？」

「あの・・・・佑太さん」

「まったく、人を呼び出しておいて遅刻とは、なんてガキだ！」

「この方が、マスターです」

「へ？」

ボンッと音と共に白い煙が上がり金髪美女が金髪幼女になった」

「誰が幼女だ！！」

なっ！心の声を読まれた！

「佑太さん、声に出てました」

「あれ？」

「・・・・・・・・・・後で覚えておけよ／＼／／」

エヴァさん、何故にキレながら頬を染める

「マスターは佑太さんに美女と言われて嬉しかったようです。これは照れ隠しです」

「なっ、何を言ってるんだ、茶々丸」

「あゝ」

美女って言われてドキツとしたのか・・・・初心だな

「貴様も、何を納得している！くっ、このボケロボめ！」

「あ、マスターいけませんそんなに巻いては・・・・」

エヴァは照れ隠しなのだろうか茶々丸のネジを巻いている

あゝなんか、和むわゝ

と、和んでいると

「ぶっ！」

いきなり顔面に衝撃がきた

「いつて〜〜〜」

足元を見ると、そこにはバスケットボールが・・・・・・・・・・？

バスケットといえば裕奈だよな

と思い裕奈たちの方を見ると

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目が虚ろながらもご立腹の裕奈とアキラの姿が・・・・・・・・・・あれ、お二人は操られてるんですよね？

「ハアハアハア・・・・おい！貴様もいつまでそこにいる！さっさとこっちに来い！そろそろ、ボーヤがここに来る！」

「あいよ」

いつの間にかコントは終わってたようで俺はエヴァの後ろ、茶々丸の隣に立ちネギが来るのを待つ

エヴァは再び大人モードになった

数分後

「エヴァンジェリンさん！どこですか！まき絵さんを話してください」

完全武装した、ネギが大浴場へとやってきた

「ふふ．．．ここだよボーヤ」

月の光がタイミングよく俺たち七人を映し出す．．．てか、タイミングいいな

「パートナーはどうした？一人で来るとは、見上げた勇氣だな」

「あ、あなたは！」

「フ．．．．．」

あゝ、エヴァは自分の姿を見て驚いたとでも思ったんだろうな

けど、たぶんあれは．．．．．

「ど、どなたですか？」

本日二度目のエヴァのズッコケ

「私だ！私~~~~っ」

「あ~~~~ー！」

子供モードに戻ったエヴァを見てようやく誰かわかったらしい

「くっっ………」

笑いそうなのを何とか我慢する

自分がやるのより、他人がやらかしたほうが笑えるな

「まったく、ボーヤといいこいつといい………まあいい」

何とか立て直したエヴァ

「満月の前で悪いが、今夜ここで、決着をつけて、ボーヤの血を、存分に吸わしてもらっよ」

「………わかりました」

エヴァの言葉に、ネギは覚悟を決めたようだ

「でも、そうはさせませんよ。僕が勝って、悪いコトするのはやめてもらいます！」

そうか………見せてみるよ、ネギ・スプリングフィールド！

君のその覚悟を！

「それはどうかな．．．行け！」

エヴァの指示で、アキラ、裕奈、佐々木、泉の四人がネギの元へと向かった

「ひ、卑怯ですよ！クラスメートを操るなんて！」

「卑怯？言ったはずだ．．．私は悪い魔法使いだと」

ネギと四人の距離がだんだんと詰まっていく

さあ、どうする！操られてるとはいえ、彼女たちは君の生徒だ．．．
・また、魔法の射手で蹴散らすか？

「一人で来たことを後悔させてやろう．．．やれ、我が下僕達よ」

エヴァの命令で四人がネギに襲い掛かる．．．襲い掛かるって言ってもネギが装備してきた魔法具の類を奪って捨ててるだけだが

「はう．．．くっ！」

ネギが液体の入った試験管みたいなものを中に投げる。あれは．．．

フランス エクサルマティオー
「風花・武装解除」

空中で液体が反応しアキラと泉の服が弾け飛ぶ

やっぱり、あれはエヴァがよく使っている魔法薬か

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 大気よ水よ（アーエール・エト・アクア）白霧となれ（ファクティ・ネブラ）彼の者等に（イリス・ソヌム）一時の安息を（ブレウエム）」

ネギは四人の包囲網から抜けながらも詠唱をしている

ネクラ・ヒュフノーティカ
「眠りの霧！」

裕奈と佐々木は避けたが、アキラと泉が眠りの霧を受け眠ってしまう

催眠系の魔法で寝かせ無効化するか相手を傷付けず無効化するにはいい手だな

「フ・・・やるではないか。では本番と行こうかボーヤ。茶々丸！佑太！」

「ハイ」

「おう」

エヴァの言葉で俺と茶々丸が駆け出す

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！」

「失礼します、ネギ先生」

「構えろよ、ネギ！アデアット」

駆けながらアーティファクト、赤龍帝の籠手を出す

なんか、久々に使う気がするのは気のせいかな？

「！！！」

後ろで詠唱をしているエヴァに気がつきネギは後退していく

ここでは狭いと判断したんだろう

「喰らえ！魔法の射手連弾・氷の17矢」
サギタ・マサキリス グラキアーリス

エヴァの魔法の射手が大浴場の窓ガラスを打ち破り、ネギもそこから外へと落ちていく

しかし、ネギは空中で体勢を立て直し杖にまたがり飛ぶ

そして、背後から迫ってくるエヴァの魔法の射手を手にしていた魔法銃で撃ち落していく

エヴァはネギの持つ魔法銃に興味がわいたようだ。茶々丸曰く、ネギは骨董魔法具のコレクターだ
そうだ

ちなみに、俺は飛べないので茶々丸に抱きかかえられている

「~~~~~」

心なしか、茶々丸は嬉しそうだ

「少しは考えてきたようだな」

エヴァは、このことに関しては無視のようだ

「まあ、ほとんど脱がされたみたいだけどな」

俺達はネギを後ろから追うが、裕奈と佐々木は先回りさせている

先回りしていた佐々木はネギの杖の上に乗し、見事なバランスで蹴りを繰り出し、裕奈は何故かバスケットボールをドリブルしながら空中にいる二人に投げつけた

ボールは見事に二人に当たったが、佐々木は少し回復が遅かったらしく、ネギはその好きに佐々木を校旗の旗に当て佐々木と裕奈を同士討ちさせた

「アハハハハ、本当によくやるじゃないか。あのボーヤ」

「茶々丸、残り時間は？」

俺は、停電復旧時間が気になり茶々丸に問う

「停電復旧まで後72分21秒です」

「そうか、エヴァ！」

「わかっている！そろそろ、決着をつけてやろう！」

エヴァは詠唱を始める

「ニウイス・カースス
氷爆！！」

「あうっ」

ネギは魔法障壁でエヴァの魔法を防ぐ

なんか変だ

「エヴァ、なんかあの橋に誘われてる気がするんだが」

「ああ、おそらくトラップでも仕掛けてあるんだろう」

「どうしますかマスター？」

「いいだろう、誘われてやろうじゃないか」

「おいおい」

「こおる大地」
クリュスタリザティオー・テルストリス

今度は防ぎきれず魔法の余波でネギは橋の上に投げ出される

「なるほど、この橋は学園都市の端。私は呪いで外には出れない。
ピンチになれば学園の外に逃げればいいか」

エヴァが橋に下り続いて茶々丸と抱きかかえられた俺も下りる

「意外にせこい作戦じゃないか え？先生」

ゆつくりとネギに向かい歩いていく

「これで決着だ」

そして、そのまま数歩進むと

「「「!!」」」

足元が光だし魔方阵が浮かび上がる

「なっこれは！」

魔方阵から光の紐のようなものが現れ

「・・・・・・！」

俺たちに絡み付いてくる

「捕縛の結界だな」

俺達は捕縛された

「やったー！ひっかかりましたね、エヴァンジェリンさん」

自分の作戦がうまく言ったことに喜ぶネギ

「もう動けませんよエヴァンジェリンさん！これで僕の勝ちです！」

しかし、ネギよ

「さあ、おとなしく観念して、悪いことも、もうやめてくださいね」

「・・・・・・・・やるなあ、ぼうや。感心したよ」

詰めが甘いぜ

「ふ・・・・・・・・アハハハハ」

「何がおかしいんですか！御存知のように、この結界にハマれば簡単には抜け出れないですよ」

「そうだな、本来ならここで私の負けだろうが・・・佑太！」

「え？俺？茶々丸じゃなくて？」

「お前はまだ何もしてないだろう少しぐらい働け！時間は十分与えただろう」

「はあゝわかった・・・・・・・・よ！！！」

捕縛の結界を力任せに砕く

「な・・・・・・・・えええ！！！」

さすがのネギも驚きだろう

なんせ、力任せで結界を壊したんだから

「本来なら、茶々丸の結界解除プログラムがあつたのだが、たまにはこいつにも働いてもらおうと思つてな」

話しながらも捕縛していた光の紐が粉々に崩れていく

「えっ！そんな、ウソずるい！」

いや、エヴァは15年間、この類の呪いを受けてたんだから研究や対処ぐらいはしてるだろう

慌ててネギが魔法を使おうとするが茶々丸がネギから杖を奪いエヴァに渡す

エヴァはその杖をあつさりと捨てる

あの杖はネギの父親、サウザンド・マスターの杖だ

それを捨てられたことで、ネギはすでに半泣きだ

そんなネギを捕まえ血を吸おうとすると

「こらーーーーー！」

学園側の橋の方から二つの影がこちらに走ってくる

「フン、来たか。ボーヤのパートナー神楽坂明日菜とボーヤの妹であるエリカ・スプリングフィールド」

「茶々丸！佑太！」

「ハイ」

「あいよ」

迎撃すべく俺と茶々丸が二人に向かい駆け出すが

「カモ！」

「合点！姐さん！」

まずい！あれは

「オコジョフラッシュ」

マグネシウムとライターの火で閃光を起こす

「ごめん茶々丸さん佑太」

だが、

「なめるなよ、アスナ！」

目を閉じて閃光を交わした俺はアスナを足止めをしようとするも

「甘いのはあなたよ佑太」

後ろから杖でなぎ払ってくるエリカさんの姿が

「くっ」

避けるのは無理だと判断して籠手で杖を受け止めるも

「はあっ！」

続けざまに放たれた蹴りを腹に受けダメージを逃がすために後ろに飛ぶ

「ぐっ」

あ、エヴァもアスナから蹴りを貰ったらしい……あいつ、俺が言ったこと忘れたな

一瞬、目を切りエヴァを見た隙にネギ達の姿を見失う

「くっ！どこだ！」

辺りを見回していると柱の影から光があふれる

「そこか！」

さて、いよいよ本番か……

二十三時間目「学園都市大停電・前編」（後書き）

次回は久しぶりの戦闘・・・上手く書けるかな・・・

二十四時間目「学園都市大停電・後編」(前書き)

だいぶ時間が空けてしまいましたが新年一発目の投稿です。

二十四時間目「学園都市大停電・後編」

日は落ち、欠けた月が真祖の吸血鬼の少女とその従者＋1を照らす

相対するのは幼き魔法使いの兄妹とその従者

ここは、学園都市の端に位置する大きな橋

そこで、二組は相対し決着の時が迫る

二十四時間目「学園都市大停電・後編」

エリカ side

「勝負は開始から十秒・・・いえ、二十秒以内に決めないとこちらが圧倒的に不利ね」

「二十秒ってエリカちゃん」

「いくらなんでも、きついよエリカ」

「いや、エリカの姐さんの言ってることは、あながち間違っちゃいねえ」

カモは多少はわかってるみたいね

「相手は、なんてったって吸血鬼の真祖つつう化け物クラスだ。長引けば長引くほど、経験の差が出ちゃう」

さすがに、何百年と生きてきた吸血鬼の真祖、それに比べ、相手が油断してくれているとはいえ、十年そこそこしか生きてない私たちしかも、まともに戦闘をしたことがない私たちじゃ戦闘経験値に圧倒的な差がある

「それもそうだけど、さらに厄介なのがユウタよ」

「佐倉さんが？」

「ええ、彼の武器は十秒ごとに自分の力が倍になるの」

「？なにか問題があるの？」

「最初はまだいいのよ、ただ、時間が経つごとに1の力が2に、2の力が4に、倍々に上がっていき、そのうちパンチ一発で建物が壊せるようになるのよ」

「……え、マジー！」「」

さすがに驚くか……でも、

「こんなときに嘘言ってもしょうがないでしょ。まあ、さすがに建物を壊せるようになるまでには、少し時間が必要だと思っけど」

「少しって？」

「うん、平均的な男子生徒の力なら、だいたい二分からない位だから・・・大目に見て」

「一分くらい？」

「なら、遅くても30秒にカタをつけるしかないですぜ、兄貴！姐さん」

「う、うん！」

「そうね！」

「さすがに脅しすぎたかしら？でもこれぐらいの緊張感は必要よね！うん！」

「でも、なんでエリカはそこまで佑太さんのことを知ってるの？」

「さすがに、ここまで詳しくしたら気にはなるわよね」

「そえれは、今回のことが終わったら、ちゃんと説明するわ。よし！行きましよう兄さん、アスナさん！」

「「うん！」」

「ちょ、エリカ姐さん！オレっちの事忘れてる！」

気にしないでカモ、わざとだから

そして私たちはエヴァちゃん、茶々丸さん、佑太オモチャの前に立ちふさがった

佑太 side

「ようやくでできたか」

柱の影からあふれた光がやみ少しした後三人が姿を現す

「ふふっ、どうしたばーや、お姉ちゃんや妹が助けに来てくれて、ホッと一息か？」

「うぐっ」

エヴァの言葉に赤面するネギ

「何言ってるのよ！これで3対3の正々堂々互角の勝負でしょ！！」

「そうだな、双方パートナーと協力者が揃い、ようやく正当な決闘というわけだ」

中に飛んでいたエヴァと茶々丸が橋に下りてくる

え？俺？飛べないから元から下にいたけど？

「だが互角かな？坊やは杖が無く、貴様は戦いについて、まったくの素人。まともに相手ができそうなのは、譲ちゃんだけだろうが」

「（ボソツ）茶々丸、アスナは戦いは素人でも運動神経は無駄にいいから、気をつけたほうがいい。それとエヴァ、エリカさんの相手は俺がする。彼女は魔法より体術が主だ。俺が相手の方がいい」

「いいだろう」

「はい、佑太さん」

「行くぞ。私を生徒だということは忘れ、本気で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド、エリカ・スプリングフィールド」

「……はい（ええ）！」

そして、決闘が始まる

一陣の風が吹く

「契約執行 90秒！！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！」

エヴァの詠唱の声をスタートに茶々丸と俺が駆け出す

「ブーステッド・ギア！」

『Dragon booster！！』

体に力が漲りスピードが上がる

「ラス・テル マ・スキル・マギスキル」

ネギの詠唱を止めるために軽めのパンチを繰り出すが

「ふっ！」

俺とネギの間に現れたエリカさんの杖により、力の向きを変えられ流される。と同時に突きが繰り出される

「はあっ！」

「つと！」

それをさつきと同じように、今度は俺が突きの力の向きを変え流すが、流された勢いそのままに、今度は下から上に向かい切り上げてくる。それを体を半身にして交わすも、今度は横薙ぎが襲ってくる。それを両手を交差して受け威力を軽減させるために後ろへ飛ぶ

その途中に周りの状況を確認

茶々丸・・・アスナと相打ち？でアスナは額を押さえしやがみこみ、茶々丸は軽くフラツとしている

エヴァ・・・ネギと同じく詠唱が終わり魔法を打ち合ってる

ヒュッ

「！」

風切り音と同時に横払いで杖が迫る。片腕で防御するために腕を上げるも、内心多少のダメージを
覚悟していたところに

『Boost!!』

タイミングよく二度目の倍化が訪れダメージ無く横払いを防げた。

「くっ！」

防がれたため、杖を引くも

「遅え！」

渾身の力を込めた拳を杖に叩き込む

バキッ！

音と共に真つ二つに折れる杖

「あ・・・」

そして、反対の拳をエリカさんの眼前で止める

「俺の・・・勝ちだな」

「・・・ええ、私の負けよ」

勝負が決したので拳を引き他の戦いに目を向ける

茶々丸とアスナはネギとエヴァの戦いを見ている

そして、空中では同種の魔法、雷の暴風と闇の吹雪を打ち合うネギとエヴァの姿が

「終わりが近いわね」

「ああ」

エリカさんは、俺の横に並び同じように二人の戦いを見ている

少しの間、互いの魔法は互角かに見えたが自力で勝ってるエヴァの闇の吹雪が押し始めた時だった

最後の一手は唐突にやってきた

「は……ハックシユン！」

ネギのくしゃみによって生まれた魔力によりネギの雷の暴風がエヴァの闇の吹雪を押し返した

「……なんつか」

「……兄さんらしいわ、魔力の暴発で打ち勝っちゃうなんて」

打ち返されたことにより生じた光がやみ、そこにいたのは服が全て吹き飛ばされたエヴァの姿

ネギもエヴァの姿を見て赤面してなにか言い合っているが、ここは一言

「おーい、エヴァー！風邪引くぞー！」

「「「そういうことじゃないだろう！後、見んな！」」」

エヴァとアスナから突っ込みを隣にいたエリカさんからはアップーを貰いました

いや、そんな子と言われても

「いや、ガキにや興味ないから」

と言ったら

「殺す！！」

とエヴァさん……ついでに横にいたエリカさんから殺気の籠もった目でにらまれた

あれ？ フォローしたつもりだったんだけど？

「佑太さん、それは………！いけないマスター！戻って！」

橋の上の外灯に光が点る

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い！マスター！」

電氣が復旧するって事はエヴァの呪いも、ちっ！

俺は急ぎ駆け出す

「ちっ、ええい、いい加減な仕事をしおって！」

くそ！

「きゃん！」

エヴァの体が空中で電気を受けたように弾かれ、そのままエヴァは湖へ落ちていく

なる！

橋から飛び、何とか空中でエヴァを捕まえることはできたが

「……俺、飛べないんだったああああああ」

「アホか！貴様！何しに来たんだ！」

「エヴァを助けに来たに決まってるだろうが！」

「なっ……／＼／＼一緒に落ちているは説得力が無いわ！」

「うつせえ！」

やっべ、どうしよう

「………バカが／＼／」

なんかエヴァが小声で言っただけよく聞こえねえや

お！上空にネギと茶々丸の姿が……よし！

「ネギ！エヴァを連れて、すぐにここから離れろ！茶々丸もだ！」

抱きしめていたエヴァをネギの方へと投げる

ネギの方が近かったからな

「なっ！」

「えっ！」

エヴァは投げられたことに、ネギは俺の行動に対して驚きの声を上げる

ネギが無事、エヴァを抱えた

そこまで見て今度は水面の方に向く

うお、もうすぐそこかよ！

「佑太ー！」

『Boost!~!』

・・・タイミングは一瞬

そこを見逃すな

後、2m・・・1.5・・・1・・・0.5！

ここだ

「はあ！」

『Explosion!!』

ブーステッド・ギアから響く声と同時に水面を殴りつける

殴られた衝撃で跳ね上がる水に包まれ俺は湖の中へと消えていった

二十四時間目「学園都市大停電・後編」（後書き）

一月以上更新が止まってしまっていたことを、まずはお詫びします。就活、卒研、p cの故障などいろいろと年末に重なってしまい。小説を書くことが出来ませんでした。ようやく、時間が出来ましたので再び更新を再開いたしました。こんな作者ですがこれからも温かい目で見てやってください

i c

二十五時間目「学園都市大停電・裏」(前書き)

投稿します

二十五時間目「学園都市大停電・裏」

これは、エヴァとネギとの決闘が行われていた話の裏側

学園都市の停電により封印が弱まったのはエヴァだけではなかった。

同時に魔帆良学園に張つてある結界も弱まり、魔帆良の守りが最も弱まる日

それにより、もっとも敵の襲撃がある日

そのため、学園に存在する魔法先生、生徒はその襲撃から学園を守るため戦っていた

そして、ここにも学園を守るため奮闘している魔法生徒たちがいた

二十五時間目「学園都市大停電・裏」

私、佐倉愛衣は今、大変な状況にいます。

学園都市のメンテナンスの日で、魔帆良学園の結界がなくなる日

年に2度あるらしいんですが、私は今年が始めての参加です。

パートナーはいつもと同じく、高音・D・グッドマン先輩。

私がお姉様と慕っているお方です。

最初は、いつもやっている夜の警備の延長かと思いましたが、出鼻からまったく違つと痛感されました。

だつて・・・

「くつ、数が多すぎますわ！百の影槍！！」
ケントウム・ランケアエ・ウンブラエ

「魔法の射手炎の九矢！後数分で学園の結界が戻ります。がんばりましょう！お姉様」
サギタ・マギカ セリエス・イグニス

こんなに、たくさんの魔物が襲撃してくるなんて、思っても無かつたよ（涙）

「そうね愛衣！」

お姉様と私は励ましあいながら、次々と魔物を消していく

数は減つてるけど、このままじゃ・・・

「学園の防衛に当たっている全魔法教師ならびに魔法生徒に連絡じや。少々早いが30秒後に学園の結界を復活させる。厳しいと思うがそれまで耐えてくれ」

学園長からの念話が聞こえた！

「お姉様！」

「ええ、私にも聞こえましたわ。気を引き締めなさい、愛衣。ここは絶対に守るわよ！」

「はい！」

負けられない、こんなところで挫けてちゃ、立派な魔法使いになんてなれない。

それに・・・会った！もう一度お兄ちゃんに！

絶対に見つけるんだ！

「メイプル・ネイプル・アラモード ものみな（オムネ）焼き尽くす（フランマンズ）浄北の炎破壊の王に（ドミネー エクスティンク）して（ティオーニス）再生の（エト シグナム） 徴よ（レゲネラティオーニス）我が手に宿りて（イン メアー マヌー エンス）敵を喰らえ（イニミークム エダット）紅き焰！！！」
フランマンズブルガートゥス
フラグランティア・ルビカンス

私が今、唱えられる呪文の中で一番威力のある魔法！

爆炎がこの場にいた魔物全てを包み込んだ

「結界を発動した！これ以上の増援は無いじやろう！」

よかった、さっきのでもう魔力が無くなちゃったただよね

「お疲れ様、愛衣。よくやったわね」

「えへへ／＼」

お姉さまに褒められた。嬉しいな

「でわ、この場はもう、大丈夫でしょう。学園長に報告に行きますわよ」

「はい」

立ち上がりお姉様の後を追う……が、

「なんだよ、いきなり呼び出されたと思えば、こんなチンチクリンのガキしかいねえじゃねえかよ」

「「!!」「」」

いきなり背後から聞こえた声に振り向くとそこには黒いスーツを着た男性

「つつたく、せつかく神滅具の気配がしたから来たのに、いたのは乳臭いガキが二匹」

「なっ!」

「ち、乳臭いですって!」

私たちは男の言葉にカチンしました

「ま、いいや。おい、ガキ共！」

しかし、そんな怒りは、次の瞬間

「・・・・・・・・・・暇つぶしに付き合えや」

男から漏れ出した魔力により

「っ！」

「あっあっ・・・・・・・・」

恐怖に支配された

「いかん！逃げるのじゃ！高音君、佐倉君！そ奴は上位の悪魔じゃ
！」

「じよ、上位の悪魔・・・・」

そんな、中位の悪魔でさえ私にはギリギリなのに、上位なんて

「すぐに、タカミチを・・・」

「ちっ、うるせえな、邪魔だよ」

男から一瞬、強い魔力を感じたと思ったら

「学園長？学園長！」

「悪いが、ここら辺いつたいに妨害の結界を張った、念話はもう使えねえよ」

「そんな！」

どうしよう、念話が使えないと学園長に状況を報告できない

「くつくつくつ、いいねえ、その絶望した顔・・・そそるぜ」

「くつ！私を甘く見ないでください！愛衣あなたは離れて休んでいなさい」

「そんな、お姉様！」

一人で上位悪魔に挑むなんて！

「あなた、さっきの魔法で魔力が無いのですよ」

「あつ」

そうだ、最後に唱えた紅き焰で私の魔力は・・・

「休んでいなさい。高畑先生が来るまで何とか持ちこたえて見せますわ！」

そうだ、学園長もこの事に気づいて高畑先生に連絡して来てもらうって

「いいねいいね、姉妹愛ってやつ？僕は感動しちゃったよ」

男はワザとらしく涙を拭くフリなんてしてる

「その気持ちに賞賛して、もし僕に一撃でもくらわせられたら、見逃してやるよ」

「なんですって・・・」

「まあ、無理だと思うけど・・・ね!」

その言葉と共に足元から次々に現れる鬼

「さあ、この食人鬼^{グール}を倒して僕に一撃与えてみな」

その数は数十匹。ただでさえ戦いの後なのにこれじゃ・・・

「愛衣、諦めてはだめよ! 行きますわ! 黒衣^{ノクトウルナ・ニグレイディニス}の夜想曲!」

お姉様の背後に巨大な黒衣の仮面を付けた使い魔が現れる

お姉様の最強奥義

「行きなさい!」

使い魔の背後から多数の影の槍が変幻自在に繰り出され次々とグール達を貫き倒していく

「はあああ!」

お姉様の攻撃は止まらない休む暇無く続いている

「……ふむ」

いい感じだこれなら……

「これで……ラスト!」

最後のグールを倒したお姉様はそのまま、男に向かっていく

「さあ、あなたを守る兵はいなくなりましたわ!これで……」

このまま行けば

「終わりですわ!」

十数本の影の槍を一つの大きな槍に変化させ、突っ込むが

「この程度か」

それをあっさり掴む

「な!」

「そんな」

あれを受け止めるなんて

「拍子抜けだ」

そういうと男はお姉様を放り投げ

「燃え尽きな」

青白い炎をお姉様に向かって放った

「え？っ！きゃああああ」

「お姉様！」

投げ飛ばされたお姉様は私の目の前まで来ていた

炎は幸いにも使い魔の服のおかげで制服が燃え尽きるだけですんだ

「お姉様！しっかり！」

「うつ・・・愛衣・・・っ！」

体を強く打ったことによるダメージもあるらしく顔をしかめている

「逃げなさい愛衣」

「え・・・」

「私を置いて早くここから逃げなさい」

「そんな！」

お姉様を見捨てろって事！

「お兄さんを探すのでしょ・・・でしたら、早くここから逃げなさい」

「お姉様……」

こんな時にまで、私のことを思ってくれるなんて……でも

「逃げません」

「愛衣……」

「私はお姉様を見捨てるなんてできません。それに……」

もしも、お兄ちゃんなら

「私の大切な人を見捨てるなんて事、絶対にしない!!」

だよね、お兄ちゃん!

お姉様を横に寝かせ、男の正面に立つ

「愛衣……」

「私は諦めない!今度は私が相手です!アデアット!」

アーティファクトを呼び出し構える

「……一度目はいいさ……けどな」

男の姿が歪む

「二度も、人間の馴れ合いなんぞ、見せんじゃねえええ!!」

背中から黒い大きな蝙蝠のような翼が頭の左右からは振れた角、腕は太く巨大に、身長は先ほどの倍くらいにまでになった

人の姿から悪魔の姿へ

「殺してやるよ！二人まとめてなあ！」

悪魔の姿が消えたと思うと全身に衝撃が走り続いて背後に何かがぶつかった、

「かはっ」

そのまま地面に座り込む

そして、ようやく自分が殴り飛ばされ木にぶつかったことがわかった

「愛衣い！」

お姉様の声が聞こえる

顔を上げると悪魔が目の前にいて、腕を振り上げている

「死ねよ！」

「Kっ！ふ、紅き焰！！！」
フラグランティア・ルビカンス

無詠唱で魔法を唱える

「うお！」

悪魔が炎に包まれるが

「やっぱり、この程度の炎しか出せないのか」

何事も無かったようにたたずんでいる

「悪あがきは済んだな．．．ちょっと、あつかったぜえええええええ！」

再び拳が迫る

ああ、私、死ぬのか．．．．．

「助けて．．．．」

涙がこぼれ、今までの事が走馬灯のように頭の中を駆け巡る

「助けてよ」

お姉様、友達、両親、そして．．．．

もう一度．．．会いたかったな．．．

「お願い．．．」

お兄ちゃん．．．

「助けて！おにいいいちゃあああん！！！！」

目をつぶり助けを求め叫ぶ

奇跡を信じて

私の・・・

最愛の人の名前を叫んだ

そして・・・

その声は・・・

「うちの妹に何してくれようとしてんだ」

届いた

何かを殴り飛ばす音が聞こえ目を開くと

「よう！無事か？」

大好きな人が

あの頃と変わらない優しい笑顔で

「愛衣」

そこに立っていた

二十五時間目「学園都市大停電・裏」(後書き)

エヴァ編まだ続きます

二十六時間目「再会した兄妹」（前書き）

久々の投稿です

二十六時間目「再会した兄妹」

「しかし、あの高さから落ちて、よく無事だったわね」

アスナが不思議そうに呟く

「いくら下が湖だって、普通は死ぬ高さですよ」

エリカさんが呆れたように呟く

「佑太さんってすごいんですね！」

ネギが憧れを抱くような目で見つめるのはいいが、いつの間に呼び方が変わったんだ？

「ご無事で何よりです。ごしゅ．．．佑太さん」

茶々丸が安心した声で．．．今、なんて言おうとした？

「やはり、バカなんだろう．．．フンッ」

エヴァさんやそんな半泣きの状態で言われたら．．．

「いや、誰かさんと違って俺はカナズチじゃないし、ちゃんと考え合っでの行動だから。誰かとは違うんだよ、誰かとは！！」

弄りたくなっちゃうじゃないか

「ほう……よほど、氷像になりたいようだ……」

エヴァの右手に魔力が溜まる

「あ、あの、エヴァさん？あなた封印の呪いで魔法が使えないはずじゃ……」

「何故だろうな？貴様に対してだと、自然と使えるんだ」

「いや、さすがにびしょ濡れの状態でエヴァの氷雪系の魔法喰らったら……」

「うん、芯まで凍りつくだろうな」

あらま、かわいい笑顔ですこと

うん、俺、おわたわ＼（＾０＾；）／

……『お兄ちゃん！』

「！」

今の声って……

「エヴァ！緊急事態じゃ！手を貸してくれ」

「ん？「何か用かジジイ？」」

エヴァが念話を始めたが相手はわからない……しかし、なんであいつの声がしたんだ？あいつはアメリカにいるはずじゃ……けど、

なんでこんなにいやな予感がするんだ？

「上位悪魔が魔帆良に侵入した！生徒が二人遭遇し、その直後に念話妨害の結界が張られた！」

厄介ごとか？・・・何だ？あつちから禍々しい気配がする・・・

「何だと？どこだ？」

だめだ、いやな予感が止まらねえ

「そこから2キロほど西じゃ！高音君と佐倉君が担当の場所だ！」

「西か・・・しかし、よりによってあいつらとは・・・」「エヴァ、悪い！ちよつと行ってくる！」あ、おい！」

いやな予感が止まらないんだ！

『Dragon booster!!』

ブーステッド・ギアを発動し、駆け出す！

早く、速く！

カードを出し、額に当てる

「「裕奈！アキラ！」」

俺のパートナーの二人に呼びかける

「え？佑太？」

「ど、どうしたの？急に？」

よかった、まだ起きてたか

「緊急事態だ！下手したら、二人を呼ぶかもしれない！」

「「え？」」

「心の準備だけはしといてくれ」

「「わかった！」」

念話を終えさらにスピードを上げる！

全速力で走りながらも遅いと感じてしまう！

見えた！

「！なんで、ここにいるんだよ！」

早くないか？いや、新学期を向かえたから時期的にはちょうどいいのか

「くそっ！」

あいつの泣いてる顔が頭に浮かぶ

決めたんだ！

守ると！

泣いてるんだ、俺を呼んでるんだ！

だから・・・

大切な！

「うちの妹に何してくれようとしてんだ」

妹に、愛衣を泣かすんじゃないー！

愛衣に迫る黒い脅威に

『Explosion!!』

全力の拳を叩き込む！

吹っ飛ぶ姿を確認した後

「よう！無事か？」

数年ぶりに会った妹に

「愛衣」

数年ぶりに笑いかけた

「お、お兄・・・ちゃん？」

瞳に涙を浮かべ、こちらを見ている

やべえ、普通に可愛いんですけど

「ああ、久しぶりだな」

「お兄・・・ちゃん・・・」

愛衣の顔がクシャリと崩れる

「大きくなったな」

しゃがみこみ、愛衣をそつと抱き寄せる

「お兄ちゃん!!」

すると、愛衣も俺に抱きつき泣き始める

「お兄ちゃん！お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん・・・」

「つたく、大きくなっても泣き虫なのは変わらないな」

「だつて、やつど・・・やつど、あゝえだんだばん」

あゝあ、鼻水まで垂らしちゃって

「そっか」

出来るだけ優しい笑みを浮かべ、頭を撫でてやる

「うん！」

さらにキツク抱きついてくる愛衣

あ~~~~癒されるなあ

「避けなさい！」

「！」「」

突如聞こえた声に反応し、咄嗟に愛衣を抱えたまま横に飛ぶと、瞬間、先ほどまでいた空間を炎が支配した

「まったく、折角の兄妹の再開だったのに……空気読めよな、脱げ女！」

と、相手を警戒しながら少し離れた所で少し体を起こしている服を着てない女に向かって言う

「ぬ、脱げ女って……危険を知らせてあげたと言っのに……って、こっちを見ないでください！！」

「まったく、その年で、露出に目覚めるのはどうかと思っぞ」

愛衣を抱えたまま脱げ女……もとい、高音に近づく

「み、見ないでください」

愛衣と離れ、上着を脱ぎ

「ほら、少し濡れてるから冷たいと思うが、着てろ。目のやり場に困る」

ぬげ・・高音に渡す

「あ、ありがとう／＼／」

ま、すっかり脳内メモリーには保存してけどな

「ぎやはははははははあははははははははははははあは」

下品な笑い声が響く

「あつた！あつた！ホントにあつた！」

「何が目的で来たかは知らなえが、うちの妹を泣かしやつがて・・・ぶっ飛ばす！」

『Dragon booster!!』

愛衣と高音を後ろに庇いながら、再びブーステッド・ギアを起動させ倍化を始める

「はははああ・・・俺を呼んだ奴の目的なら、魔帆良に進入することだったらしいぜ、まあ俺がすでに殺したからどうでもいいが

な。そして、俺の目的ってのは……」

言葉を区切り視線を俺に……いや、俺の腕に向けた

「くつくつく……、本当にあるとは思っても見なかったがな……
なあ、くれよ」

まさか、こいつの目的ってのは

「くれよ、それを……神滅具を！赤龍帝の籠手フーステッド・ギアをよおおおお
！！」

叫びと共に地中から数十匹のグールがでてくる！

こいつの目的は、俺のアーティファクト・赤龍帝の籠手か！

「誰がやるか、バカたれ」

グールの集団に向かい駆けだす

「ぶっ飛ばす！！」

愛衣 side

再開は突然だった

探していた人は、会いたかった人は、近くにいた

会いたくて会いたくて、想い続けた人は魔帆良^{まほ}にいたんだ

お兄ちゃんが行方不明になって数年、やっと会えたお兄ちゃんは昔よりも背が大きく、昔よりもカッコよくなっていたけど・・・

私に向けたあの笑顔は・・・

抱きしめてくれた時感じた、あの温もりは・・・

「・・・変わってないな」

大好きなお兄ちゃんのままだった

「ぶっ飛ばす!!」

大量のグールに向かっていくお兄ちゃん

その姿に・・・

その背中に・・・

私は目が離せなかった

危ない!と叫ぶつもりだった

お兄ちゃんは魔法が使えないのだから

一般人と変わらないのだから

が、その言葉を飲み込んでしまった

大量のグールが宙に舞っているのだ

たとえるなら嵐がグール達の集団を吹き飛ばしているように

そして、その中心には魔法が使えないはずのお兄ちゃんがいる

「すごい……」

お姉様も、お兄ちゃんの姿に目を奪われている

殴り、蹴り飛ばす

その勢いは止まらず、まっすぐに悪魔に向かって進んでいく

「ちっ……燃えな」

悪魔は再び青い炎をお兄ちゃんに向かい放つ

「くっ！」

お兄ちゃんはそれを正面から受けてしまう

「お兄ちゃん！」

魔法が使えないという事は魔法に対する防御も使えないと言つこと

そんなお兄ちゃんがあんなモノを受けたら

「・・・・・・・・あつついわ!」

何事も無かったように出てきた・・・・・・・・って

「えええええええええ!」

おもわず驚きの声を挙げてしまう

そして、何事も無かったかのようにグール達を倒し始めた

「・・・・・・・・愛衣」

「・・・・・・・・はい」

「あなたのお兄さんは、魔法を使えないはずではなかったのですか
?」

「そのはず・・・・・・・・なんですけど」

もう、訳がわからないよ

でも・・・・・・・・

「かつこいい・・・・・・・・」

「え?」

お姉様？

「あ、ち、す、すごいわね、あなたのお兄さん」

「あ、はい」

お姉様、まさかお兄ちゃんに……まさかね

「だ〜！うつとおしい！」

お兄ちゃんがグールの集団から抜け出し私達のそばに戻ってきた

「もう終わりかい？」

「うつせえ、ちょっと休憩だ」

たしかに、お兄ちゃんは強いってわかったけど、相手が多すぎるよ

「はあ〜仕方ない」

お兄ちゃんはポケットから二枚のカードを取り出し額に当てる。あれって……

「準備はいいな！」

カードが空中に舞う

「召喚！！佑太の従者 明石 裕奈！大河内 アキラ！」

二つの魔方陣が描かれ光が溢れる

お兄ちゃん・・・仮契約してたんだ・・・後で、
A S I しなぎゃ O H A N

s i d e E N D

二十六時間目「再会した兄妹」（後書き）

だいが空けてしまい申し訳ありませんでしたm（
—
—
）m

二十七時間目「デビュー戦」(前書き)

長い間更新できずにすいませんでした。
短めですが書きあがったので投稿します

二十七時間目「デビュー戦」

いやゝ、一人で何とかなるかなって思ってたけど

「だゝ！うつとおしい！」

多すぎるんだよ！クソツたれ

グールの群れから一時離脱した

「もう終わりかい？」

「うつせえ、ちょっと休憩だ」

倒すたんびにホイホイ召喚しやがって！

「はあゝ仕方ない」

本当は一人でカタつけるつもりだったんだがな

「準備はいいな！」

「「えつ、ちょ、ちょっと待って！」」

悪いな緊急事態だ

「召喚！！佑太の従者 明石 裕奈！大河内 アキラ！」

目の前に魔方阵が二つ描かれる

後に思う、この時少しでも待ってやればこんなことにはならなかったんだ

魔方阵が一際強く輝くと、そこには俺の従者でありクラスメートの大河内アキラと明石裕奈が現れた・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・メイドさん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・メイドですわね」

メイド服を着て

「・・・・・・・・だから、待ってって言ったのに」

「うっうっ／＼／」

「戦うメイドかぁ・・・・・・・・・・アリだな！」

「「「「無いわよー!!」「」「」」」

二十七時間目「デビュー戦」

「……………終わったか？」

悪魔がイラついた様子でこちらを睨んでいる

あゝあ、あんなにイラついちゃって

ここは……………

「もうチヨイ待って！裕奈、二人にあれを」

「りょゝかい！アデアット！」

裕奈の手に双銃が現れ、それを高音と愛衣に向ける

タタン！！

「きゃ！」

「くっ！」

撃った！

「お、お兄ちゃん……………なんで……………」

「っ、どういっつもりですか」

愛衣は呆然と、高音は睨みつけるように俺たちを見るが……………

「どうしても何も、回復させてるんだが、痛くは無いだろ？」

「え？・・・あれ？」

「本当に痛くありませんわ」

「それが私のアーティファクト、嵐の双銃の力だよ。複数の種類の弾丸が撃てるの！今二人に撃つたのは活性の効果が付与された魔弾、肉体を活性させて自己回復力を上げてるんだ！」

まあ、いきなり撃たれたら、あんな反応するわな。しかし、嵐に活性とは、他の効果もなんとなく

「いい加減にしやがえええええつええええ
×!!!!!!」

あらら、我慢できずに殴りかかってきやがった

「アキラ」

「うん」

アキラが俺達の前に立つ

「アデアット！」

アキラの周りに水色の羽衣が現れる

「まずは小娘！てめえからかあああ！！！」

悪魔が拳に魔力を込めてアキラに殴りかかる！

「・・・・・・・・流水」

アキラが呟くと同時に悪魔の拳がアキラの横の空を切る

「！！！」

「チャンス！」

己の拳が当たらなかったことに驚愕している悪魔の隙を突き、裕奈が銃を乱射する

「ちっい！」

それをギリギリで交わし元いた場所、大量のグールを挟んだ反対側に戻った

「・・・・・・・・どういうことだ、俺の拳は確かにその小娘を殴りつけたはずだ。それなのに、何故！」

「これが、私のアーティファクト、流水の羽衣の力。水と流れを操る能力」

「水と流れ・・・・・・・・だと？」

そう、アキラのアーティファクトは水を操れるだけでなく、流れも操れる

今のは単純にアイツの力の流れを逸らしただけ・・・・・・・・ある意味、

絶対防御じゃね？

「くっ、グール共！！」

「「「「あゝあゝあゝあゝ「「「「

大量のグール達が襲い掛かってきた

「こいつら任せていいか？」

「うん」

「わかった！親玉は任せたよ」

「たく、初戦闘のはずなのに、まったく緊張して無いし」

「こんな奴ら、いつも佑太をお仕置きしてるエヴァちゃんに比べたら何でも無いし！！」

「うん」

「アキラまで・・・・・・・・・・・・・・・・あれ、何だろっ目から汗が出てきた」

裕奈 side

怖くないわけが無かった

佑太に呼ばれて来て最初に見たのは、たくさんのゾンビみたいな鬼とその後ろでこちらをニタニタと薄気味悪い笑みを浮かべた大きな悪魔

怖かった、逃げたかった……けど

「こいつら任せていいか？」

佑太の言葉が、佑太に頼られた事が……

「わかった！親玉は任せたよ」

私の中から恐怖を取り除いてくれた

やばいな、顔がにやけちゃうよ

だから、

「こんな奴ら、いつも佑太をお仕置きしてるエヴァちゃんに比べたら何でも無いし！！」

照れ隠しに軽口を叩く

よし！裕奈ちゃんのデビュー戦しっかり見ててね

裕奈 side END

高音 side

最初は啞然としてしまった

あの方、愛衣のお兄さんが呼んだ従者がメイド服を着て現れたのだから

彼ほどの実力者がどのような人達と仮契約してるのか気にもなりませんでした

しかし、現れたのは彼と同じ年くらいのメイド服を着た少女達

おそらく、最近仮契約をしたばかりなのだと思います、すこし落胆してしまいましたが、その考えはすぐに書き換えられました

裕奈さんは、グール達の中に飛び込んだかと思うと両手に握った銃で次々とグールを撃ち

抜く姿は、嵐のようで、アキラさんは歩くような速さでグールの密集地帯に入っていったと思うとヒラヒラと攻撃をかわしながら同士討ちを誘っていく、その姿は流水のようだ

「すごい」

私はその姿に目を奪われてしまった

「あゝん！もう、埒が明かない！アキラ！」

「うん」

二人は一度下がると裕奈さんがアキラさんに向かい銃を向ける

「一気に決めるよ!」

その言葉と共に黄色の魔弾を二発アキラさんに撃った

すると、アキラさんから感じる魔力が急激に上がり彼女の周りが青く光っている

「っ!.....よし!佑太君、裕奈下がって」

彼と裕奈さんが私達の目の前まで下がってくる

一人その場に残ったアキラさんにグールの群れが襲い掛かってくる

「.....水鞭」

アキラさんを中心に大量の水の水鞭が現れグール達を切り裂いていった

私の影槍の水バースジョンってところかしら、まだ完全に制御が出来ないらしく鞭の動きがランダムだ

それでも、相手は知能の無いグール闇雲に向かって来るだけなので、結果グール達は全滅

アキラさんはその場に座り込んでしまう

「ちょっと、無理しすぎちゃったかな」

力を使い果たしてしまったようだ

その事に悪魔も気づきアキラさんに狙いをさだめ、

「死ねえ！小娘っええ！」

炎を放つが

「させると思うか」

私の横にいたはずの彼がアキラさんに向かってきていた炎に突っ込む

「お兄ちゃん！」

「あなた！」

私と愛衣は声を上げてしまう

さつきは大丈夫だったとはいえ、次も平気とは思えないが

炎は彼に当たる直前に破裂してしまった

「何故！」

悪魔も驚いてるようだ

「俺が何のためにてめえをイラつかせて時間を稼いでいたと思う？」

『Boost!!』

彼の両手の籠手が赤く光り輝いている

「ぶ、赤龍帝の籠手フーステッド・ギアああああ！！！！！！！！」

「正解だ！」

『Explosion!!』

光が収縮し彼の拳が赤く輝く！

「ぶっ飛びやがれ！！」

「ぐぼお！」

拳が顔面に当たり悪魔が木々をなぎ倒しながら吹っ飛んで行く

「ふうー一著上がりつてか」

振り向いた彼の顔は笑顔で月光に照らされたその笑みに

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／」

私は見惚れてしまいました

二十七時間目「デビュー戦」（後書き）

就職やら引越しやらで更新できずすいませんでした。

久々に書くのがいきなり戦闘シーンだったので、なんか中途半端な無いようになってしまいました。次回の更新は未定です

お知らせ

まずは長期にわたって更新できず申し訳ございませんでした。

大変かつてながら、本小説の更新を停止させていただきます。

私ごときの小説の更新をお待ちしていただいた方々には、大変申し訳なく思います。

今後、この小説をどうするかはハッキリとは決まっていません。

考えとしては、設定や内容を一掃し書き直すか、このまま本小説を削除するかになります。

このまま、続きを書く可能性もありますが、確立はかなり低いです。

今後の活動としては、オリ主である彼の能力を変更し、他の作品の二次小説をリハビリとして書いてみようとも考えています。

最後に、私ごときの小説を読んでいたいただいた皆様に感謝と謝罪の言葉を申し上げます。

私めの小説を読んでいたいただきありがとうございます。

そして、更新をお待ちしていた皆様、大変申し訳ございませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8056k/>

魔法先生ネギま！～麻帆良に現れし赤龍帝～

2011年10月4日20時23分発行